

- (4) 弥生時代： 調査区南端に自然堤防が形成されたため、相対的に低くなった調査区北半は後背湿地となる。その結果、腐植質の強い土壌層（第6層）が形成される。調査地すぐ北側の若宮遺跡第1～4地点で確認された弥生時代中期初頭の遺物包含層と同一の層である可能性が考えられる。しかし、今回の調査では、当該期の遺構・遺物は確認できなかった。また、弥生時代後期には第6層を切り込んで溝（第5層）が掘削される。
- (5) 古代： 洪水起源の堆積層（第4層）により後背湿地は埋没する。後に第4層は水田として利用され、土壌化する。この洪水による堆積で、後背湿地はほぼ埋没し、調査地の平坦化がすすむ。
- (6) 中世： 調査区北側を中心に洪水起源の堆積層（第3層）が堆積する。後に第3層は水田として利用され、土壌化する。この洪水による堆積で後背湿地は完全に埋没し、調査区周辺はほぼ平坦化する。
- (7) 近世： 洪水起源の堆積が数回認められるが、その度に水田として再び利用される（第2層）。さらに、今回の調査の成果を集約すると以下の通りである。
- ①弥生時代後期の溝を検出した。若宮遺跡で当時期の遺構は今回が初めてである。さらに、土器の出土状況から、この溝は方形周溝墓の一部である可能性が考えられる。
- ②弥生時代後期の遺構は、調査地南側にも広がることが今回の調査で明らかになった。弥生時代中期初頭には調査地北側の若宮遺跡第1～4地点付近が居住域であり、弥生時代後期になって今回の調査区南側付近に墓域を築くようになった可能性が考えられる。 (山田・服部)

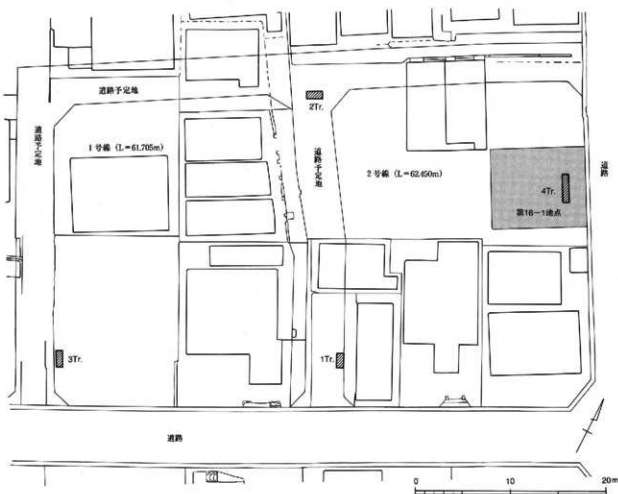
6 第16地点（道路・換地用地全体）の確認調査

1) 調査に至る経緯

震災復興住環境整備事業（若宮町住宅建設事業）の一環として街区内の市道整備は不可欠であった。道路整備の計画は、幅4.0mで東西南北L字形に90.0m、派生道路が幅4.0mで南北に33.0m予定された。第16地点（芦屋市若宮町63-2の一部他15筆，事業地面積590㎡）は市道153・334号線整備開闢関連事業全体を含み、道路予定部分については、まず確認調査が実施された。この確認調査は、森岡秀人・若林純也が担当者となり、平成11年2月1～8日に行った。また、この事業については、宅地1筆分が市の換地計画に該当し、85㎡分を早急に供給する必要が生じたため、この宅地部分には枝番を付け、16-1地点と呼称して確認調査を実施した。

この調査は森岡と若林が担当し、平成11年1月28日に行い、本調査必要の結果を出した。

なお、この調査に関する文化財保護法上の手続きは、事業者（芦屋市長 北村春江）から芦計開第147号（平成10年12月21日）により法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘通知書が文化庁長官宛提出され、芦教文第109号（平成10年12月28日）により芦屋市教育長 三浦清から兵庫県教育長に送達している。（森岡）



第185図 第16地点 道路部分確認調査トレンチ配置図 1/400

2) 調査の方法

確認調査は、街区内道路新設が予定された事業地を対象として第185図全体計画図で示した道路予定域の要所にトレンチ3か所を設定し、工事深度を配慮し、それぞれ現地表面より1.1m～1.4mまで掘削を行った。掘削は人力による分層発掘を行い、遺物・遺構の発見に努めた。トレンチは掘削順に通し番号を付した(1～3)。

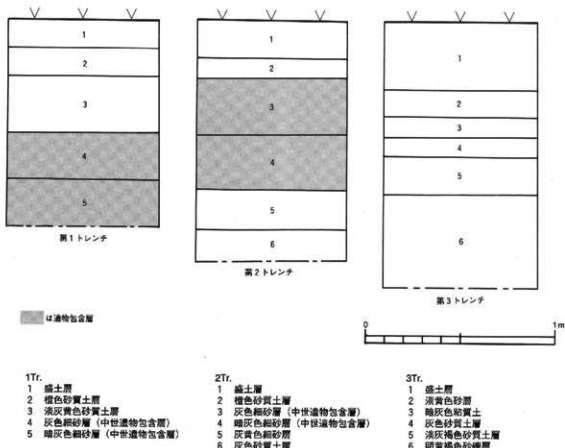
各トレンチは、第1・第3トレンチは長さ2m(南北)、幅1m(東西)の規模で、第2トレンチは長さ2m(東西)、幅1m(南北)の規模である(第185～194図)。

また、宅地予定部分については、敷地の東寄りの場所に、幅1m、長さ3.9m程のトレンチを南北方向に設定し、東壁について土層データを作成した。これを第4トレンチと呼称する。(森岡)

3) 層序と所見

確認調査の結果は、柱状土層図と土層断面実測図で示した。第186図が道路部分の第1～3トレンチ、第195図が宅地に設定した第4トレンチの土層図である。

第1トレンチは、上から順に盛土層(層厚15cm)、橙色砂質土層(層厚15cm)、淡灰黄色砂質土層(層厚30cm)、灰色細砂層(層厚25cm)、暗灰色細砂層(層厚25cm)を確認することができた。このうち灰色細砂層(4)、暗灰色細砂層(5)からは青磁片・須恵器片・土師器片が出土していることから、中世後半期を下限とする遺物包含層と思われる。染付磁器など近世に下降する遺物の出土はみられなかった。



第186図 第16地点 道路部分確認調査基本土層図 1/20



第187図 第16地点 東西線道路部分の現状（東から）



第188図 第16地点 2号線道路部分の現状（南から）



第189図 第16地点 1号線道路部分の現状（南から）



第190図 第16地点 第1トレンチ南壁土層断面（北から）



第191図 第16地点 第2トレンチ試掘作業風景（南西から）



第192図 第16地点 第2トレンチ南壁土層断面（北から）

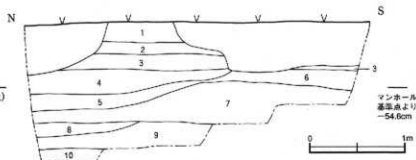


第193図 第16地点 第2トレンチ完掘（西から）



第194図 第16地点 第3トレンチ完掘状態（南から）

- 1 盛土層
- 2 淡灰色砂質土層 (近世遺物包含層)
- 3 淡灰色細砂層 (中世遺物包含層)
- 4 淡灰色シルト層 (河川堆積層)
- 5 白黄色細砂層 (河川堆積層)
- 6 淡灰色砂質土層 (縄文晩期土器片出土)
- 7 黄褐色シルト層
- 8 灰褐色粘質土層
- 9 青灰色シルト層
- 10 黄白色細砂層



第195図 第16地点 第4トレンチ東壁土層図 1/40

第2トレンチは、上から順に盛土層 (層厚20cm)、橙色砂質土層 (層厚10cm)、灰色細砂層 (層厚30cm)、暗灰色細砂層 (層厚28cm)、灰黄色細砂層 (層厚20cm)、灰色砂質土層 (層厚不明) を確認することができた。これらは第1トレンチとほぼ同じ堆積状況で、灰色細砂層、暗灰色細砂層からは青磁片・須恵器片・土師器片が出土している。やはり近世に下る遺物は認められなかった。

第3トレンチは、第1・第2トレンチとは異なる堆積状況で、中世遺物包含層である灰色細砂層、暗灰色細砂層は確認されなかった。その堆積状況は、盛土層 (層厚35cm)、淡黄色砂層 (層厚15cm)、暗灰色粘質土層 (層厚10cm)、灰色砂質土層 (層厚10cm)、淡灰褐色砂質土層 (層厚20cm)、明黄褐色砂礫層 (層厚50cm) が確認された。このうち明黄褐色砂礫層は河川堆積物であろう (第187～194図)。

道路予定地部分の確認調査では、第1・第2トレンチで濃密な中世遺物包含層を確認することができ、第3トレンチでは遺物は出土せず、すぐ西側を流れる官川関連の氾濫原を確認することができた。また、宅地部分に設けられた第4トレンチでは、東壁面において第195図に提示する所見が得られた。このトレンチの所見に関しては、本格調査を実施した関係もあり、次節Ⅲ-7 (P122) において取り扱うこととする。

(森岡・若林純也)

4) 小結

今回の調査地では、第1・第2トレンチで濃厚な遺物包含層が確認された。浅い所では、現地表下40cmで包含層に達するものであり、それぞれの包含層には生産遺跡を中心とする遺構面を伴うことが予測される。第1・第3トレンチの中間地点に試掘坑を掘入していないため、確実なことは言えないが、古代～中世を中心とする若宮遺跡の範囲が東西方向では少なくとも西方の第3トレンチの至近地まで広がっている公算も高く、街区内道路予定地の約4分の3については、工事損壊部分の全面調査が必要である。

以上の結果を受け、調査対象予定地については、発掘調査工期と担当者の違いにより枝番をふって整理することとした。個人住宅地として供給した宅地部分については当初仮称した「第16-1地点」をそのまま踏襲することとし、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 (山田清朝・服部 寛) の方に発掘の支援を依頼した中央南北道路の南半部分については「第16-2 (1) 地点」と呼称した。また、芦屋市教育委員会の森岡・辻が担当した第16-2 (1) 地点の北東方L字状道路の部分「第16-2 (2) 地点」とし、その西延長上の道路予定地を「第16-3地点」と呼ぶことにした。そして、最西端の南北道路1本分については、工事立会の扱いとし、森岡が工事施工時に随時、立会を行った。

発掘調査をするべき部分については、終了報告書を作成し、市建設部開発事業課へ回答するとともに、芦屋市教育委員会が発掘調査できない繁忙期には、兵庫県教育委員会の調査支援を受けることで合意をみた。これらの調査の結果については、次節以降で順次報告する。

(森岡)

7 第16-1地点の調査

1) 調査の経緯

若宮地区の事前調査が軌道に乗ってきた平成10年度は、既に震災復興調査に対する全国支援は期間切れとなり、先行きが不安な状況であった。そうした中、本地点は街区内部道路整備工事に伴い実施された個人住宅建設を調査動機とする事前調査で、森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課係長）・若林純也（同課嘱託）を担当者として、平成11年1月28日に確認調査が実施された。所在地は、芦屋市若宮町63番地2他である。事業地面積は85㎡を測る（第196・197・200図）。

換地用地の絡みで地権を個人に移す前に実施された事業となり、届出者は芦屋市長北村春江で、発掘届出書は芦計開第147号（平成10年12月21日付）で街区内部道路事業とともに一括文化庁長官宛であった。これを受け、芦屋市教育長 三浦清は、平成10年12月28日、芦教文第109号にて発掘調査2（開発者との調整の結果、記録保存と開発との調整の資料を得るための確認の発掘調査を実施する）の取り扱い、指導事項を兵庫県教育長に進達した。

この確認調査により、当事業地は、個人住宅の建築による基礎掘削深度内に中世以前の遺物包含層が含まれるため、損壊範囲内に限定した埋蔵文化財の事前調査が必要と判断され、平成11年2月1日～2月8日の実働4日間、建築工事に先立ち、発掘調査を実施した。発掘調査は確認調査を担当した森岡・若林が引き続き担当した（第196～199図）。

なお、発掘面積は、確認調査が3.9㎡、本調査が6.75m×6.50mの大きさと43.875㎡である。（森岡）



第196図 調査地近景（北から）



第197図 調査地現況（東から）

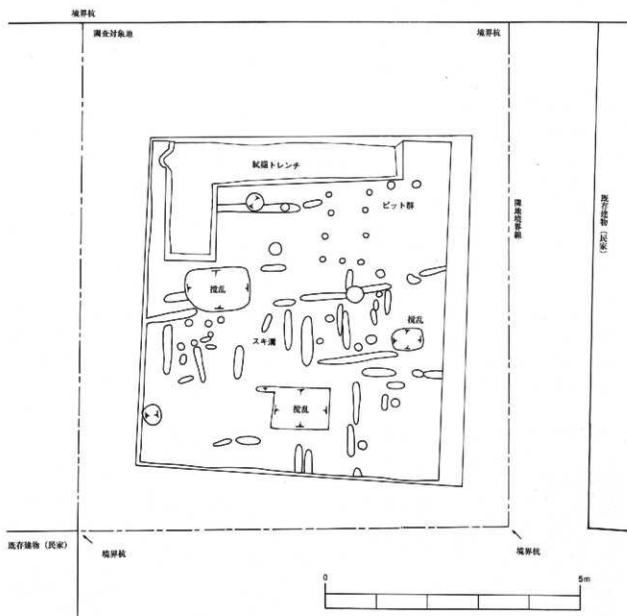


第198図 調査風景（西から）

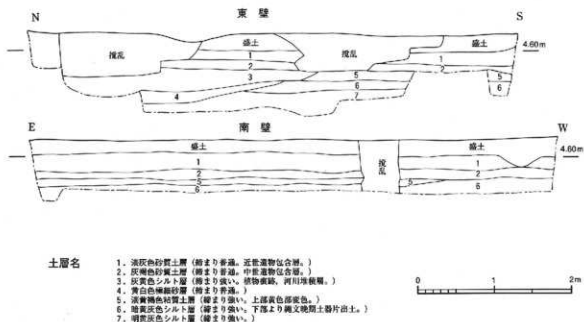


第199図 調査風景（南から）

道路



第200図 検出遺構全景（西から），調査区・遺構配置図 1/75



第201図 調査区土層断面図 1/50

2) 確認調査の所見

確認調査は、任意に1か所トレンチを設定し、現地表面より1.5mまで掘削を行った。掘削には機械を使用し、一部人力による分層発掘を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

トレンチは敷地の南東隅より北へ3.7m、西へ2.6mの地点を南東隅とする長さ3.9m（南北）、幅1mの規模である（第185図）。土層は、盛土層の下に淡灰色砂質土層(2)（近世遺物包含層、厚さ10cm）、淡灰褐色細砂層(3)（中世遺物包含層、厚さ20cm）を確認した。この淡灰褐色細砂層の下では淡灰褐色砂質土層(6)（厚さ15cm）を確認したが、トレンチの北部では河川堆積層と思われる淡灰黄色シルト層(4)・白黄色細砂層(5)によって切られて、なくなっている。さらに下層において黄橙色シルト層(7)・灰褐色粘質土層(8)・青灰色シルト層(9)・黄白色細砂層(10)を確認することができた（第195図）。

今回の調査地では、中世の遺物包含層を確認することができ、それ以前では北東から南西方向に自然流路があったことが確認された。また、流路の肩部分を形成する淡灰褐色砂質土層(6)からは縄文晩期の突帯文土器片が2点出土している。若宮遺跡第1・2地点や第3・4地点の縄文時代文化層が本地点までおよんでいることを教えており、当地点でも遺跡が長期間複合する事実が判明した。

（森岡・若林）



第202図 調査区東壁土層断面（北西から）



第203図 調査区南壁土層断面（北西から）

3) 全面調査の方法

確認調査の結果を受け、全面調査では、中世包含層に損傷が加わる基礎工事範囲全体を対象とし、調査区を設定した(第200図)。

調査区は東西6.75m、南北6.50mのほぼ正方形で、試掘トレンチはその東辺と一致する。調査区東辺は道路際より2.5m西側に位置している。基本層序は、確認調査段階の把握を参考としつつも、盛土層を分離し、水田耕土層を第1層とした(第201図 東壁・南壁)。第1・2・5・6・7層がベース側の基本層序で、第3・4層は自然河川内での堆積土層である。

調査は先ず盛土および耕作土(1)を重機により除去し(第197図)、中世段階の遺物を主体的に含む灰褐色砂質土層(2)上面において遺構検出を行った(第198図)。(森岡)

4) 検出遺構

遺構面精査中に家屋の解体や地下埋設物と関係する攪乱坑が数ヶ所で確認され、これらを底まで掘りあげた。犁痕より明らかに新しいものであり、近・現代のものとして取り扱った。また、埋土が通常の攪乱土とは異なる円形の土坑が散見された。重複のみられるものは最も新しい時期を示すので、近世～近代頃の遺構と考えておきたい。

検出された主要な遺構は、中世末期の犁痕を伴う耕作面である(第200図および写真)。へら(撥土板)が土塊を反転した際の耕具痕と思われるが、東西方向、南北方向ともにみられ、とくに南北方向は1.5～2.0mと長めに、東西方向は1m前後と短いものが多い傾向にある。これらは検出幅が不定であるが、10～20cm程のものが多く、深さも2～3cmぐらいで浅い。また、同一遺構面においてピット群を検出したが、性格についてはよく判らなかった。耕作地に伴う小屋風の建物か。(森岡)

5) 出土遺物

水田耕作の時代・時期を特定する遺物に恵まれなかったが、室町時代を下限とする遺物が田面被覆土層や水田層から出土している。弥生土器・須恵器・土師器・須恵質土器・瓦器・陶器・青磁などがみられる。総量はコンテナ1箱分までに収まる。

特筆すべきは、深部調査を加えた暗灰灰色シルト層(6)において縄文時代晩期の土器片が出土したことで、この層はベースとして広く存在していることから、縄文時代終末期の単純層である可能性が高い。土器は突帯文土器と思われる。(森岡)

6) 小結

調査の結果、第5・6・7層のベース形成土・縄文晩期包含層と流路内堆積層(第3・4層)との関係は、第1～4地点の状況とも酷似する。とくに自然流路との関係をこれまでの調査成果と対比させるなら、第2地点との関係が浮上してくるようになると思われる。

要するに、第2地点においてより西方への流路の根源が推定されたが、その延長が本地点の調査区内に入ることが予想されるわけである。河道内を充填する土層は遺物を包含しなかった点でも第2・3・4地点のデータと一致しており、層部分のベース土中から遊賀Ⅳ式段階の突帯文土器が出土したことから、縄文晩期後半でも(古)段階に形成をみ、早々と放棄された流路であることが理解されよう。

以上のように、本地点の調査結果は、若宮遺跡の縄文時代晩期段階の遺跡範囲からさらに西方に広がること、中世段階の耕作地もさらに西側に拡大することの二点に約言できる。(森岡)

8 第16-2 (1) 地点の調査

1) 調査の方法

今回の調査は、工事によって遺構の破壊される深度までを調査した。調査した深度は地表面から最大1.5mである。

調査にあたっては、盛土と近世～近代の水田土壌層を機械により掘削し、中世の遺物包含層から下層をすべて人力により掘削した。

標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を使用し、その移設は、調査区東約30mの市道に設置された仮B.M.4.10mを利用した。

調査は中世後半の遺構面を検出したのち、その下層の中世前半の遺物包含層を掘削し、無遺物層に達するまで行った。
(山田・服部)

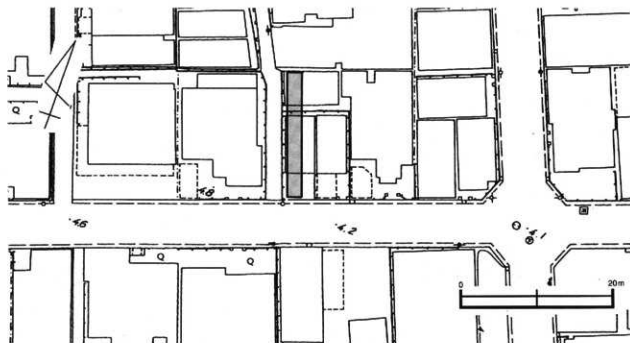
2) 層序

土層はほぼ北から南に緩やかに傾斜しており、調査した範囲では大きく7層で形成されている。

調査地では、基本層序として上層から順に以下のように分層した。

- 第1層 盛土層と攪乱（第205図1に対応、以下同じ）
- 第2層 10YR5/1 褐灰色シルト質細砂～粗砂（旧耕作土層、近世～近代）
- 第3層 7.5YR6/8 橙色細砂～細礫（洪水砂層）
- 第4層 10YR7/6 明黄褐色シルト混じり細砂～細礫（洪水砂層、上層わずかに土壌化、中世後半の遺物包含層）
- 第5層 10YR4/1 褐灰色シルト質細砂～粗砂（水田土壌層、中世）
- 第6層 10YR4/2 灰黄褐色シルト質中砂～粗砂（土壌層、中世前半の遺物包含層）
- 第7層 10YR6/8 明黄褐色シルト質極細砂～細砂（洪水起源の堆積層、無遺物層）

(山田・服部)



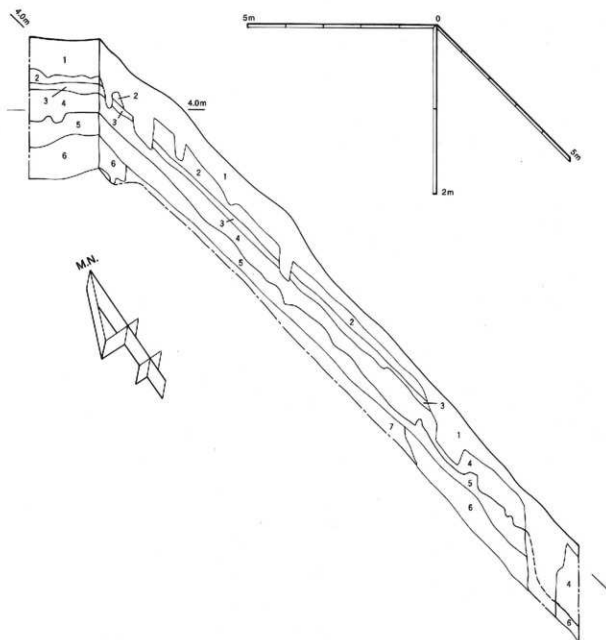
第204図 調査区配置図 1/500

3) 検出遺構

第4層を取り除いた段階で遺構面を検出した。検出した遺構は水田跡と旧河道である。

①水田跡

畦畔1条と溝1本を検出した。ともに両端は調査区外に延びる。畦畔の方位は $N21^{\circ}W$ を示す。約11.7mを検出した。畦畔の基底部における幅は約30cmで、水田面からの高さは10~20cmを測る。溝は畦畔に伴うもので、畦畔の東側に平行して検出された。横断面はU字形で、東側を2段掘りにする。検出面における幅は40~50cm、底の幅は10~30cmを測る。検出面からの深さは10~20cmである。水田跡は、洪水砂（第4層）により覆われていた。旧河道を埋没させた洪水砂と同一で、旧河道からオーバーフローした洪水砂により埋没したものと考えられる。



第205図 土層断面図 水平：1/100・垂直：1/45

②旧河道

調査区西半で検出された。旧河道の両端は調査区外に延びる。東側の肩部と底部を検出した。検出した範囲では、溝の方位は、北西-南東方向を示す。東側の肩部で約11m検出した。検出面からの深さは最深部で60cmを測る。旧河道は水田跡を覆う第4層と同一の洪水砂により一度に埋没していた。埋土中には、部分的に綫状のシルト層を挟みながら粗砂と細礫が厚く堆積していた。第4層からは中世後半の遺物が出土している。したがって、中世後半にこの旧河道は埋没したものと考えられる。現在約70m西側で北西から南東に流れる宮川の旧流路もしくは旧氾濫原の東端であった可能性が考えられる。(山田・服部)

4) 小結

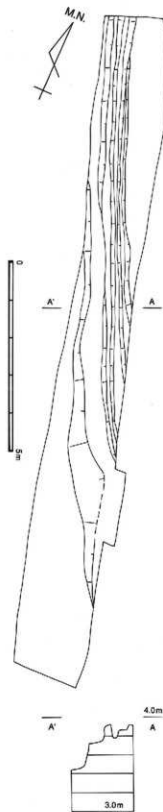
今回の調査の結果、調査地の地形環境の変化とそれに対応した土地利用の変化を捉えることができた。以下に列挙する。

- (1) 中世前半以前： 洪水起源の堆積層（第7層）が堆積する。
- (2) 中世前半： 土壌層（第6層）が形成される。当時期に調査地における土地利用が開始した可能性が考えられる。
- (3) 中世後半： 調査地の東半は水田として利用される（第5層）。調査地西半は旧宮川の流路もしくは氾濫原であった可能性が考えられる。後に、洪水砂（第4層）により、旧河道・水田ともに埋没する。第4層の堆積により中世後半の旧河道は完全に埋没し、調査地全層が平坦化する。第4層が少し土壌化した段階で、再度洪水砂（第3層）が堆積する。
- (4) 近世： 第3層・第4層の堆積で調査地は平坦化し、調査地全層が水田として利用される（第2層）。

さらに、今回の調査の成果を集約すると以下の通りである。



第206図 遺構検出状況（北から）

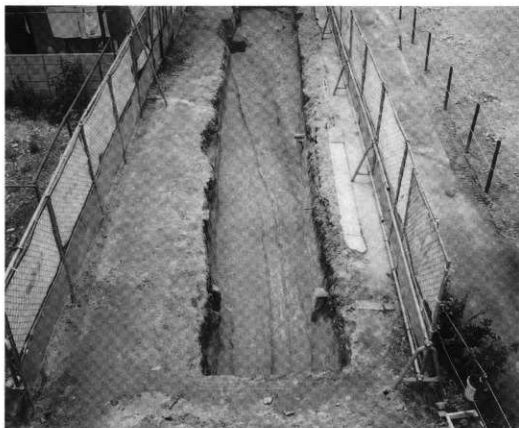


第207図 遺構断面図 1/100, 断面図 垂直: 1/40

①中世の旧河道と水田跡を検出した。旧河道は、宮川の旧流路の可能性が考えられる。また、畦畔の方位（N21° W）は当地域の明治20年代の地図に見られる地割りの方位（N20° W）とほぼ同一で、中世以来地割りが踏襲され続けた可能性を指摘できる。

②調査地は中世前半以前には旧宮川の流路もしくは氾濫原の東端であったことが確認された。

（山田・服部）



第208図 調査区全景（北から）

9 第16-2 (2)・16-3地点の調査

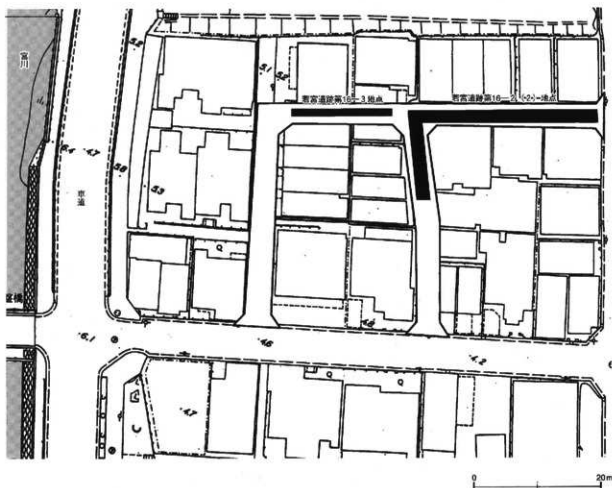
1) 調査の方法

第16-2 (2) 地点の調査トレンチは、L字型を呈し幅2m、東西長27m、南北長14mの規模を測る。第16-3 地点の調査トレンチは、矩形を呈し幅1.2m、長さ19mの規模を測る（第209図）。機械による掘削は、確認調査報告書に基づき近世以降の耕作土および盛土を対象とした。それより下層の堆積層については、人力による掘削を行いながら遺構・遺物の検出に努めた。調査トレンチから排出された土砂は、すべて場内処分とした。基準高は、開発事業課が設置した基準点を使用した。（注）

2) 層序

第16-2 (2) 地点では、現地表面下（以下G.L.と略す）180cmまで、第16-3 地点ではG.L.-100cmまでの調査を行った。第16-3 地点では、埋め戻し時にトレンチ内の3ヶ所においてG.L.-200cmまで深掘りを実施し、深部の堆積層についての記載を行った。各堆積層から出土した遺物の相対年代と層相から、第16-2 (2) 地点と第16-3 地点間の層序対比を行った。この結果に基づいて、東西方向の模式断面図を描いたものが第217図である。

以下に堆積層の特徴と年代・性格について示す。



第209図 第16-2(2)・16-3地点 調査区配置図 1/600

第1層：現代の盛土・整地層および攪乱を埋積する堆積層。コンクリート、レンガ、瓦片などを多く含む。

第2層：近代～現代の耕作土。黒褐色（2.5Y3/1）シルト混じり中粒砂～極粗粒砂。層厚は15～20cmである。耕作土の上面は、第1層によって削平されている。第16-3地点では、第2層最下部に、近世に形成されたと考えられる耕作土である灰白色を呈する砂質シルトの薄層が存在している。

第3層：中世末期の耕作土。灰黄褐色（10YR6/2）シルト混じり中粒砂～細礫。第16-2（2）地点では、西方向へと層厚を増し、トレンチ東端部で15cm、西端部で25cmを測る。第16-3地点では、層厚を少し減じ20cmとなる。耕作土層の上面と下面の両面には、著しい凹凸が認められる。第16-2（2）地点西半部の耕作土には、作土のはば中央にシルト～極細粒砂からなる葉理が挟んでいる。この葉理は、氾濫堆積物の下部を構成する堆積層と考えられる。葉理は、耕作による擾乱を受け、層厚5cm程度が作土中に途切れがちに残存するのみである。作土内には、粒間構造が観察されるが、しまりが悪く孔隙が多い。これらの特徴から第3層は、畑地耕作土として形成されたことが推定される〔松田1996〕。

第4層：中世末期と推定される氾濫堆積物。本層は第16-3地点のみで認められる。第16-2（2）地点では、畑地耕作土層の第3層形成時に削平され残存していない。明瞭な逆級化を示しており、下部は水平葉理をなすオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト～極細粒砂、上部はブラナー型斜交葉理をなす極粗粒砂～細礫で構成される。現世の河川堆積物の観察から、第4層のような逆級化をなす砂層は、河川の氾濫によって形成されることが判明している〔増田・伊勢屋1985〕。下位に存在する第5層は、トレンチ中央部～東端部にかけて傾斜して堆積している。第4層は、この傾斜を埋めるように、東端部に向かうにつれてその厚さを増して堆積している。トレンチ中央部～東端部では、層厚25cmを測る。トレンチ中央部～西半部にかけては、上部の砂礫層のみが堆積している。この部分での層厚は、10cmを測る。

第5層：中世後半の耕作土。黄灰色（2.5Y5/1）砂質礫質シルト。層厚は20～25cmを測る。作土内では、微細な根の痕跡が高密度に観察される。作土は塊状をなし、孔隙が少なく、しまりが良い。層相から、水田耕作土と判断される〔松田1996〕。作土の粒度組成は、ベース層に大きく影響されており、第16-2（2）地点では、シルトを多く含む細粒であるのに対し、第16-3地点では、砂礫を多量に含む粗粒な粒度組成となっている。

第6層：中世後半の耕作土。灰白色（10Y4/1）シルト質中粒砂～細礫。第16-2（2）地点のみに存在している。第16-3地点では、同レベルに流路充填堆積物の第7-a層が堆積している。層厚は20～30cmを測る。層相から、畑地耕作土と判断される〔松田1996〕。

第7-a層：中世後半の流路充填堆積物。灰色（10Y7/1）を呈し、トラフ型斜交層理をなす極粗粒砂



第210図 第16-2(2) 地点 調査区北壁土層断面（南東から）



第211図 第16-3地点 調査区南壁土層断面（北東から）

～細礫。第16-3地点のみに存在している。第16-3地点の西端部では、層厚200cm以上を測る。東に向かうにつれ層厚を減じ、東端部では層厚50cm前後となる。

第7-b層：中世後半の氾濫堆積物。灰色（7.5Y6/1）シルト質細粒砂～中粒砂。第7-b層は、第16-3地点で観察される流路充填堆積物の第7-a層と同時異相をなす堆積物である。堆積層内には、細粒砂～中粒砂からなる葉理が多く認められる。層相およびその累重様式から、第7-b層は自然堤防を構成する堆積物と推定される〔増田・伊勢屋1985〕。

第8層：古代の後背湿地堆積物。灰色（5Y6/1）を呈し、塊状をなす砂質粘土質シルト。層厚は20cmである。第5層は、第16-2（2）地点のトレンチ中央部から西側にかけて分布している。東に向かうにつれ層厚を減じ、第9層との境界も不明瞭になっていく。

第9層：古代の後背湿地堆積物。灰色（10Y6/1）を呈し、塊状をなす砂質粘土質シルト。層厚は10～15cmである。第8層と比べ砂礫を多く含んでいる。

第10層：庄内式併行期の後背湿地堆積物。オリーブ黒色（5Y3/1）を呈し、塊状をなす砂質礫質シルト。有機質に富み、植物片を多く含んでいる。第16-2（2）地点のトレンチ中央部より西側に分布している。層厚は20cmを測る。堆積層内からは、弥生時代中期初頭および庄内式併行期の土器が検出されている。東端部の第10層最上部付近では、古墳時代の須恵器および土師器が含まれる。この範囲では、層厚が極めて薄くなり、上位の堆積層との層界が不明瞭になる。第223図46の須恵器は、この部分で検出されたものである。ここでは、人為的擾乱によって形成されたと考えられる偽層質な層相を示す堆積層が分布している。

第11層：弥生時代中期初頭頃と推定される流路充填堆積物。オリーブ黄色（5Y6/3）トラフ型斜交層理をなす極粗粒砂～細礫。第10地点において、現地表面下170cm付近で検出された弥生時代中期初頭の土器を含む流路充填堆積物に対比されると推定される（本書Ⅱ-1参照）。

第12層：縄文時代晩期後半の氾濫堆積物。明オリーブ灰色（2.5GY7/1）水平層理・葉理をなす細粒砂～粗粒砂。第16-2（2）地点のトレンチ中央部より西側では、縄文時代晩期後半以降の流路形成によって侵食されており、第12層を掘削深度内に認めることはできない。第16-2（2）地点の東端部では、層厚150cm以上を測る。第2地点では、第12層に対比される堆積層の上部から縄文時代晩期後半の土器が検出されている。

（注）

3) 検出遺構

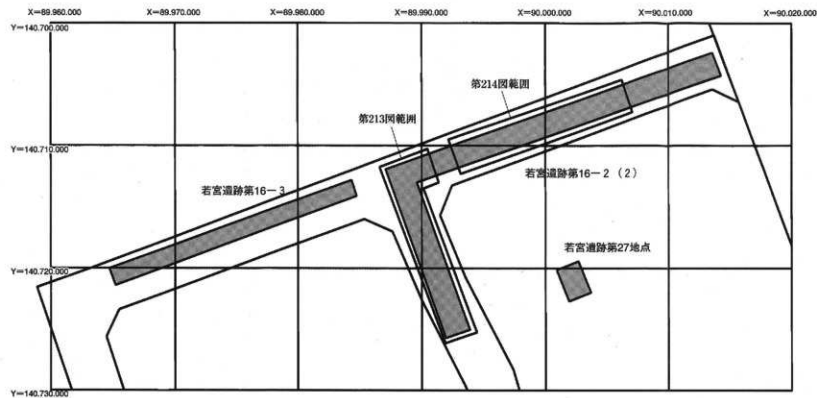
第4・5層上面および第12層上面において遺構が検出された。以下に、各堆積層上面で検出された遺構の特徴について述べていく。

①第4層上面検出遺構

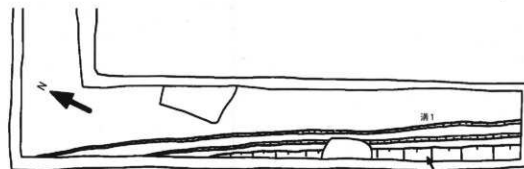
第4層は、T.P.4.3m付近に位置している。第16-3地点において、10条の溝が検出された（第215図）。これらの溝は、幅20～40cmを測り、南東から北西方向への走向を示す。断面は皿状を呈しており、深さは3～10cmを測る。溝の埋土は、遺構ベース層の上位に存在する3層で構成されている。但し、遺構埋土は3層と比較して、2cm前後の偽層を多く含む特徴が認められる。溝内からは、遺物は出土しなかった。検出された溝は、中世末期の畑地耕作者である3層の造成時に形成されたものと考えられる。

②第5層上面検出遺構

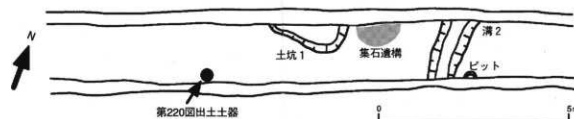
T.P.3.5～4.2mに位置する第5層上面では、第16-2（2）地点において溝1条（溝1）と耕作地段差（第213図）、第16-3地点において畦畔が検出されている（第216図）。第16-2（2）地点の東半部では、自然堤防堆積物からなる高まりが存在している。第16-3地点の西半部では、埋没河道堆積



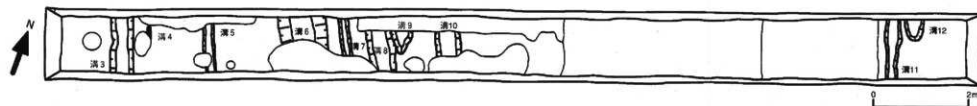
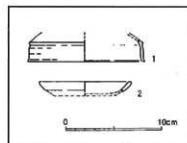
第212図 第16・27地点 調査区配置図 1/300



第213図 第16-2(2)地点 第5層上面遺構平面図 1/100



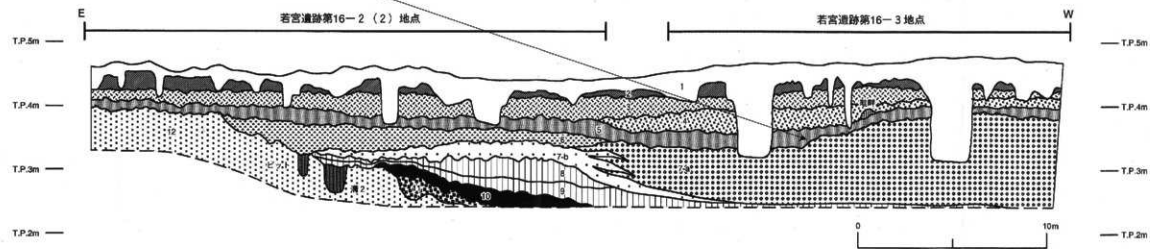
第214図 第16-2(2)地点 第12層上面遺構平面図 1/100



第215図 第16-3地点 第4層上面遺構平面図 1/80



第216図 第16-3地点 第5層上面遺構平面図 1/80

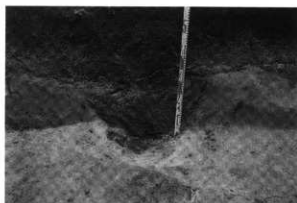


第217図 第16-2(2)・16-3地点 遺跡堆積層模式断面図 水平:1/200, 垂直1/60

物からなる高まりが存在している。第16-2(2)地点の西半部～第16-3地点の東半部では、両側を高まりで挟まれた凹地が形成されている。水田耕作土である第5層は、このベース層の地形に沿うように形成されている。第16-3地点で検出された畦畔は、高まりと溝状の凹地との境界部に形成されている。畦畔は攪乱によって大きく破壊されており、平面プランを検出することはできなかった。そのため、南北の堆積層断面から畦畔の平面的な位置についての復元を行った(第216図)。畦畔は幅40cm、高さ15cmを測る。上位の水田面と下位面との比高差は20cmを測る。第16-2(2)地点では、第16-2(1)地点で検出された溝の延長部分が検出された。溝は第3層を埋土としており、幅30cm、深さ15cmを測る。耕作地段差は、南北トレンチの西端部で検出された。段差は高さ20cmを測る。

③第12層上面検出遺構

第16-2(2)地点において遺構が検出された(第214図)。検出された遺構は、溝1条(溝2)、土坑1基(土坑1)、ピット、集石遺構である(第218・219図)。溝2は幅70cmを測り、南北方向に走向する。断面は逆台形をなし、深さ50cmを測る。溝内は、オリーブ黄色極粗粒砂～細礫によって充填されていた。遺物は検出されなかった。土坑1は東西長180cm、南北長70cm以上を測る。断面は皿状を呈し、深さは10cmを測る。埋土は、灰色を呈するシルト混じり細粒砂～粗粒砂である。ピットは径35cm、深さ30cmを測る。埋土は、オリーブ黒色を呈するシルト質細粒砂～粗粒砂。ピット内から遺物は出土しなかった。ピット直上に載る第6層内からは、14～15世紀代の日常雑器類の破片が多く検出されている。集石遺構では、大礫クラスの円礫が十数個まとまりをなして検出された。規模は、南北長60cm以上、東西長100cmを測る。遺構内からは、奈良時代の土器片が出土している。



第218図 第16-2(2) 地点 ピット断面(北から)



第219図 第16-2(2) 地点 土坑1 完掘状況(東から)



第220図 第16-2(2) 地点 第10層内遺物出土状況(北から)



第221図 第16-2(2) 地点 完掘状況(西から)

④第16地点の遺跡形成過程

第16-2(2)地点の最下部には、縄文時代晩期後半の氾濫堆積物である第12層が存在している。層相および現地表面下からの深度から第12層は、東側に隣接する第2地点で検出された同時期の流路と同時異相をなす堆積物と推定される。このことから、第16地点は、縄文時代晩期後半に流路近辺の氾濫原に位置していたことが推定される。

弥生時代中期初頭頃には、第12層を侵食して流路が形成される。この流路充填堆積物である第11層直上には、後背湿地堆積物が累重している。後背湿地堆積物の下部には、弥生時代中期～庄内式併行期の遺物を含む第10層が、上部には古代の遺物を含む第8・9層が形成されている。以上のような堆積層の累重から、第16地点では、弥生中期初頭頃に流路が形成され、その後、古代まで後背湿地の堆積環境が維持されていたことが推定される。

中世に入ると、第16地点付近では、河川堆積物が遺跡堆積層の上方へ顕著に累重していくような堆積環境へと変化する。第16-3地点では、中世後半の流路充填堆積物である第7-a層が形成される。第16-2(2)地点では、第7-a層と同時異相をなす自然堤防堆積物の第7-b層が累重している。以上のような第7層の層相から、第16地点は、中世後半に流路およびその周辺に形成された自然堤防に位置していたことが推定される。

第16-2(2)地点では、14～15世紀頃に自然堤防堆積物を母材として畑地耕作土である第6層が形成される。第6層下部では、14世紀代の遺物が多量に検出されている。第16-1地点においても、第6層下部に対比される層で14世紀代を中心とする遺物が多量に検出されている。以上のことから、当該期には、第16地点周辺において、居住域が形成されていた可能性が示唆される。

第6層の上位には、15世紀代と推定される水田耕作土の第5層が形成されている。この水田耕作土は、第16地点全域で検出されており、第16-3地点で検出された流路充填堆積物である第7-a層の直上にも形成されている。このことから、第16-3地点付近を流下していた流路は、水田耕作土が形成された15世紀代にはすでに埋没していたことが判明する。第5層は、中世末期と推定される氾濫堆積物の第4層によって埋没している。これより上部、現在の盛土直下には、中世末期以降から宅地開発が行われる大正～昭和前半頃までに形成された耕作土である第2・3層が累重している。これらの耕作土層は、氾濫堆積物を母材としており、時折、洪水が起こるような堆積環境下で耕作地が形成されてきたことを示している。

(注)

4) 出土遺物

①概観

本調査地点では、コンテナ2箱分の遺物が出土した。遺物は第7-a、7-b層を除く第1層から第10層までの各層から出土した。整理に際しては、第5層以下の出土資料の層別別・器種別・時期別分類を徹底的に行い、破片点数をこまめに集計した(第8表)。なお、実測図の掲載に関しては、層別別に代表的な遺物を抽出し、層順にしたがって上層から下層に出土資料を配列した。実測した遺物は合計47点である(第222・223図)。なお、観察表(第9表)と写真図版(第224～227図)を付したので、併せ参照願いたい。

②層別別出土資料の検討

第5層 土師器(皿)20点、瓦質土器(羽釜)6点、瓦器塀3点、東播系須恵質土器2点、白磁1点、陶器2点などが出土している。瓦質土釜(1)は、15世紀を前後するもので、復元口径は36.6cmと大きい。土師器皿(2)は口縁部1段ナデ、底部周縁指頭圧痕調整である。やや浅身のこの皿は、大・中・小規格が存在し、その中型品に属する。15世紀前半ぐらいの年代が与えられる。

第6層最上部 土師器(Ⅲ)12点、その他土師器片7点、瓦質土釜13点、土壘2点、東播系須恵質土器3点、白磁1点他、古墳時代の土師器片1点の下からの巻き込み資料がみられる。瓦質土釜の胴部位の破片3点を図化している(3~5)。14~15世紀のものであろう。色調はいずれも灰白色を呈する。6は口縁部の拡張が著しくない東播系中世須恵器の片口鉢片で26cm前後の口径に復元される。12世紀末葉頃のものと思われるので、古い時代の資料が第6層最上部に紛れたものと解される。

第6層上部 取り上げた遺物の量が多い。土師器のうちⅢと認識できるもの44点の他、器種不明の土師器8点、瓦質土釜12点、瓦器6点、東播系須恵質土器6点を数え、陶器片4点、古代須恵器片、古墳時代須恵器片若干量をまじえる。第6層最上部出土資料と大きく型式が変わらない瓦質土釜(7・8)がみられる。14~15世紀頃に比定できる資料が主体をなす。

第6層中部 分層して取り上げた遺物量は最も多く、認識できる土師器(Ⅲ)の破片は132点に達する。その他、器種弁別不可能な土師器片20点、瓦質土釜15点、瓦器片28点などがみられ、瓦器が顕著となっている。また、東播系須恵質土器7点、陶器4点、白磁1点、青磁1点と古代の土師器2点、古墳時代須恵器4点がみられる。最も量的に多い土師器小皿はヘソ皿が主体で(12~15)、包含遺物の主体が14世紀後半~15世紀初頭を中心とする年代にあることが知られる。径8cm前後の小皿である。ヘソ皿は白色系の色調を呈し、厚手のものより図化したような薄手のものが圧倒的に多い。15世紀に多い淡褐色系のものより白色系の資料の比率が高いので、中心は14世紀末までの資料と考えられようか。中型品(11・13)も相前後する時期のものであろう。

瓦質土釜(9)は口縁端部にやや拡張面が認められ、直立する口縁部が僅かに内傾する。復元径28.4cm。10も土釜の胴部片である。17は東播系中世須恵器で、口縁部は上方への拡張傾向をもつ。16は青磁碗の破片で、色調淡黄緑色を呈し、器壁は非常に薄くつくられている。18は白磁碗である。復元径14.2cmを計測する。なお、瓦器類は、本包含層の遺物の主体年代の中では古い部分を占めるであろう。

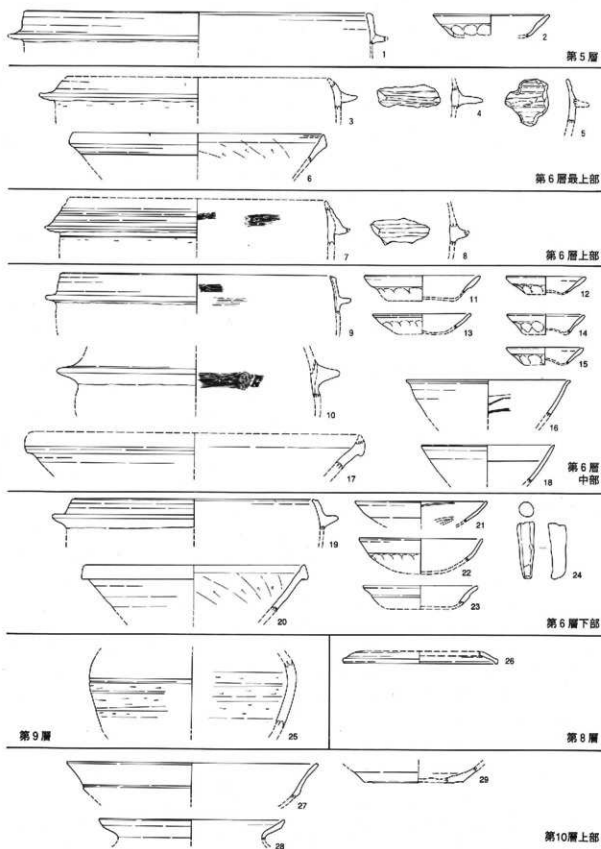
第6層下部 当層は第6層の最下部に位置するが、やはり土師器(Ⅲ)のウェイトが最も高く、76点を数える。次いで瓦器片の30点、その他の土師器片10点が続き、瓦質土釜6点、東播系の須恵質土器4点が続く。他に陶器片2点、白磁片2点、青磁片1点が中世以降の資料で、古代の須恵器2点、土師器2点や古墳時代須恵器1点がみられる。出土資料を総覧して重要な事実は、当層より弥生土器が混じり始めることで、第V~VI様式に属する土器片が2点出土していることを特記しておきたい。

図化した資料は、土釜(19)・東播系須恵器(20)・瓦器塊(21・22)・土師器Ⅲ(23)・壺・釜類の脚部(24)の6点で、この河道の形成時期を知り得るものである。19は14世紀頃の年代が与えられ、20や21~23の土器類も14世紀頃の所産とみて大過ない。

第8層 出土遺物は少ないが、古代に属する須恵器1点、古墳時代に比定できる土師器1点、弥生土器片12点とその構成である。中世以降の遺物が全く認められない点が大きな特徴であり、局所的な堆積層であることと因果関係をもつように思われる。弥生土器については、第Ⅱ様式にさかのぼる破

第9表 第16-2(2)・16-3地点 出土遺物層別頻度表

層位	中世										古代		古墳時代		弥生時代	
	瓦	土壘	土師器Ⅲ (須恵器以外)	瓦質土釜 (須恵器以外)	瓦器片	須恵質土器 (須恵器以外)	須恵質土器 (須恵器以外)	陶器	白磁	青磁	土師器	須恵器	土師器	土師器	Ⅱ様式	時期不明
第5層	1	1	20	0	6	3	2	0	2	1	0	2	0	4	1	0
第6層最上部	0	2	12	7	13	2	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0
第6層上部	0	5	44	8	12	6	6	0	4	0	2	2	0	3	0	0
第6層中部	0	5	132	20	15	28	7	1	4	1	1	0	2	4	0	0
第6層下部	1	0	76	10	6	30	4	0	2	2	1	2	2	0	2	0
第7層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
第8層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4
第9層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	1	3
第10層最上部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	42
第10層中部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
第10層下部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	43
第11層最下部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第12層最下部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0



第222図 第16-2(2)・16-3地点 出土遺物実測図(1) 1/4

片が4点認められる点にも留意しておきたい。

図化した1点(26)は、須恵器杯蓋の口縁部片で、8世紀後半に比定できる。これ以前にさかのぼる土器片が目立つものの、26の年代を大きく遡上する堆積年代を与えることは難しい。

第9層 第8層と同様、中世以降の遺物は一切含まれていなかった。内訳は、古代に属する須恵器2点、土師器3点、弥生土器片6点、うち、Ⅱ様式前後とおぼしき資料3点、Ⅴ様式とみられる資料1点を数える。25は須恵器長頸壺の体部片とみられ、中程にやや太めのヘラ描沈線文1条が走向する。体部下半の内外面は横方向のヘラ削り調整がなされている。古墳時代後期、6～7世紀頃のものである。

第10層上部 第10層出土資料は上部・中部・下部の3つに細別して資料の取り上げを図った。第10層からは弥生土器の比重が高まる。内訳は古墳時代須恵器1点、土師器7点、弥生土器はⅡ様式14点、Ⅴ様式系42点の比重で出土している。古墳時代の遺物は含まれていたが、古代以降の遺物は全く含まれていない点が特筆すべきことである。

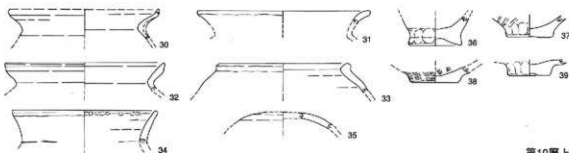
弥生土器(27)は口径26.4cmに復元される高杯杯部の残欠片で畿内第Ⅴ様式後半期のものである。色調淡茶灰色で、焼成はやや不良。28も弥生第Ⅴ様式の甕口縁部片で、端部につまみ上げがみられる。茶灰色を呈する。弥生後期末頃の資料とみられる。29は須恵器杯身の底部で底面はヘラ切り未調整痕が残る。7世紀に入る時期を与えてよいであろう。30・31・32の3点は弥生土器第Ⅴ様式の甕口縁部片で、34も立ち上がりつきつが、おそらく甕の口縁部片であろう。色調は黄灰色、黒灰色など灰色系で、焼成やや不良の土器が目立つ。36～39は弥生土器の底部で、壺(38・39)、甕(37)、甕なし鉢(36)などがみられる。33は数少ない短頸壺の口頸部片とみられ、復元径13.4cm、淡黄茶色の焼き上がりを示す。35は須恵器杯蓋の天井部片で、6～7世紀頃のものである。

第10層中部 第10層上部との違いは、古墳時代以降の遺物が全く認められない点で、弥生土器のみが包含されていた。胎土からの弁別を行った結果、第Ⅱ様式を前後する段階のもの3点、第Ⅴ様式段階のもの9点を数える。当該層には図化可能な資料がなかった。

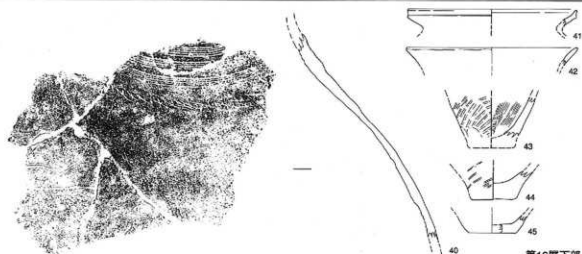
第10層下部 出土資料の内訳は、須恵器1点、弥生土器第Ⅱ様式段階5点、Ⅴ～Ⅵ様式段階43点を数える。須恵器が微量紛れ込む状況は同層上部の1例とよく似ている。

40は弥生土器大型の壺の体部上半付近の大きな破片で、頸部への移行の曲折度からみてⅡ～3様式段階(寺沢・森岡編1990)のものと思われる(第220図)。頸部部文様帯の最下帯4帯が残存しており、上3帯は描直線文で、原体は1帯分5条を数える。最下の1帯は繊細なヘラ状工具による線刻的な文様で、ひっかきキズのように浅く施され、文様帯としての態をなさない。ただし、左上から右下に向かって長さ0.6～1.2cmの斜線文が0.5～0.9cmピッチでめぐり、その上から同方向でさらに斜向するヘラ描線が3～5本を単位としてそれらと斜交するように刻まれている。出土した段階からかなり大きな破片で、色調は淡灰黄色を呈し、胎土中には石英・長石の鉱物粒を散見する。器面の調整は、外面を軽く磨き、内面はナデによる。

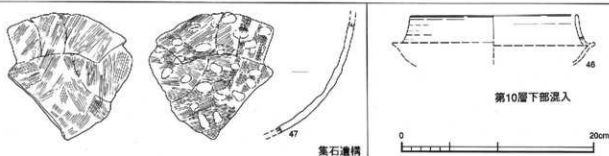
41・42は弥生土器甕の口縁部である。41は入念なヨコナデ調整によるつまみ上げがみられる。41は中河内生駒西麓産の胎土を示す。淡茶黄色を呈し、茶褐色を呈する通有の中河内の土器ではないが、金雲母剥片を散発的に含有する点が特徴である。42は口縁部端の調整をやや尖りぎみに丸めて収める。いずれも第Ⅴ様式終末期のもの。43・44は甕の底部である。外面は叩き仕上げがなされている。灰色を基調とする色調を示す。底部の厚さがやや薄い45は黄灰色を呈する。時期は第Ⅴ様式を前後するものと思われるが、壺または鉢の底部であろう。46は須恵器杯身片である。復元径17.2cmと大きく、立ち上がりも高いため、陶器編年のTK10型式に比定でき、6世紀前半の時期が与えられる。微量な須恵器からは、古墳に伴うようなものか、集落に伴うようなもののかは判然とし難い。



第10層上部



第10層下部



第223図 第16-2(2)・16-3地点 出土遺物実測図(2) 1/4

集石遺構 土師器片が数点まとまって出土した。接合の結果、同一個体とみられ、おそらく長胴甕の底部に近い破片と思われる。内面は指頭圧成形ののち、刷毛による調整がなされるが、器壁は凹凸が著しく、底部に近いためか粗雑な印象を受ける。外面はタテ方向の刷毛目調整で、底部付近は方向が無作為となる。色調淡黄灰色、一部に黒斑が存在する。胎土は微粒の鉱物粒を含むものの弥生土器などと比べると、精良である。器壁は薄いところで3～4mm、厚い箇所では7～8mmを計測する。時期は、7世紀末～8世紀頃の長胴甕の一部と考えられるが、断片であり定かでない。(森岡)

第10表 第16-2 (2)・16-3地点 出土遺物観察表

(単位: cm)

中世・古墳時代												備考 時期・型式など	
調査 番号	調査 番号	器種	部位	出土地区	出土層位	残存度	復元口径	残存高	色調	胎土	焼成		
1	37	羽釜	口縁部	B区	第5層	1/22	36.6	3.5	濃灰褐色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
2	4	土師器皿	口縁部	A~C区	第5層	1/9	12.2	2.9	灰青白色	密	良好	中世(瓦質土器)	
3	36	羽釜	胴部	B区	第6層最上部	不明	不明	不明	濃灰白色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
4	13	羽釜	胴部	A区	第6層最上部	不明	不明	不明	濃灰白色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
5	42	羽釜	胴部	A区	第6層最上部	不明	不明	不明	灰色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
6	30	埴輪	口縁部	B区	第6層最上部	1/17	26.4	3.0	濃灰褐色	粗良	良好	中世(須恵質土器)	
7	44	羽釜	胴部	A~C区	第6層最上部	不明	不明	不明	濃灰褐色	粗良	不良	中世(瓦質土器)	
8	12	羽釜	胴部	A~C区	第6層最上部	不明	不明	不明	灰白色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
9	35	羽釜	胴部	B・C区	第6層中部	不明	28.4	3.9	灰色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
10	38	羽釜	胴部	B・C区	第6層中部	不明	不明	不明	濃灰褐色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
11	14	土師器皿	口縁部	B・C区	第6層中部	1/11	12.2	2.7	濃青白色	密	良好	中世(土師質土器)	
12	23	土師器皿	口縁部	B・C区	第6層中部	1/7	8.2	1.9	濃青白色	密	良好	中世(土師質土器)	
13	9	土師器皿	口縁部	B・C区	第6層中部	1/8	10.3	1.7	濃青白色	密	良好	中世(土師質土器)	
14	19	土師器皿	口縁部	B・C区	第6層中部	1/7	8.1	2.0	濃青白色	密	良好	中世(土師質土器)	
15	20	土師器皿	口縁部	B・C区	第6層中部	1/8	8.2	2.1	濃灰褐色	密	良好	中世(土師質土器)	
16	29	青磁碗	口縁部	A区	第6層中部	不明	17.2	4.0	濃青褐色	粗良	良好	中世(輸入陶器)	
17	21	埴輪	口縁部	B・C区	第6層中部	不明	35.2	3.4	濃灰白色	粗良	良好	中世(須恵質土器)	
18	17	白磁碗	口縁部	B・C区	第6層中部	1/11	14.2	3.9	濃灰白色	粗良	良好	中世(輸入陶器)	
19	41	羽釜	口縁部	A~C区	第6層下部	1/23	25.0	3.2	灰青色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
20	5	埴輪	口縁部	A~C区	第6層下部	1/11	21.8	5.3	濃灰白色	粗良	良好	中世(須恵質土器)	
21	11	瓦器埴輪	口縁部	A~C区	第6層下部	1/7	12.0	2.4	濃灰褐色	粗良	良好	中世(和型型N-4)	
22	10	瓦器埴輪	口縁部	A~C区	第6層下部	1/7	13.0	2.4	濃灰白色	粗良	良好	中世(和型型N-5)	
23	8	土師器皿	口縁部	A~C区	第6層下部	1/8	12.0	2.1	濃青白色	密	良好	中世(土師質土器)	
24	33	埴輪	胴部	A~C区	第6層下部	不明	不明	不明	濃灰白色	粗良	良好	中世(瓦質土器)	
25	45	長頸壺	胴部	A~C区	第8層	不明	不明	不明	濃灰白色	粗良	良好	古代(須恵器)	
26	24	杯蓋	口縁部	A~C区	第8層	1/14	16.2	1.3	濃灰褐色	粗良	良好	古墳時代(須恵器付室)	
27	15	酒杯	胴部	A~C区	第9層	1/16	26.4	3.5	濃青褐色	密	やや不良	弥生第V層式	
28	18	壺	口縁部	A~C区	第9層	1/12	9.7	2.2	灰褐色	密	やや不良	弥生第V層式	
29	22	杯身or底	底部	A~C区	第9層	1/12	底	9.4	1.3	濃灰褐色	粗良	古墳・古代(須恵器)	
30	16	壺	口縁部	A~C区	第10層上部	不明	17.8	3.25	濃青白色	粗良	良好	弥生第V層式	
31	3	壺or甕	口縁部	A~C区	第10層上部	1/11	1.8	1.5	濃青白色	粗良	良好	弥生第V~VI層式	
32	6	壺	口縁部	A~C区	第10層上部	1/8	16.6	2.8	濃灰褐色	粗良	やや不良	弥生第V~VI層式	
33	34	埴輪	口縁部	A~C区	第10層上部	1/14	13.4	2.9	濃青褐色	粗良	不良	弥生第V層式	
34	1	埴輪	口縁部	A~C区	第10層上部	1/13	15.0	3.5	茶褐色	粗良	不良	弥生第V~VI層式	
35	40	杯蓋	天井部	A~C区	第10層上部	不明	不明	不明	灰色	粗良	良好	古墳時代(須恵器)	
36	25	壺or鉢	底部	A~C区	第10層上部	3/4形底	底	5.3	2.9	濃青褐色	密	やや不良	弥生第V~VI層式
37	7	壺	底部	A~C区	第10層上部	完形	底	4.6	2.0	濃青褐色	密	やや不良	弥生第V~VI層式
38	28	壺	底部	A~C区	第10層上部	2/3	底	5.0	1.2	灰青色	密	良好	弥生第V層式
39	2	壺	底部	A~C区	第10層上部	完形	底	4.1	1.7	灰褐色	密	良好	弥生第V~VI層式
40	47	壺	胴部	A~C区	第10層下部	不明	不明	不明	濃青褐色	密	良好	弥生第II~3層式	
41	26	壺	口縁部	A~C区	第10層下部	1/8	17.6	2.8	濃青褐色	密	良好	弥生第V層式(中内内)	
42	39	壺	口縁部	A~C区	第10層下部	1/11	16.8	1.9	濃青褐色	密	良好	弥生第V~VI層式	
43	31	壺	底部	A~C区	第10層下部	不明	不明	不明	濃灰褐色	密	良好	弥生第V~VI層式	
44	27	壺	底部	A~C区	第10層下部	完形	底	4.4	2.9	灰褐色	密	良好	弥生第V~VI層式
45	32	壺or鉢	底部	A~C区	第10層下部	1/9	4.8	1.8	灰褐色	密	不良	弥生第V~VI層式	
46	43	杯蓋	口縁部	A~C区	第10層下部	不明	17.2	2.5	濃灰白色	粗良	良好	古墳時代(須恵器)	
47	46	壺	底部	A~C区	第10層下部	不明	不明	不明	濃青白色	密	良好	古代(土師質土器)	

5) 小結

本地点は、遺跡の西部域に属し、現行河川官川に向けての地形変換部を確認できる重要な調査地点である。調査箇所は、小字「官川」と「三反田」の字界になる道路部分で、前者は北側、後者は南側に位置している〔大日本帝国市町村地図刊行会1937、細川1963〕。

発掘調査した結果は、予想どおり、遺跡中心部の様相はみせなかったが、官川方向に関する本遺跡東西での旧地形の変化と土地利用に関する歴史的変遷が明らかとなった。ここでは、既述した第16-1地点の発掘調査所見とも関係する本地点の調査結果を集約し、結びとしたい。

①沖積地に埋没する遺跡の堆積学的検討の重要性

若宮遺跡は、本書の各所で論述されているように、特殊な存在形態を示した呉川遺跡を除くと、阪神電鉄本線以南において市内で初めて発見された沖積低地の遺跡である。地表面の観察では、全くその兆候すらみせなかった遺跡であるが、今後、海辺に近い南の市街地にあってはこの種の残り方を示す遺跡の増加が認められよう。

若宮遺跡の中盤戦において発掘調査の対象となった第16-2(1)地点や第16-2(2)・16-3地点は、道路面下の下水管やガス管の地下埋設に伴う地区内街路整備工事に伴う事前調査であり、トレンチの幅は1.2~2.0mと限られ狭いものの、調査距離は50mと比較的長く、とくに今回の調査地点では遺跡の西部域を横断する東西方向の堆積土層の記録と層相、遺物の包含状況の記録を十分とることができた(第212~217図)。土層断面は一見包含層とみなし難い稀薄な状況を呈するが、調査範囲は狭いものの、土層の変化と遺物の様相差を一方向に追うことができ、沖積地の調査では欠くことのできないメリットがあるといえよう。かようなタイプの調査は、震災後の都市計画の基盤整備が今後とも続く本市にあっては、重要遺跡について積極的に試みられていくべきであり、若宮遺跡の中では本地点の調査例が一つの模範を示し得たと考えている。

②縄文晩期、突帯文期から古代までの古環境動態

若宮遺跡の出発点は、現在のところ、今から2800年前頃(縄文時代晩期前半期)に遡る。集落としての兆候は晩期後半の滋賀Ⅳ式~Ⅰ式酒井式期に現れ(第3・4地点、既報告)、周辺の様相は土器片を含む突帯文期の堆積土層が確認できる(第2・16-1地点)。本地点では、明オリブ灰色細粒砂~粗粒砂層(第12層)がこれに該当する。

本地点では突帯文土器の出土はなかったけれど、流路近辺の氾濫堆積物と報告している。この上に侵食する形で存在した第11層(オリブ黄色極粗粒砂~細礫)は、第10地点の流路を充填する堆積物と対応させた。堆積時期は、弥生時代中期初頭と推定される。その上は第10層(オリブ黒色砂質礫質シルト層)~第8層(灰色砂質粘土質シルト層)で、総じて後背湿地の堆積物と推定した。とくに第10層は有機質強く、植物遺体の包含がみられた。下部の第10層は弥生中期初頭~庄内式期、上部の第8・9層は9世紀前半頃までには堆積を終えていたとみられる。

したがって、縄文晩期段階の人間活動についてはその辺縁に位置すると考えられるが、弥生時代中期前半には、集落域の近辺湿地帯に該当することが土層および土器の出土状態などによって判明する。庄内併行期は土器片数97とカウント数も多く(第9表)、生活域が弥生中期前半より拡散したことが予想される。古墳時代は24片、古代17片とこの2時期は出土資料数も減じ、周辺での遺構も目立たないので、居住活動は不活発であったと考えられる。

③中世~近代の古環境の推移について

この上部に遺存した中世段階の堆積層(第7-a・7-b層)は、砂・礫混じりの氾濫堆積物で、遺物の出土は認められなかったが、前後の時期から9~13世紀の間に自然堤防などが形成されたと解される。それ以降は耕地化と居住域の形成が進んだとみえ(第5・6層の畑地・水田耕作土)、その時期は出

土遺物の様相から14～15世紀前半頃と目される。畑地から水田への耕作地の転換が確認できる。急速に農耕適地が拡大したことが予想されるわけである。

この時期は、若宮遺跡に各所で人間活動の活発化がうかがわれ、その背景として、宮川の河川制御、河道の固定化が促進したことが予測され、中世後半期の村落が成立する基盤が形成されたと考えられる。現行の宮川の流路が一応の安定をみた時期をなにかしかに示唆しよう。耕地を潤す水と用水源については、宮川本流からの引水、分流路からの導水など、井堰や水路の位置を含んだ水利技術をめぐる問題があるが、将来の課題としておきたい。

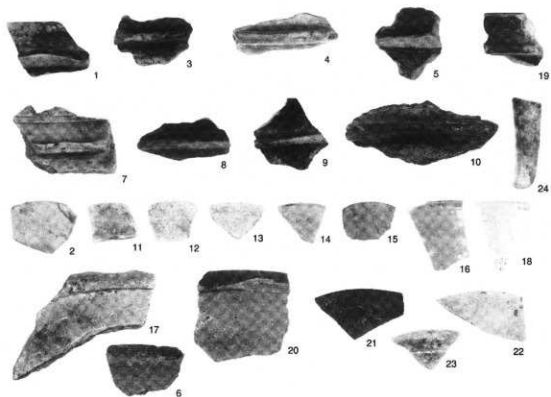
畿内およびその周辺の沖積平野では、早ければ11世紀末～12世紀頃、遅くとも16世紀頃までの間に、塊村化現象の広範な進行が推測されている〔金田1992〕。近畿地方では、14世紀後半以降には、集落形態としての集村化も進み、若宮遺跡の中世集落像もその一端として理解できるかもしれない。第25地点における井戸やピットなどの遺構は居住域を理解する上での微証となる。

これ以後には、16世紀前後とみてよい氾濫堆積物がのっており（第4層）、周辺の自然環境はまた変化する。近世・近代は氾濫と耕地復旧のくり返しが認められる中（第2・3層）、若宮町地区の震災以前の建物が生産地をなくす方向で増加し、市街地の形成に至ったようである。

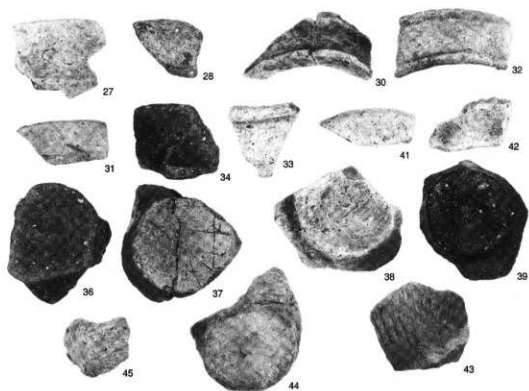
④結語

今回の調査は、狭小な調査面積にもかかわらず、若宮遺跡の盛衰と周辺古環境の層位的検討を果たすことができた。層準と出土遺物の時間的流れには矛盾が一切認められず、多少のノイズもすべて地層の様態により説明することができる。市街地の調査では、若宮遺跡に限らず、地下埋設工事などに伴う地道な層位学的、堆積学的調査を発掘面積にかかわらず積極的に入れていくべきであろう。

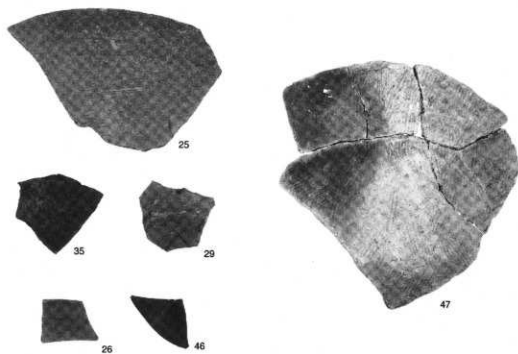
（森岡）



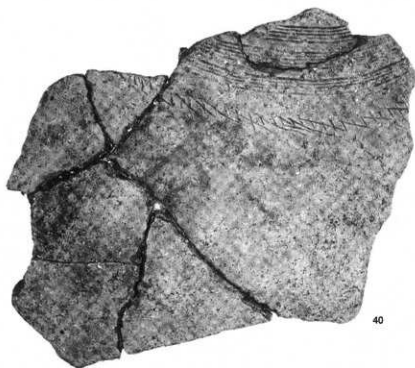
第224图 第16-2(2)地点 出土遺物写真(1)



第225图 第16-2(2)地点 出土遺物写真(2)



第226図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(3)



第227図 第16-2(2)地点 出土遺物写真(4)

10 第17地点の調査

1) 調査に至る経緯・経過と調査の方法

当該敷地では、鉄筋コンクリート造1階建である若宮集会所と防火水槽の建設によって遺構面・遺物包含層の損壊を回避することができないため、記録保存を目的とした事前の発掘調査が必要となった。調査対象範囲は、埋蔵文化財が損壊を受ける範囲に限られた。そこで、集会所部分を第17-1地点、防火水槽部分を第17-2地点として調査することになった。西側に隣接する第10-2地点と併行して発掘調査を実施することとなり、調査期間は平成11年4月26日から5月31日までとした。本調査は阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「基本方針」に基づいて実施した。

確認調査は平成11年2月16・17日に実施し、遺物包含層数・遺構面数などの基礎データを得た。発掘調査範囲と深度については、「基本方針」にしたがって、調査範囲は計画建物建築による損壊部分のみに限り(第116図)、調査深度は無遺物層までとした。最終的な調査深度は、現地表面より2.4mまでの深さとなった。基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高(T.P. 3.50m)より得た。

掘削の方法は、近世以降の堆積土層である第4層までを重機により掘削した。第5層からは人力により一層ずつ掘削した。各土層の境界面で精査し、2面の遺構面を検出した。第2遺構面の調査終了後、第9層以下の深部を確認するために調査区中央に東西方向に幅1.6mの深掘トレンチを設定した。

残土はすべて敷地内に仮置きした。

(竹村)

2) 第17-1地点の調査

当調査地点では建物基礎構造が布基礎であったことから、基礎位置に合わせて3基の南北方向のトレンチを設定した(第116・228・229図)。トレンチは西からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。重機で近現代



第228図 第17地点 調査地全景(西から)



第229図 第17-1地点 調査区全景（南西から）



第230図 第17-1地点 I区西壁土層断面（東から）

の堆積土層を除去したが、Ⅱ区・Ⅲ区は近代の砂層が厚く堆積しており、工事による掘削深度である現地表から2mの深さにおいても砂層が続いていた（第244図）。

砂層は下部が礫層、上部が細砂層となっており、ラミナがみられた。砂層からはレンガや陶磁器、瓦の破片が出土しており、近世末～近代の流路であると判断した。流路の方向は、北西から南東方向に流れていたと推測される。

I区では工事深度に達したところで、犁痕が検出された（第230図）。これらは、磁北より46°～52°西に振って北西から南東方向に走っている。当遺構面に伴って中世～近世の土器が若干出土していることから、当該期の耕作面と推測される。調査深度を損壊深度までとしているため、それより深い部分については調査しなかった。（竹村）

3) 第17-2地点 層序（第231～233図）

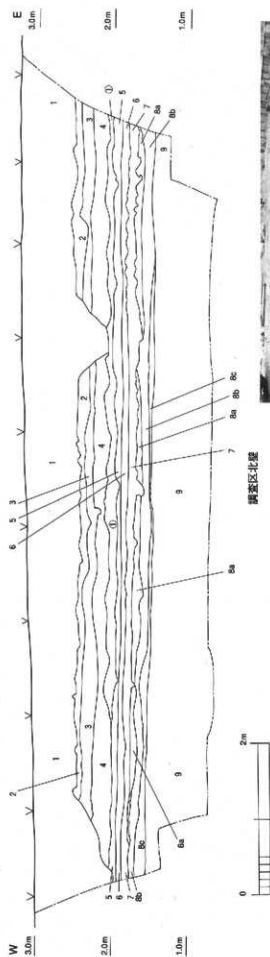
本調査地点は第10-2地点に隣接しており、基本土層を対応させた。近世末～近代の水田耕作土である第2層の標高を比較すると第10-2地点より低くなっており、第10・17地点付近が西から東へ傾斜する地形であったことがわかる。

近世の耕作土である第4層までを重機により掘削したため、第1～4層の詳細は不明である。褐色砂質土層である第5層は、第1遺構面を覆っている。水田耕作土と考えられる。第1遺構面のベース層である第6層（灰色砂質土層）も水田耕作土と考えられる。

第7層（白黄灰色砂層）は、第10-1地点・第10-2地点の第7層と対応している。第10-1地点の方が層厚が厚く、第10-2地点で薄くなり、当地点で再び若干厚く堆積している。宮川からの洪水砂であろう。当層は第2遺構面を覆っている。第2遺構面のベース層である第8層は水田耕作土と考えられ、上面には多数の牛の足跡が遺存していた。足跡には、第7層を構成する砂が充填している。なお、第8層は土質の違いから第8a～8c層の3層に細分した。

第9層は、層厚が90cm以上の厚い砂礫層である。調査では第9層以下の土層を確認することはできなかった。土層の断面観察から、第9層には少なくとも3条の流路が切り合っているものであり、一気に堆積したものではないことが確認された。これらの流路は、北西から南東方向に流れている。第9層からは遺物がまったく出土しておらず、堆積時期は不明である。しかし、第10-1地点の第9層に対応すると考えられることから、弥生時代中期以降に堆積したと推測される。

なお、第231図の土層の註記は、次のとおりである。土層は、上層から順に土層番号を付けた。その際に基本土層と遺構埋土に分け、前者にはアラビア数字、後者には円囲いのアラビア数字で通し番号を付した。基本土層のなかで土質に若干の差違が観察されたものには、土層番号の後にアルファベ



- 第1層 黒色互層状じり砂質土層
- 第2層 灰色軟性細砂質土層
- 第3層 淡灰色粘重砂質じり砂質土層
- 第4層 灰褐色砂質土層
- 第5層 褐色砂質土層
- 第6層 灰色砂質土層
- 第7層 白亜灰色砂層
- 第8a層 灰色軟性砂質土層
- 第8b層 淡灰色粘質土層
- 第9層 灰色砂質土層
- 上部：淡灰色砂層
- 下部：淡黄色砂層
- 第①層 黄白色砂層

第231図 第17-2地点 土層断面図 1/50, 調査区北壁土層 (南から)



第232図 第17-2地点 調査区南壁土層（北東から）



第233図 第17-2地点 調査区西壁土層（東から）

ットの小文字を付け細分を図った。土層註記には、土層番号の次に土層名、続けて粒度・包含物などを順に記し、最後にその土層の性格を述べた。また、基本土層は第10-2地点の土層番号と一致させている。

【第17-2地点 土層】

- 第1層 黒色瓦礫混じり砂質土層 現表土・攪乱土。
- 第2層 灰色粘性細砂質土層 極細砂～細砂。近世末～近代の水田耕作土。
- 第3層 淡黄灰色粗砂混じり砂質土層 粘土・粗砂。灰色粘土と黄色粗砂が混ざっている。
- 第4層 灰褐色砂質土層 上半部：細砂。下半部：極細砂。鉄分が多くみられる。近世の畝耕作土。
- 第5層 褐色砂質土層 極細砂～細砂。やや粘性がある。鉄分を若干含む。中世の水田耕作土。
- 第6層 灰色砂質土層 極細砂～細砂。当層上面が第1遺構面である。中世の水田耕作土。
- 第7層 白黄灰色砂層 細砂～粗砂。洪水砂。第2遺構面を覆っている。
- 第8a層 灰色粘性砂質土層 極細砂～細砂。当層上面が第2遺構面である。中世の水田耕作土。
- 第8b層 淡灰色粘質土層 粘土。中世の水田耕作土。
- 第8c層 灰色砂質土層 細砂。しまりはやや悪い。
- 第9層 上部：淡黄灰色砂層 細砂～粗砂。下部：淡黄色砂層 細砂。ラミナが顕著にみられる。
- 第①層 黄白色砂層 細砂。しまりは悪い。洪水砂。

（竹村）

4) 第17-2地点 検出遺構

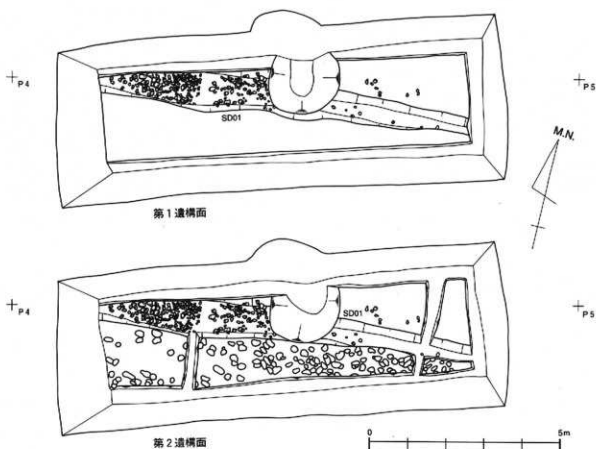
①第1遺構面

第5層に覆われ、第6層をベース層とする遺構面である（第234～238図）。第5層は水田耕作土と考えられる。

当遺構面からは、磁北より85°東に振って東西方向に走る溝SD01が検出された（第234・238・241図）。本来、第2遺構面に伴うもので、その上部が先に検出された。溝幅は東部が70cm、西部が90cmを測り、東方にいくにしたがって幅がせまくなっている。深さは15cmを測る。溝内には径5～15cmの円礫が多く含まれていた。当溝は位置と時期と埋土から、第10-2地点SD01と連続するものと推測される。そうした場合、当溝は第10-1地点では検出されていないことから、第10-1地点と第10-2地点の間を南流するSR01から東方にのびるものと推測される。溝底の高さは第10-2地点西端ではT.P.1.58m、当地点の東端ではT.P.1.6mを測り、高低差はほとんどない。

②第2遺構面

洪水砂である第7層に覆われ、水田耕作土と考えられる第8層をベース層とする遺構面である（第



第234図 第17-2地点 遺構平面図 1/100

234・239・240図)。当遺構面からは、人と牛の足跡が多数検出された。足跡には第7層の砂が充填していた。

③深掘トレンチ

洪水砂層である厚い砂層である第9層はいくつかの単位に細分でき、調査区内で少なくとも重複する3条の自然流路が確認された(第242図)。いずれの流路も北西から南東方向に流れている。第9層からは弥生土器もしくは縄文土器(晩期)の細片が出土している。(竹村)

5) 出土遺物 (第243図)

コンテナ半箱分の遺物が出土した。その大半は中世の耕作土中に含まれていたものであったため、細片が多い。

①第17-1地点 I区中近世耕作土層出土土器

土師器・須恵器・磁器(染付)が出土している。1は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部が上下方に拡張し、拡張部には強いヨコナデ調整がみられる。14世紀末頃のものである。2は染付皿である。

②第17-2地点 第4層出土遺物

3は寛永通宝である。

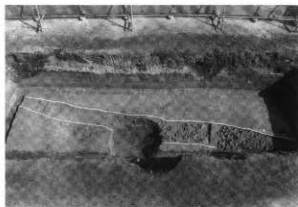
③第17-2地点 第5層出土遺物

土師器・須恵器・磁器(染付)が出土している。5は青磁碗である。内外面に施釉され、白緑色を呈する。皿付および高台内面は露胎し、淡褐色を呈する。

④第17-2地点 SD01出土遺物



第235図 第17-2地点 第1遺構面全景 (南西から)



第236図 第17-2地点 第1遺構面全景 (北から)



第237図 第17-2地点 第1遺構面全景 (東から)



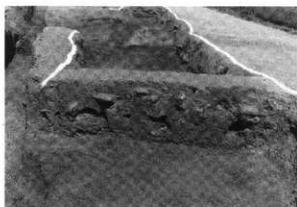
第238図 第17-2地点 SD01 (北から)



第239図 第17-2地点 第2遺構面全景 (北から)



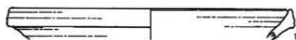
第240図 第17-2地点 第2遺構面全景 (西から)



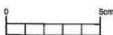
第241図 第17-2地点 SD01土層断面 (西から)



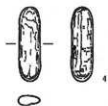
第242図 第17-2地点 深掘トレンチ全景 (北西から)



第17-1 地点 I 区中近世耕作土層



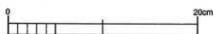
第17-2 地点 第4層



第17-2 地点 第9層



第17-2 地点 第5層



第243図 第17地点 出土遺物実測図 1/4, 3のみ1/2

土師器・須恵器・瓦質土器が出土している。6は土師器壺である。口縁部は大きく開く。口縁端部はヨコナデが施され、上方へのびる。体部外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが施される。7は甕形土器の口縁部である。内外面ともにナデによって仕上げられる。

8は瓦質羽釜である。口縁部は内傾し、外面には段がみられる。胴部にはヘラケズリが左から右方向へ施される。内面には粗いヨコハケ調整が施される。

9は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部は上下方に拡張し、拡張部には強いヨコナデが施される。14世紀末のものであろう。

⑤第17-2地点 第6層出土土器

土師器・須恵器・瓦質土器・陶器（備前焼など）が出土しているが、図化できるものはなかった。

⑥第17-2地点 第8層出土土器

土師器・陶器（備前焼）が出土しているが、図化できるものはなかった。

⑦第17-2地点 第9層出土遺物

弥生土器もしくは縄文土器（晩期）の細片と石製品が出土している。4は結晶片岩製の石製品である。断面形は扁平である。（竹村）

6) 小結

第17-1 地点ではI区より中世～近世の耕作面が検出された。整痕は北西から南東方向に走っており、第10-1 地点の南北方向のものとも第10-2 地点の東西方向のものとも方向が異なっている。

第17-2 地点では、第10-1・2 地点と同時代の耕作面が2面された。ただし、遺物の出土点数が非常に少なく、当地点の調査から各遺構面の時期を考えることは困難であった。そこで、第10-1・2 地点の基本土層および遺構面と対応させることで、本調査地点の遺構面の時期について推察する。

第10-1・2地点と本調査地点の対応関係については、土層は第10-1・2地点の第1～9層と第17-2地点の第1～9層は対応している。遺構面では、第10-1地点未検出＝第10-2地点第1遺構面＝第17-2地点未検出（16世紀以降）、第10-1地点第1遺構面＝第10-2地点未検出＝第17-2地点第1遺構面（16世紀代）、第10-1地点第2遺構面＝第10-2地点未検出＝第17-2地点未検出（16世紀代）、第10-1地点第3遺構面＝第10-2地点第2遺構面＝第17-2地点第2遺構面（15世紀代）、第10-1地点第4遺構面＝第10-2地点第3遺構面＝第17-2地点未検出（14～15世紀代）という対応関係になる。

この対応関係から第17-2地点第1遺構面は室町時代後半（16世紀代）、第2遺構面は室町時代（15～16世紀代）と推測される。第1遺構面を覆う第5層から柴付が出土しているが、混入遺物と考える。

第1遺構面で検出されたS D01は、走向方向と位置関係から第10-2地点第2遺構面のS D01と連続しているものと推測される。

第10地点と第17地点の調査によって、若宮遺跡の南半地域が14世紀代によく耕作地として開発されはじめたことが明らかとなった。この成果は芦屋市内および六甲山南麓部の人間活動と土地利用を考える上で重要である。

（竹村）



第244図 第17-1地点 土層断面（南東から）

11 第25地点の調査

1) 調査の方法

今回の調査は、工事によって遺構の破壊される建物と防火水槽の建設予定地の範囲についてのみ調査を行った。したがって、調査を3地区に分割して行った。調査区は調査した順に1区～3区と呼称する(第245図)。

また、調査した深度も、工事によって遺構の破壊される深さまでとした。したがって、今回調査した深度は、最大で現地表から約2mである。

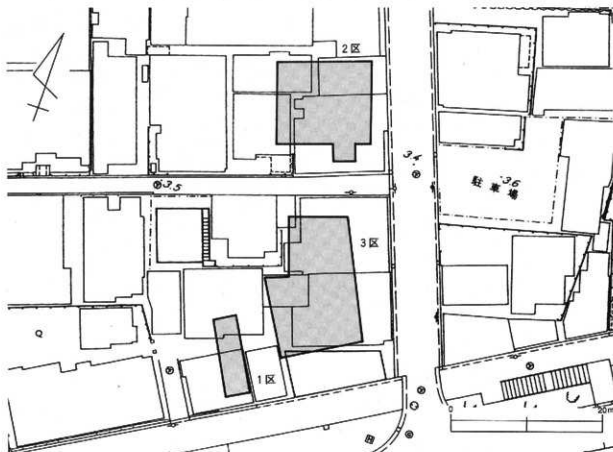
調査にあたっては、盛土と近世～近代の水田土壌層を機械により掘削し、中世の遺物包含層から下層をすべて人力により掘削した。

標高値は東京湾海水準(T.P.)を使用し、その移設は、調査区東約10mの市道に設置された仮B.M.3.40mを利用した。
(山田・服部)

2) 層序

土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では9層で形成される(第246図)。基本的な層序は、上流から供給される洪水起源の堆積層→その上層が土壌化した層→洪水起源の堆積層のパターンの繰り返しである。

調査地の基本層序は上層から順に、第1層(盛土層)、第2層(水田土壌層、近代)、第3層(水田土壌層、近代)、第4層(洪水砂層、上層やや土壌化)、第5層(水田土壌層、近世)、第6層(洪水



第245図 調査区配置図 1/500

砂層)、第7層(水田土壌層、室町時代後半)、第8層(土壌層、室町時代後半)、第9層(洪水砂層)である。(山田・服部)

3) 検出遺構

①1区

1区は防火水槽の建設予定地である。調査範囲は3m×11mと狭く、平面による調査は困難であった。したがって、主に断面観察による調査をおこなった。

調査地北半で、第7層を確認した。第7層上面の標高は約1.0mである。第7層を覆う洪水砂層(第6層)は、厚さ0.9mと他の2地区と比較して厚い。第6層がより厚く堆積することは、1区が今回の調査区で最も西に位置し、調査地西側約60mを南北に流れる宮川に最も近いことに起因するものと考えられる。

②2区

2区は今回の調査区の中で最も北に位置する。遺構面を3面検出した。

第1遺構面(第247・248図)

第6層を取り除いた段階で検出した遺構面である。検出した遺構は水田跡である。

水田跡 水田跡を3筆検出した。水田一区画全体がわかるものはない。畦畔の方位は、ほぼ東西・南北方向を示す。畦畔の基底面における幅は約80cm、水田面との比高は最大約20cmを測る。畦畔には途切れる部分があり、水口であると考えられる。水田面全域で人と牛のものと考えられる足跡痕を多数検出した。

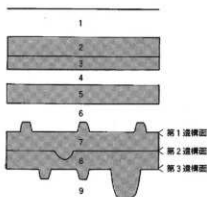
特徴的な出土遺物として、水田面直上から「永楽通宝」などの銭貨が5枚出土している。

第2遺構面(第249～252図)

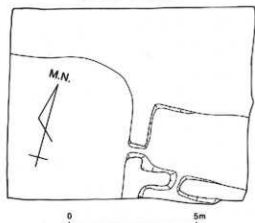
第7層を取り除いた段階で検出した遺構面である。検出した遺構は井戸、土坑、溝、柱穴である。

井戸(SE1) 調査区南端で検出した(第251・252図)。掘り方の平面形は隅丸方形を呈し、一辺1.6mを測る。横断面は逆凸形を呈する。水溜を掘るために2段掘りしたものと考えられる。検出面から底までの深さは約1.0mである。

井戸は石組みである。石は川原石を用いていた。



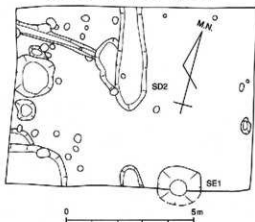
第246図 基本層序



第247図 2区第1遺構面平面図 1/150



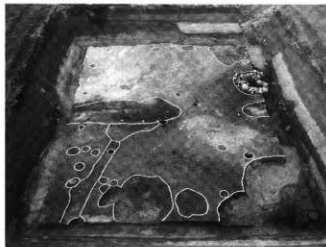
第248図 2区水田跡(東から)



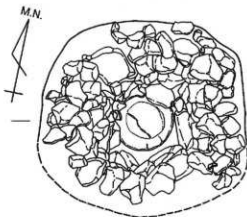
第249図 2区第2遺構面平面図 1/150

基部には比較的大きな石を据えていた。具体的には基部に長さ50cm前後の石を縦に据え、その上に長さ20～30cmの石を横に積んでいた。底部には板状の石を西半分に敷いている。

水溜には一木の丸太を刳り抜いたものを用いている(第253図)。水溜の直径は最大45.0cm、内径は最も狭い箇所で30.8cm、高さは36.4cmを測る。器壁は最大8cmを測る。底から24.4cm付近に段差を持ち、外面にタガ状のものを巻いたような痕跡が認められた。外面には手斧による調整痕が観察される。側面は2箇所施孔



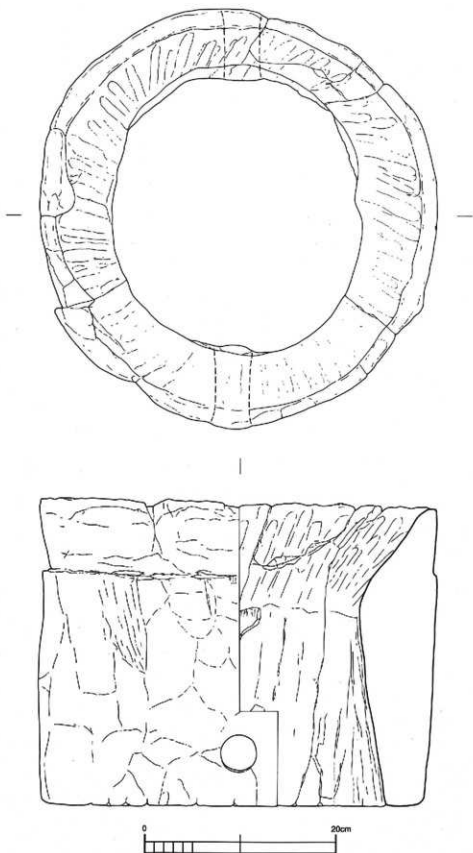
第250図 2区第2遺構面全景(西から)



第251図 2区SE1実測図 1/30



第252図 2区SE1断面(南から)



第253図 2区SE1水溜実測図 1/4

されている。本来容器であったものを水溜に転用したものと考えられる。なお、水溜に使用された材の樹種は、マツ科マツ属〔二葉松類〕である（樹種同定は、株式会社 吉田生物研究所に委託した）。

埋土は黒灰色シルト泥じり粗砂で、井戸側を構成したと考えられる川原石が黄灰色粘土ブロックとともに混入していた。井戸は人為的に破壊され、埋め戻されたものと考えられる。

溝（SD2） 調査区中央北半に位置する（第249図）。北端は調査区外に延びる。方向は南北方向を示し、北から南へ流れる。横断面は浅い皿型を呈し、検出面における幅は約1.1m、底の幅は約0.9mを測る。検出面からの深さは約20cmである。埋土には暗灰色シルト質中砂～粗砂が堆積していた。

柱穴を検出したが、建物を復元するに至っていない。

第3遺構面（第254～256図）

第8層を取り除いた第9層上面で検出した遺構面である。検出した遺構は溝と落ち込みである。

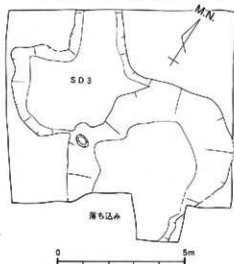
溝（SD3） 調査区中央西よりに位置する（第254図）。北端は調査区外に延び、南端は落ち込みに合流する。方位は南北方向を示し、北から南に流れる。横断面は皿型を呈し、検出面から深さは約20cmを測る。

埋土には暗灰褐色シルト混じり粗砂が堆積していた。

落ち込み 平面形は、検出した範囲では不整形な楕円形を呈する（第254図）。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは、最深部で約1.0mを測る。SD3と合流する段差部分に曲物を据えていた。落ち込みは3区まで広がらなかった。

埋土は大きく2層からなる。上層は暗灰色シルト混じり粗砂、下層は褐灰色細砂～粗砂である。

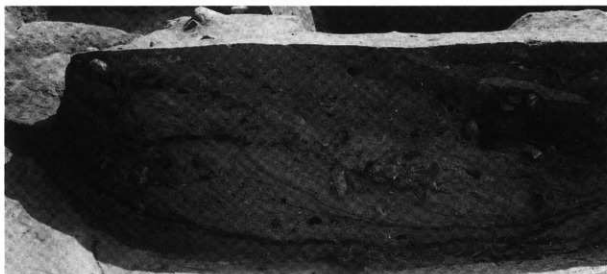
下層にはラミナが観察され、SD3から流れ込んだものと考えられる。洪水により一度に埋没した



第254図 2区第3遺構面平面図 1/150



第255図 2区落ち込み（北から）



第256図 落ち込み土層断面（北から）

ような状況が観察される。流木などが多数出土している。上層については、滞水状況で形成されたものと考えられる。上層からは獣骨が多数出土している。獣骨は牛のものと考えられ、中には焼けたものも認められた。落ち込みの埋没の最終段階に、解体した牛の骨を投棄したような状況が想定される。

なお、落ち込みの性格については溜池のような貯水施設の可能性も考えられるが、現時点では不明としたい。

③3区

遺構面を4面検出した。

第1遺構面（第257～259図）

第6層を取り除いた段階で検出した遺構面である。検出した遺構は水田跡である。

水田跡 畦畔を調査区中央で検出した（第257～259図）。畦畔の方位は東西方向を示す。畦畔の断面形は蒲鉾形を呈し、基底部において幅約1.5mを測る。畦畔を挟んで南北の水田面の比高差は約20cmである。水田面全域で人と牛のものと考えられる足跡痕を多数検出した。

この畦畔は、2区の第1遺構面のものと比較し規模が大きく、また畦畔を挟んで大きく比高差を持つことから、経営の単位を示すいわゆる大区画水田を形成する畦畔であると考えられる。

第2遺構面

第7層を取り除いた段階で検出した遺構面である。2区の第2遺構面に対応する面として調査したが、遺構は全く検出できなかった。

第3遺構面（第260図）

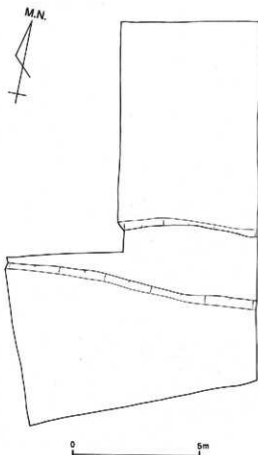
第8層の上半を取り除いた段階で検出した遺構面である。検出した遺構は土坑、溝、柱穴である。



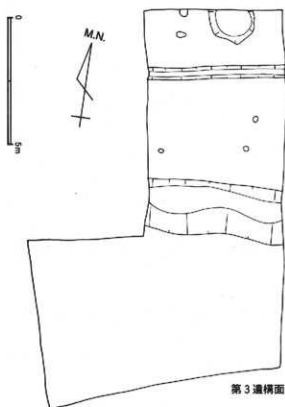
第257図 3区第1遺構面全景（南から）



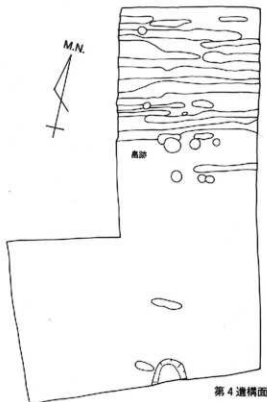
第258図 3区第1遺構面畦畔（西から）



第259図 3区第1遺構面平面図 1/150



第3遺構面



第4遺構面

第260図 3区第3・4遺構面平面図 1/150

遺構は調査区北半のみで検出された。溝の方位はほぼ東西方向を示す。柱穴を検出したが建物を復元するに至っていない。

第4遺構面（第260・261図）

第8層を完全に取り除いた第9層上面で検出した遺構面である。2区の第3遺構面に対応する。検出した遺構は畝跡、土坑、柱穴である。

畝跡 調査区北半で検出した。畝の方位はほぼ東西方向を示す。畝溝同士切り合いが認められるが、畝溝の深さから同時期の畝の単位を抽出できる。畝の幅は検出面で幅約1.5mを測る。畝溝の横断面はU字形で、検出面の幅は約20cm、検出面からの深さは約10cmのものと約20cmのものがある。また、畝に平行して鋤溝が認められた。
(山田・服部)

4) 出土遺物

①2区第2遺構面

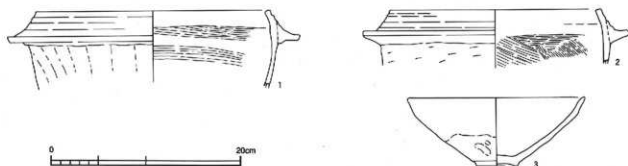
SD2出土土器

瓦質土器の羽釜と青磁碗が出土している（第262図）。

瓦質土器・羽釜 2個体出土している。2個体とも同タイプに分類されるものであ



第261図 3区第4遺構面全景（南から）



第262図 SD 2 出土土器 1/4

る。口縁部下に幅1.5cmの鈎を貼り付け、この箇所より上側の内外面を横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はヘラ削り、内面はハケ調整により、仕上げられている。また、体部外面には煤が多量に付着している。2は、口径22.4cm、鈎径28.2cm、残存高5.9cm。1は、口径25.0cm、鈎径31.0cm、残存高8.2cm。

青磁碗 1個体 (3) 出土している。外面下半から底部にかけての部分を除いて釉がかけられている。底部は削り出しにより高台が整形されている。口径18.6cm、底径4.4cm、器高7.2cm。

以上の出土遺物の時期については、羽釜の特徴から判断して、後述する落ち込み出土の羽釜とほぼ同時期と考えられる。

②2区第3遺構面

落ち込み出土土器

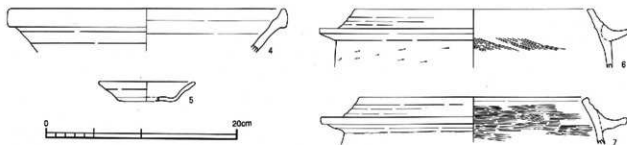
層位的に、上層出土土器 (第263図) と下層出土土器 (第264図) とに分けられる。

上層からは、須恵器・土師器・瓦質土器が出土している。須恵器はいわゆる東播系の捏鉢 1個体 (4) が出土している。土師器も、5の小皿 1個体である。口縁部内外面を横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。瓦質土器は、羽釜が2個体 (6・7) 出土している。2個体とも同タイプに分類される。口縁部下に鈎を貼り付けた後、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。口縁部外面はこの横ナデ調整により、凹線が施されている。また、体部外面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。兩個体とも、焼成はやや不十分である。

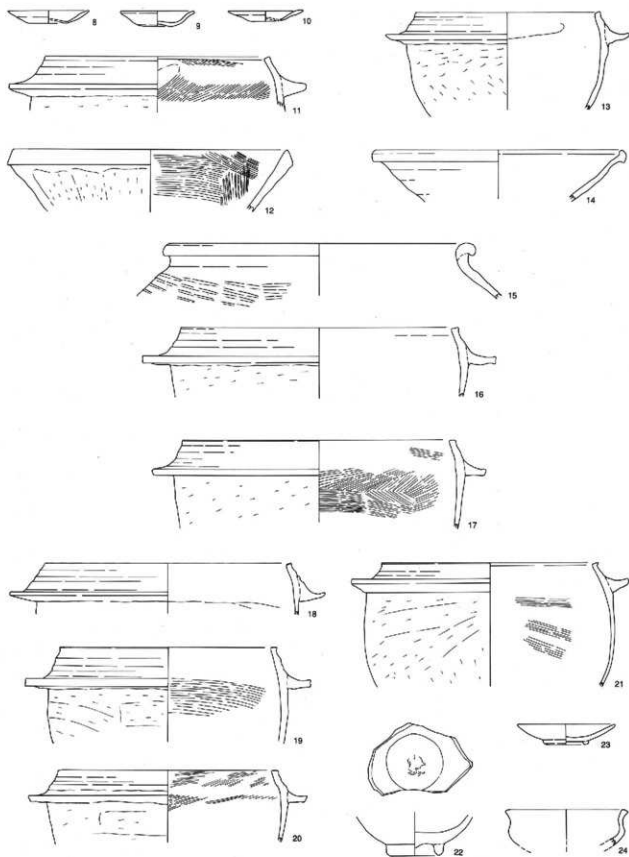
下層からは須恵器・土師器・瓦質土器・備前焼・青磁・白磁・陶器が出土している。

土師器は、小皿 (8・9・10) と羽釜 (11・13) が出土している。小皿は3個体とも同タイプで、いわゆるへそ皿に分類されるものと考えられる。完形に復原された9は、口径7.6cm、器高1.7cmを測る。羽釜も、法量的には差が認められるが、上層出土の羽釜と同タイプに分類されるものである。

須恵器は、捏鉢 (14) と甕 (15) が出土している。捏鉢は、口縁端部を上下方に拡張し、玉縁状に



第263図 落ち込み上層出土土器 1/4



第264図 落ち込み下層出土土器 1/4

仕上げている。口径26.0cm。堯は、体部外面をタタキ整形後、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。口径31.6cm。

瓦質土器は、羽釜のみが出土している。いずれも上層出土の羽釜と同タイプに分類されるものである。いずれも、鐔以下の外面には煤が付着している。口径は、22.2cm (20) から25.8cm (18)、鐔の径は、29.2cm (20) から33.4cm (18) を測る。

備前焼は、すり鉢が1点 (12) 出土している。外面をヘラ削り、内面をハケ調整により仕上げ、ヘラがきによりおろし目が施されている。口径28.8cm、残存高6.7cm。

青磁は碗が1個体 (22) 出土している。底部外面を除いては全面に施釉が認められ、底部外面はヘラ削りにより削りとられている。底径5.2cm、残存高4.4cmを測る。

白磁は皿が1個体 (23) 出土している。体部下半から底部にかけての外面を除いては施釉されている。口径9.8cm、器高2.4cmを測る。

陶器は、24の1個体である。体部内面と体部下半外面を除いては施釉されている。口径は11.6cmを測る。

以上の土器の時期については、須恵器の捏鉢の形態的特徴などから、14世紀前半と考えられる。

(山田・服部)

5) 小結

今回の調査の成果として、調査地の地形環境の変化とそれに対応した土地利用の変化をとらえることができた。以下に列挙する。

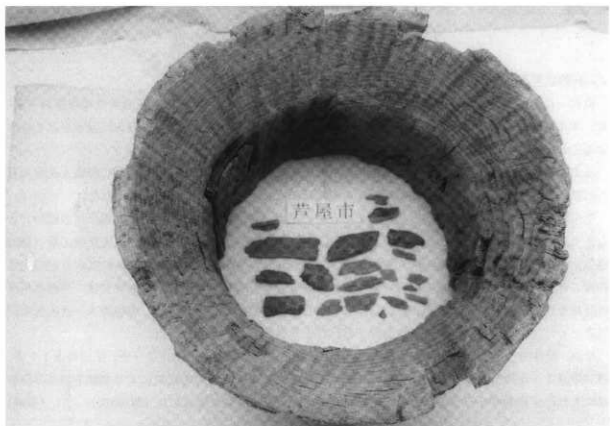
- (1) 中世 (室町時代) 以前： 洪水砂 (第9層) が堆積する。北西方向からの土砂の供給により堆積したものである。2区の調査区北東隅に微高地が形成される。
- (2) 中世 (室町時代後半)： 土壌層 (第8層) が形成される。居住域として利用される。2区に井戸が掘削される。しかし、居住域の本体は調査地北東側の微高地上で、調査地は居住域でも周縁にあたるものと考えられる。
- (3) 中世 (室町時代後半)： 土壌層 (第7層) が形成される。水田として利用される。この時期の畦畔はほぼ東西・南北方向を示す。
- (4) 中世 (室町時代後半)： 洪水砂 (第6層) が堆積する。北西方向からの土砂の供給により堆積したものである。第6層の堆積により調査地南側の低地は埋没し、調査地は平坦化する。
- (5) 中世 (室町時代後半) 以降： 以後、水田として近代まで利用され続ける。 (山田・服部)



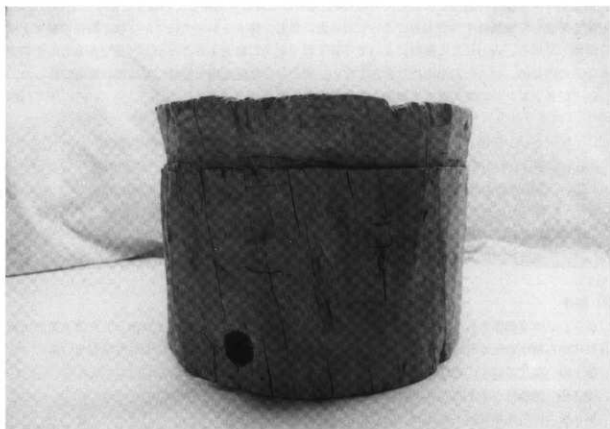
第265図 2区SE1水溜（処理前，株式会社 吉田生物研究所撮影）



第266図 2区SE1水溜（処理前，株式会社 吉田生物研究所撮影）



第267図 2区SE1水溜（処理後，株式会社 吉田生物研究所撮影）



第268図 2区SE1水溜（処理後，株式会社 吉田生物研究所撮影）

12 第31～33地点の確認調査

1) 調査に至る経緯と経過

阪神・淡路大震災の翌年度の平成8年度から事業開始された「若宮地区震災復興住環境整備事業」も、本年度が最終年度となり、事業課である市建設部開発事業課も平成13年3月末には本事業を完了することとなった。

事業の終盤を迎え、残っている事業が精査され、所管課から文化財課に事業地別に埋蔵文化財の存否に関する照会があった。照会に基づく事前協議は平成12年10月11日午前中に行われた。

その結果、東西南北十字の街区道路地下埋設付替工事（第29地点）については、現供用道路のこともあり、工事立会の取扱い、東西の区画道路（市道）の新設工事（第31地点）、広場整備工事（第32地点）〔約300㎡〕、緑地整備工事（第33地点）〔約780㎡〕については、中世水田跡の広がりが想定されることから、確認調査実施の取扱いとした。これを受け、市教育委員会文化財課では、当確認調査の計画を立て、日程を平成12年10月23日～10月30日までの実働6日間と定め、森岡秀人・辻康男を担当者として国庫補助事業適用（文化財課予算）により実施することとなった。

なお、具体的な確認調査の実施要項については、確認トレンチを第31地点2ヶ所、第32地点1ヶ所、第33地点2ヶ所の計5トレンチを設定する計画を立て、基本的には人力掘削により損壊予定部分を射程に入れた試掘調査を行うこととし、やむなき場合に限り重機を導入した（第269図）。（森岡）

2) 調査方法とその経過

確認調査は、平成12年10月23日～30日にかけて実施した。調査トレンチは、掘削を行った順に第1～第5トレンチまでの名称をあたえている。調査地には埋設管が現存していることが予想されたため、安全を考慮して掘削はすべて人力によって行った。但し、第5トレンチについては、現代の盛土が厚く堆積しており、人力による掘削によって一日工程で完全に除去することが不可能であることが判明した。そのため、いったん埋め戻しをおこない、次の日に急速重機を使用して深部の確認を行った。

以下に各トレンチの探入地点・規模・掘削深度を示す。

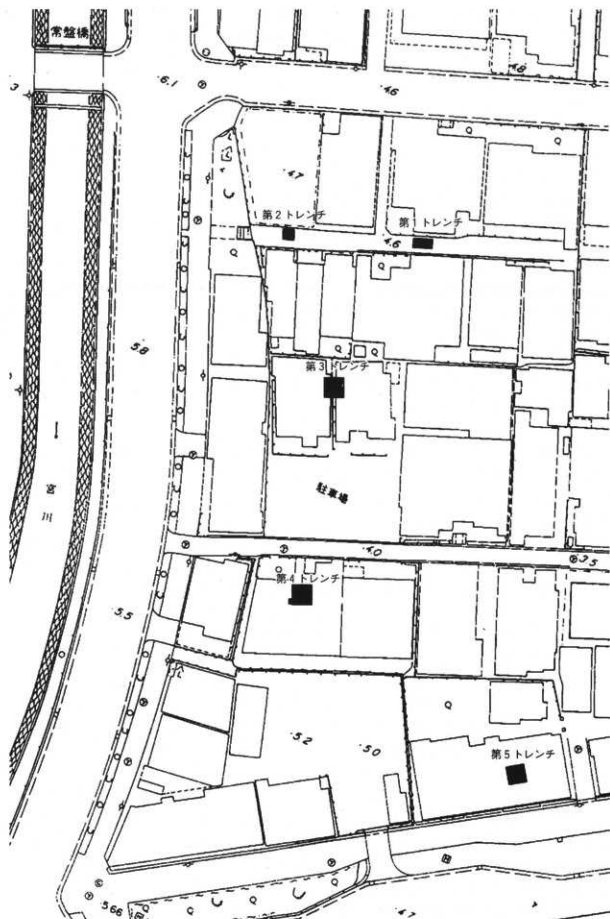
（注）

トレンチ名	南北長	東西長	掘削深度
第1トレンチ（第31地点）	120cm	240cm	100cm
第2トレンチ（第31地点）	150cm	150cm	110cm
第3トレンチ（第32地点）	200cm	200cm	100cm
第4トレンチ（第33地点）	200cm	270cm	100cm
第5トレンチ（第33地点）	240cm	180cm	290cm

3) 層序

各トレンチで観察された堆積層について、層相や現地表面からの比高および出土した考古遺物の相對年代から層序対比を行った。以下にそれぞれの堆積層の特徴および年代について示している。

- 第1層 現代の盛土・整地層（コンクリート、レンガ片などを多く含む）
- 第2層 黒褐色シルト混じり中粒砂～粗粒砂（近現代耕作土層）
- 第3層 灰白色細粒砂～粗粒砂（近世後半～近世前半耕作土層）
- 第4層 にぶい黄褐色砂質シルト～シルト質砂（中世耕作土層）



第269図 確認調査 試掘トレンチ配置図 1/500

第5-a層 灰黄色極粗粒砂～細礫（中世河川堆積物）

第5-b層 オリーブ灰色シルト質砂（中世自然堤防堆積物）

（第270図参照）

（辻）

4) 調査結果

①第1トレンチ（第31地点）

現地表面下（以下G.L.と略す）から40cmの位置で中世の遺物を包含する第4層が確認された（第270・271・273・274図）。第4層からは、中世の土師器細片が1点出土している。この遺物については、遺憾ながら洗浄過程で消滅した。第4層上面では、氾濫堆積物起源と考えられる砂礫層によって充填された土坑が検出された。土坑は、深さ20cm前後を測る。第3層上面では、第2層を埋土とする鋤跡が検出されている。

②第2トレンチ（第31地点）

G.L.-50cmで第4層が検出された（第270・275図）。第4層からは、中世後半の陶器片が出土している。第4層上面では、第3層を埋土とする溝が検出された。

③第3トレンチ（第32地点）

このトレンチでは、第4層が検出されなかった（第270・276図）。第3層からは、中世末～近世初期の陶器片が、第5-a層からは縄文時代晩期の土器片が出土している。遺構は第3層上面において、第2層を埋土とする鋤跡が検出されている。

④第4トレンチ（第33地点）

第3層からは、近世後半の陶磁器類の破片が多く出土している（第270・271・277・278図）。G.L.-40cmで第4層が検出された。第4層のベースをなす第5-b層上面では、第4層形成時に生じたと推定される凹凸が検出されている。

⑤第5トレンチ（第33地点）

G.L.-140cmまでは、現代の盛土および耕土層が累重している（第270・279図）。G.L.-60cmまでには、大阪群層の偽礫を多数含む盛土が存在しており、この下位に層厚10cm程度の黒褐色を呈する現代の水田耕作土が形成されていた。この水田耕作土の造成時に形成されたと推定される盛土が、耕作土の下位-60cm付近まで連続していた。これより下位には、第5-a層に相当すると考えられる砂礫層が連続している。このトレンチからは、遺物・遺構は検出されなかった。（辻）

5) 出土遺物の分析

①第1トレンチ（第31地点）出土資料

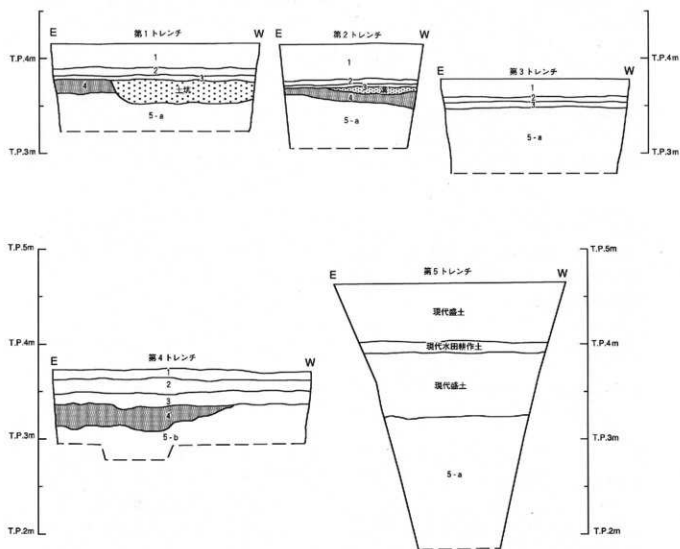
第4層出土土師器（細片）は褐色を呈するヘソ皿風の破片できわめて脆弱なため、洗浄の過程で消滅した。時期に関しては、14～15世紀頃のものと思われる。

②第2トレンチ（第31地点）出土資料

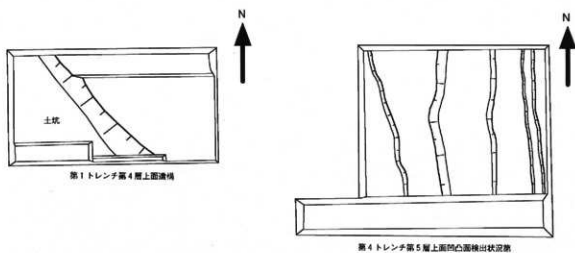
第4層から陶器片1点と炭化物が出土している。体部の破片とみられ、外面には一部磨きがかかる。器内は淡茶褐色を示し、堅い緻密な焼き上がりである。中世末期のものと思われる。

③第3トレンチ（第32地点）出土資料

第3層上面出土資料は、中・近世陶器の破片2点で、1点は甕形の口縁部片とみられ、トタン葺状の沈凹線が走行する。内面の色調は備前ではなく、信楽・常滑風に思われるが、定かではない。この破片は、中世末～近世初期のものであろう。いま1点は茶瓶の把手風の円環部の断片である。備前風の色調を呈するが、器質は白っぽくあまい焼き上がりである。近世後半期以降のものであろう。



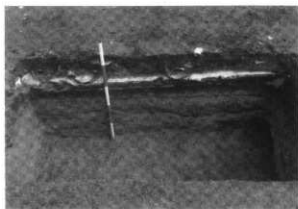
第270図 第1～5トレンチ土層断面図 1/40



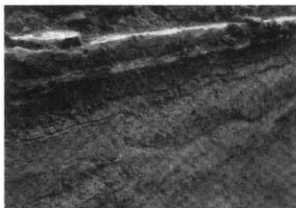
第271図 第1・4トレンチ検出遺構平面図 1/40



第272図 調査地近景（南東から）



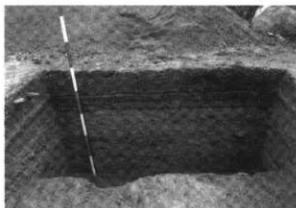
第273図 第1トレンチ南壁土層断面（北から）



第274図 第1トレンチ第4層上面土坑土層断面（北東から）



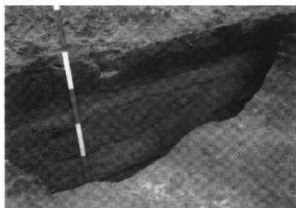
第275図 第2トレンチ完掘状況（南東から）



第276図 第3トレンチ南壁土層断面（北から）



第277図 第4トレンチ第5層上面検出状況（北から）



第278図 第4トレンチ南壁土層断面（北東から）



第279図 第5トレンチ南壁土層断面（北から）

第3層内出土遺物は、外青磁片1点と瓦の細片1点から成る。外青磁は碗とみられ、高台部～底部の破片で、内面は素胎である。江戸時代のものであろう。瓦片についても近世以降の年代のものである。

第5-a層出土の土器片は、縄文時代晩期の土器片とみて大過ない。色調は黄色をベースとする淡黄褐色で、胎土中には径2～3mmの石英・長石粒や淡赤色シャモットを含有する。外面や凹凸のみられる粗製な土器で、弯曲部位に相当するとみられ、深鉢の胴部中位の破片と考えられるが、全容を推し測れるものではない。外面には上下で調整の差違が看取される。厚さ5mm以下の薄い器壁で、破断面はローリングを受けており、砂層内を動いたものとみられる。この土器は、従来から本遺跡で出土している晩期突帯文土器の器質にきわめて類似している。

④第4トレンチ（第33地点）出土資料

主として第3層から土器・陶器・磁器が11点出土している。内訳は土師質土器5点（土師器小皿・炬燵など）、陶器3点（播鉢・施釉陶器など）、磁器3点（伊万里系染付磁器）で、上限は14世紀、下限は18世紀の資料である。小皿には中世後半期のヘソ皿の類を含み、播鉢片は胎土・色調と型式から明石系のものと判断される。

（森岡）

6) 小結

以上の調査結果に基づき、若宮遺跡の中世水田耕作土層が官川左岸部の全域に遺存していないことが判明した。したがって、それらが遺存する部分に限っての事前調査（損壊部分の全面調査）が必要と思われる。その取扱いを地点別に簡潔に記すと、下記のようなろう。工事が急がれる箇所については早期の協議が必要と思われる。

①第31地点について

損壊部分を対象とした発掘調査が必要。保護層を考えると、深さ20cm以上の掘削が入る場合は、すべて調査対象。深さ20cm以内に収まる浅い工事に変更可能であれば、工事立会に関する協議を行う蓋然性が高い。

②第32地点について

発掘調査は不要。ただし、縄文土器片が包含されている地層が確認されているため、埋蔵文化財担当者による工事中の立会が必要。

③第33地点について

中世水田耕作上を確認した北西部の一角は発掘調査が必要。保護層を考えると、深さ20cm以上の掘削が及ぶ部分は全域が調査対象となる。深さ20cm以内に収まる浅い工事に変更可能であれば、工事立会に関する協議に変更可能。

遺物・遺構が検出されなかった南東部の一角については、工事立会のみでの取扱いとなる。ただし、建物によって未調査部分が多いため、工事に先行する深堀り確認が必要。また、北西部と南東部の中間地域は、重機の立入りが不能であったため、試掘対象外となっている。遺跡範囲線が通る部分であるため、調査可能な時点で再度試掘を行う必要がある。

④要点

縄文時代晩期の土器片が出土したことについては、本遺跡の最西限の位置を確認したことになり、貴重な成果を得たといえよう。今回の調査では、弥生文化期の集落についてはその兆候を得ることができなかった。調査対象外とした第32地点については、流路が存在するようであり、より上流部の周辺に縄文時代晩期の集落が存在する可能性が高い。

（森岡）

13 第31地点の調査

1) 調査に至る経緯と経過

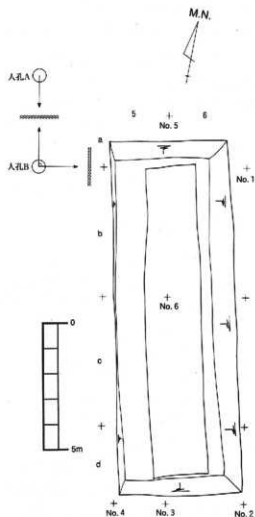
阪神・淡路大震災の翌年度の平成8年度から事業開始された「若宮地区震災復興住環境整備事業」も、平成12年度が最終年度となり、事業課である市建設部開発事業課も平成13年3月末には当面の事業を完了した。しかし、遅れを含めた諸般の関係で翌年度に繰り越された工事もあり、平成13年度は4月当初から懸案の事業である地区内8番街区区画道路（市道）新設地下埋設工事に伴う事前調査を行うこととなった。平成13年3月28日、発掘調査に先立って原因者である芦屋市開発事業課の岡松課長、三柴係員と文化財課係長の森岡で若干の前打ち合わせを行い、4月5日に発掘調査を担当する森岡係長・坂田囑託と同事業課の岡松・三柴両氏および発掘工事委託会社・東海アナース株式会社と現地打ち合わせを進め、調査工程、調査区の設定、発掘調査の方法、排土処理の方法、発掘現場の安全管理などを協議した。

その結果、調査日程は平成13年4月9日～4月27日（整理期間を含む）と定められ、損壊部分を調査対象とするも安全の確保を限界とすること、排土の処理は機械掘削分については西方の用地への移動を図り、人力掘削に移行してからは、南側の道路事業地（平成12年度発掘調査済）へ仮置きする方針とした。なお、調査区に関しては、当初L字状の道路計画にあわせて設定する予定であったが、東西道路部分は人家の門前に当たる関係もあり、南北方向の調査区の所見に応じて必要な場合のみ発掘の対象とし、とりあえずは発掘をみあわせ、工事立会の取扱いとした。

以上の現地協議に基づき、具体的な作業は4月6日の現場の安全対策から開始し、森岡・坂田を発掘担当者として、予定どおり4月9日から発掘調査を開始し4月23日に終了した。調査経費については、全額原因者（市開発事業課）負担としたことを付記する。（森岡）

2) 調査の方法

本調査地点は、北・東・西面に家屋が建っており、地盤崩壊を危惧して、3段掘りの方法で進めた。よって調査区は、隣地境界より1.2～1.5m程後退させ設定した。掘削深度は、区画道路（市道）に伴う埋設物によって損壊する深度までとした。前述したが、掘削によって排出される残土は、機械掘削による残土を当トレンチより西50mにある仮残土置場へ、人力掘削による残土を南接する（第34地点）仮残土置場へ搬出した。測量の基準座標は、本市道路課設置の人孔を基準とし、当トレンチ内に任意の基準杭No.1を打設した（第280図）。また、地区割は、基準杭No.1を基に5m四方のメッシュで設定し、西から5・6…、北からa・b・c…と付した。なお、東西番号が5から始まるのは、当



第280図 調査区配置図

調査開始時に搬入路である東西道路の調査の可能性が示唆されていたためである。基準高は、常盤橋交差点南東のベンチマーク（本市建設部開発事業課設置）T.P.+5.711mより水準測量を実施した。土層断面図の作成は、前述の事由から1段目は西壁に、2段目以下は四方壁に上留め板を打設したため、東・南壁のみ実測し基本層序の作成に努めた。（坂田典彦）

3) 層序（第284～286図）

土層番号は、現況地表面を含む表土（盛土・客土）層を第1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アルファベットの小文字を付してまとめた。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。前述の通り土層断面図は、1段目トレンチ部分（T.P.+2.2m）までを東壁・西壁を、2段目以下（T.P.+0.5m）は東壁の一部分をピックアップし、基本層序の作成を行った。以下に各層の土質・性格を記す。なお、各層の年代観については出土した土器の中で下限時期を当てた。

第1a層 現代の盛土および客土

第1b層 礫混じり粗粒砂（径5mm大の礫含む）
旧耕土層上位の盛土によって大部分の攪乱を受け、ガラが混入（「1層下位」を転記）。

第2a層 現代耕土層 2.5Y4/2 暗灰黄色 礫混じり中粒砂（現代の陶磁器片）（炭化物含む）
径4mm以下の礫を多量に含む。

第2b層 床土相当層 2.5Y6/3 にぶい黄色 礫混じり砂質シルト（径4mm以下の細礫と細粒砂）硬く締まる。

第2c層 2.5Y5/2 暗灰黄色 と 2.5YR4/6 赤褐色 礫混じり粗粒砂（径10mm以下の礫を多量に含む）（炭化物含む）（植生有り）
（下位から径5mm大の礫と中～細粒砂のブロックを含む）。

第3a層 植生はあるが、耕土の可能性は低い（木は生えていた）7.5Y7/2 灰白色と7.5YR4/6 褐色 礫混じり粗～中粒砂（ブロック状に砂の塊が混じる）。

第3b層 10YR4/1 褐灰色 礫混じり中粒砂（径3mm大の礫を多量に含む）（炭化物を少量含む）硬く締まる。水分含有量多い。

第3c層 10YR5/2 灰黄褐色 礫混じり粗～中粒砂（径3mm大の礫を中量含む）水分含有



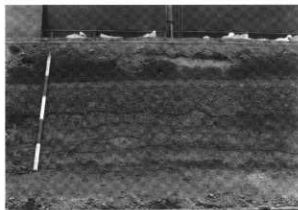
第281図 調査区設定状況（北から）



282図 2段目調査風景（北から）



第283図 3段目調査風景（北から）



第284図 調査区東壁（1段目）土層断面（西から）



第285図 調査区東壁（2・3段目）土層断面（北西から）

量多い。

- 第4層 植生はあるが、耕土ではない 10YR5/8 黄褐色 と 2.5Y7/3 浅黄色 シルトと礫泥じり細粒砂の互層（堆積時の流速の差違）。
- 第5層 7.5YR5/8 明褐色 と 10Y7/1 灰白色 中粒砂泥じりシルト（植物遺体微量に含む）
- 第6層 7.5YR6/8 橙色 と 10YR7/3 にぶい黄橙 礫泥じり中粒砂から細粒砂の互層（径2mm～1cmの礫と、径4mm大の中礫を含む）2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂質シルトの薄層。中世～近世の遺物片と古墳時代初頭の埴底部出土。下位にて湧水が著しい。
- 第7層 2.5Y4/1 黄灰色 礫泥じり細粒砂（径2mm大の礫を微量に含む）（植物遺体を微量に含む）下位面で動物の足跡痕跡（ウシのものと思われる）。
- 第8a層 5Y3/1 オリーブ黒色 礫泥じり中～細粒砂（径2mm以下の細礫を多量に含む）中世の遺物を包含。
- 第8b層 2.5Y3/1 黒褐色 礫泥じり粗～中粒砂（径2mm以下の細礫多量に含む）中世の遺物を包含。
- 第9層 5Y4/1 灰色 礫泥じり粗粒砂（径5～15cm大の円礫が散見される）中世の遺物を少量検出。

（坂田）

4)検出遺構（第287～289図）

本調査では、第6層中位面において①第1遺構面を、第7層下位面において②第2遺構面を検出した。②については、残存状態から調査担当者の判断で撮影記録を行った。以下に詳細を述べる。

①第1遺構面（第287～288図）

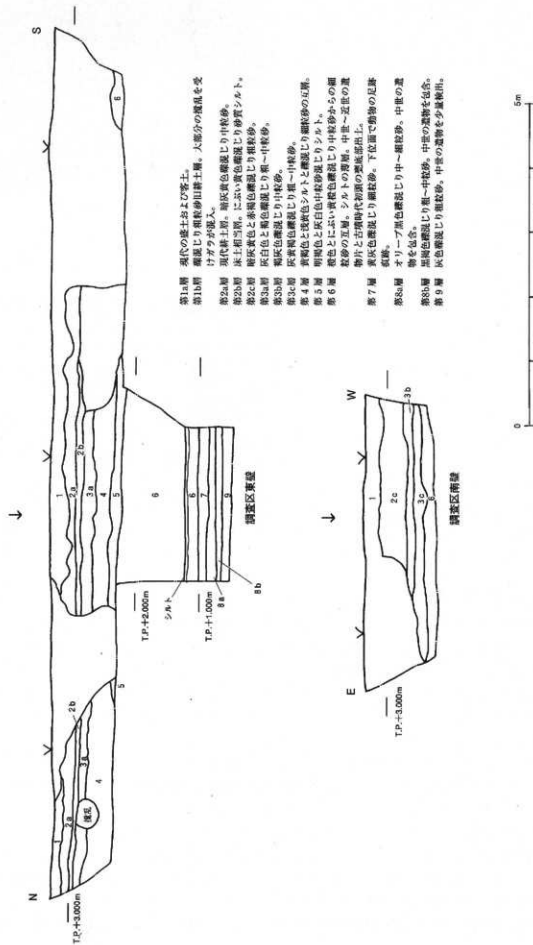
調査区南端、5cd・6cd地区で自然流路を検出した。底面比高差から流下方向を判断することは検出条件から不可能であるが、地形環境から北西から南東へ流下するものと推測する。断面形状は、皿形で幅は推定2m、深さは0.4mを測る。遺構内堆積土は以下に分層できた。

- 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土～極細粒砂。植物遺体を少量含む。
- 10YR5/6 黄褐色 と 2.5Y6/4 にぶい黄色礫泥じり粗粒砂。径4mm以下の細礫を中量含む。ラミナが見られる。

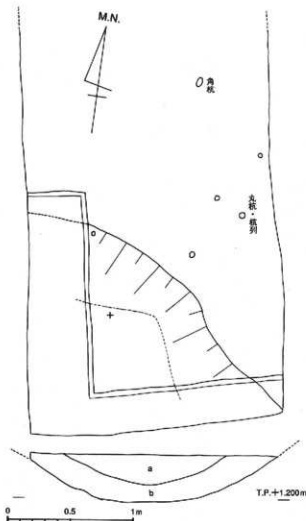
遺構の性格は、宮川(の前身河川)による河道堆積物（第6層）中に形成されていることから一過性のものと思われる。堆積土aに至って滞水および澱水期であったことが窺える。

また、同一面にて北東から南西に立する杭列を検出した。杭は丸杭と角杭があり、それぞれ腐蝕が著しく、検出面から杭先まで10cm足らずであった。

検出状況、杭の性格から、いつの時期に打設したかは不明であり、自然流路1との関連はつかめな



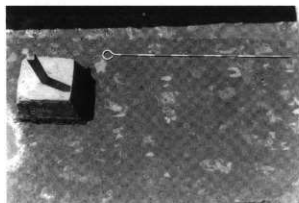
第286図 土層断面図 1/60



第287図 自然流路1平面図 1/30



第288図 自然流路1発掘状況(北から)



第289図 第2遺構面検出状況(東から)

かった。遺構形成時期は、出土遺物が皆無であったが、第6層中位から切り込むことで、近世期に相当したと思われる。

②第2遺構面(第289図)

調査区北半、5b地区でウシのものと思われる足跡痕を検出した。第7層下位面から踏み込み第8層に至る。堆積上は、第7層によって充填されていた。明確なものは2点しかなく、方向性・性格は不明である。ただし、該期に当トレッチ周縁の水田ないし畑耕作を確定する知見となろう。遺構所属時期は、層位から中世期に相当する。(坂田)

5) 出土遺物(第290図)

当調査では、中世期を中心に、近世期、古墳時代初頭の土器が出土した。総数はコンテナ1/2箱分、全て細片である。遺物の実測は、その中から器形・器種のわかるものをピックアップし復元した。レイアウトは、各層ごとに配置し、縮尺は上記の理由から1/4で作成した。以下に詳細を記す。

①第6層出土遺物

1は、国産陶器の碗である。底径は4.3cmを測る。胎土は精緻で、にぶい橙色を呈する。内外面とも施軸する。高台は断面逆台形である。見込みは渦巻文を描く。近世以降の所産である。2は、土師器の甕底部である。底径は3.1cmを測り磨減が著しい。3は、土師器小皿である。口径は8.6cmを測り、灰白色を呈する。口縁端部内外面には煤が付着する。中世期、13～14世紀に比定される。4は、

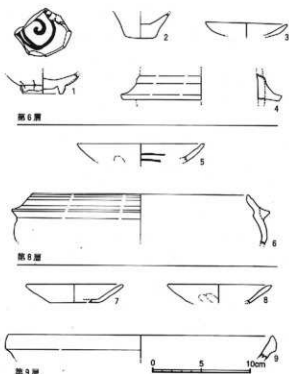
土師器羽釜である。鈎部径は17cmを測る。鈎部下面に煤が付着する。磨減が著しく、調整は不明である。

②第8層出土遺物

5は、瓦器境である。口径は推定13cmを測る。口縁部はヨコナデを施し、端部は丸くおわる。外面調整はユビオサエを施し、残存部からはミガキは見られない。内面調整はミガキ圏線を施す。和泉型である。6は、瓦質羽釜である。口径は22.4cm、鈎部径は27cmを測る。鈎部は断面三角形を呈し、貼り付けている。鈎部下面から体部にかけて煤が付着する。

③第9層出土遺物

7・8は、土師器皿である。口径は7が10cm、8が10.8cmを測る。色調は7が灰白色、8がぶい橙色を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、外面体部～底部にかけて指ナデを施す。13～14世紀に比定される。9は、土師質の鉢である。口径は推定27.6cmを測る。端部は肥厚し、受口状を呈する。色調は、灰～オリーブ黒色を呈する。



第290図 出土遺物実測図 1/4

(坂田)

6) 小結

当地点では、既往の調査成果との整合を追認できたことに加え、新たな問題提起を得ることができた。以下にその推察を混じえ列挙することでまとめにかえたい。

①中世包含層

当調査において、第8層中世包含層は周辺の調査成果と一致し、当地点においても該期に人々の生活する地域であったことが確認できた。また、当地点南側の調査（第34地点）では集石による護岸設備が検出されており、今回の調査はその追認を目標にした。しかし、当地点において人為的な遺構は検出されなかった。ただし、3段目トレンチ部（幅1m×長さ4m）の調査であり、調査区外に遺構が存在する可能性は高いと言えよう。

②当地点の土地利用について

当トレンチ基本層序における第1b～2b層は、近現代耕作土に相当し、該期に周辺では水田が広がっていたことが確認できた。第3a～6層までは、巨視的に見て宮川の前身河川による氾濫・洪水が繰り返し起こっていたことが窺える。その中で第3層、第5層は一時期離水し、植生のおよぶ環境であろうが、水田・畑耕土と断定できる要素はなく、担当者の管見では草木は生えるが生産域としての土地利用はしていなかったと考える。例えば、既往の調査において中世耕土層の確認された範囲から推測しても上記を裏づける。おそらく該期の水田耕作地は、定形の区画された土地利用ではなく、不定形の条件の良い土地（宮川前身河川の氾濫を視野に入れた）を選んで利用していたと思われる。第3a～第5層の年代観は、各層から中世～近世期にわたる遺物が出土しており、今回の調査では、各層ごとに年代を与えることはできなかった。

(坂田)

本調査をもって5年間に及んだ若宮遺跡の住環境整備事業に伴う発掘調査は終止符が打たれる。関係者の遺跡保護に向けての理解と協力に対し、厚く感謝する。

(森岡)

14 第34地点の発掘調査

1) 調査の方法

街区内道路が計画された調査地内には、2カ所のトレンチが設定された（第291図）。東西方向に長軸を持つトレンチ（以下東西トレンチと略す）は、幅3m、長さ18mの規模を測る。南北方向に長軸を持つトレンチ（以下南北トレンチ）は、幅4m、長さ16mを測る。確認調査によって、調査地は極めて軟弱な砂質堆積物で構成されていることが明らかとなった。そのため全面調査の実施にあたっては、機械掘削深度の現地表面下（以下G.L.と略す）1m部分に幅1mの犬走りを設け、さらにトレンチ周囲に鋼鉄製パイプおよび板材による補強工事を行い、断面崩壊の防止に努めた。

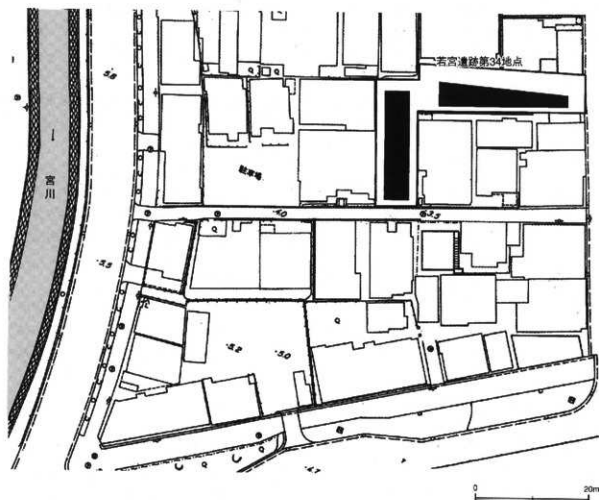
機械掘削深度は、確認調査報告書に基づきG.L.1mまでに存在する近世以降と推定される堆積層を対象とした。これより下位、調査終了深度までに存在する堆積層については、人力掘削によって、遺構・遺物の検出作業を行った。トレンチから排出された土砂は、すべて場内処分とした。

基準高には、芦屋市道路課が設置したマンホール地盤高を使用した。

（注）

2) 層序

東西、南北のトレンチでは、堆積層累重の様相が大きく異なっており、調査当初、両トレンチ間の



第291図 調査区配置図 1/700



第293図 東西トレンチ南壁土層断面（北東から）



第294図 東西トレンチ溝1断面（北東から）

は、作土層と推定される砂質礫質シルト層の6-a層が認められる。この6-a層は、上位の第4層形成時に大きく削平されており、10cm程度の層厚を残存するのみであった。このため、作土層の地目を推定することが不可能であった。6-a層の下部には、作土層ベースを構成するシルト混じり粗粒砂～細礫層の6-b層が存在している。層厚は12cmを測る。6-b層内には、3cm前後の灰色シルトからなる偽礫が多く含まれている。本層は、直下に位置する第7層を削平して形成されている。層相および累重様式から、6-b層は整地層として形成されることが推定される。

第7層：中世後半の氾濫堆積物および流路充填堆積物。灰白色（5Y8/1）中粒砂～細礫。南北トレンチでは、流路充填堆積物と推定されるトラフ型斜交層理をなす極粗粒砂～細礫層が、14世紀前半に形成された護岸状遺構を覆うようにして累重している。この部分での層厚は150cmを測る。東西トレンチでは、中世後半の整地層である第8層を覆って堆積している。この部分での層厚は30cmを測る。東西トレンチの第7層は、明瞭な逆級化を示しており、下部にオリブ灰色（2.5GY6/1）シルト質砂～極細粒砂の薄層が、上部に灰オリブ色（5Y6/2）を呈しプラナー型斜交層理をなす中粒砂～細礫層が累重している。東西トレンチで認められる第7層は、層相から氾濫堆積物として形成されることが推定される〔増田・伊勢屋1985〕。

第8層：中世後半の整地層。暗オリブ灰色（5GY3/1）砂質シルト。東西トレンチのみに存在している。層厚は10～30cmを測る。本層には、下部の第9層に由来するシルトで構成される2～5cm前後の偽礫が多く含まれているほか、第9層をベースとする遺構に含まれていたと推定される土器片や骨片も多量に包含されていた。上記のような堆積層の特徴から、本層は削平および整地によって形成された人為的擾乱層であることが推定される。

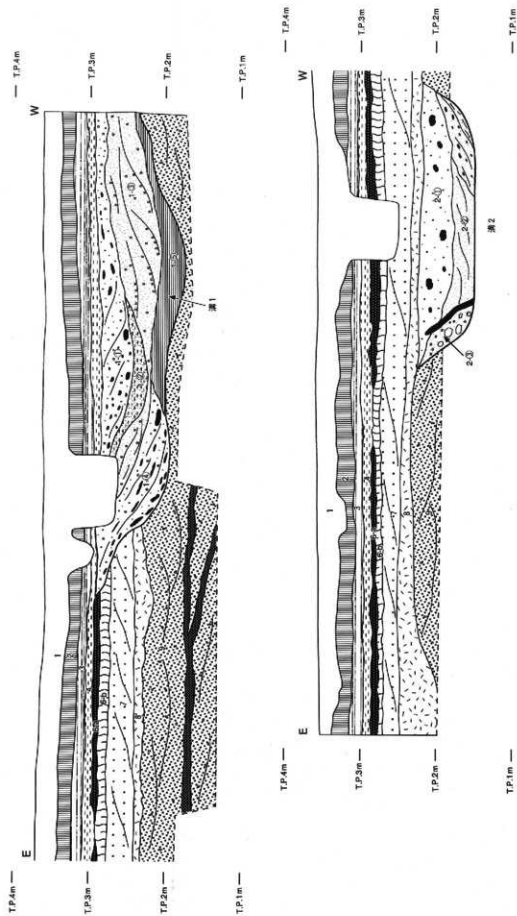
第9層：中世に形成されたと推定される河川堆積物。灰白色（5Y8/1）極粗粒砂～細礫で主に構成されており、層厚は180cm以上を測る。堆積層下部～中部は、流路充填堆積物と考えられるトラフ型斜交層理をなす砂礫層によって構成されている。第9層上部～最上部にかけては、流路縁や河岸堆積物と推定される砂泥互層や平行層理ないしプラナー型斜交層理をなす砂層が堆積している。（辻）

3) 検出遺構

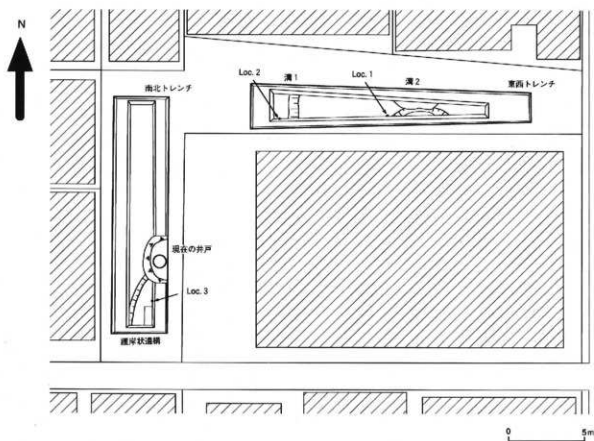
東西トレンチでは、2条の溝（溝1・溝2）が、南北トレンチでは護岸状遺構が検出された。以下に検出された遺構の埋没過程や遺物の出土状況について述べていく。

①東西トレンチ

溝1は、トレンチ西端部において検出された（第294・296図）。本遺構は、第5層上面から形成されている。第8層より上部の堆積層を機械掘削によって除去したため、溝1については、遺構最上面



第295図 東西トレンチ南壁道路地質断面図 1/50



第296図 検出遺構平面図 1/250

からの調査を行うことができなかった。検出面は、T.P.2.9mの標高を測る。層序および出土遺物から、溝1は、15世紀末期～16世紀までの間に形成されることが想定される。溝の西側は、トレンチ外側に位置しており、完掘することが不可能であった。推定される溝幅は、6m前後で、深さ1.2mを測る。溝最下部には、滞水堆積物である暗緑灰色（10GY4/1）砂質粘土質シルトの1-⑤層が堆積している。この上部の溝東肩付近には、人為的に投入されたと考えられる灰白色（5Y7/2）偽礫混じり極粗粒砂で構成される1-④層が存在している。1-④層からは、羽釜などの破片が出土している。西側には、氾濫堆積物と推定されるプランナー型斜交葉理をなす灰色（5Y6/1）極粗粒砂の1-③層が認められる。これらの堆積面上部には、滞水堆積物であるにぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルトの1-②層が堆積している。埋土最上部には、層相から明らかに人為層と判断される灰色（5Y5/1）偽礫混じり極粗粒砂～細礫で構成される1-①層が堆積している。このことから、溝1は埋没過程の最終段階で人為的に埋め立てられたことがわかる。遺構埋没後、上部には中世末期の耕作土層である第4層が形成される。

溝2は中世に形成されたと推定される河川堆積物の第9層上面で検出された（第295・296図）。検出面の標高は、T.P.2.3mを測る。遺構埋土からは、14世紀前半を下限年代とする遺物が検出されている。本遺構は検出面の高度から、南側に隣接する第25地点で確認されているSD3に連続する遺構であると判断される。本調査地点では、遺構北側と想定される部分しか検出されていない。このことから、第25地点で検出されたSD3は、第25・34地点の境界付近で西側に屈曲していることが想定される。溝2は、幅3.8m以上、深さ80cmの規模を測る。溝の最下層には、斜交葉理の発達するオリブ黒色（7.5Y3/1）中粒砂の2-②層が堆積している。この上部には、層相から人為層と判断されるオリ

ープ黒色（7.5Y3/1）偽礫混じり砂質シルトで構成される2-①層が累重している。溝の東側斜面は、直径5cm程度の木杭が打設されていた。裏込めに当たる2-③層には、灰白色（7.5Y8/1）を呈するシルト質中粒砂をマトリックスとする長軸が15cm前後の礫が多く充填されていた。溝2埋土最上部の2-①層内からは、中世後半の羽釜片などや獣骨が多く出土している。また、第V様式末～庄内式期の壺および鉢が破砕された状態で検出されている。

②南北トレンチ

護岸状遺構は、トレンチ南端部、T.P.1.5mにおいて検出された（第292・296図）。遺構堆積層からは、14世紀前半を下限年代とする遺物が検出されている。遺構は、河岸と推定される斜面上に形成されている。遺構横断面型は、くさび型を呈しており（第301・303図）、トレンチ東端部では幅20cm、西端部では60cm以上の高さを測る。遺構最上部の西半部分には、植物遺体を多量に含む暗オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質砂質シルトで構成される①層が分布している。本層は塊状を呈しており、堆積層内に含まれる植物遺体にも葉理は認められない。このことから、①層は人為的に形成された堆積層である可能性が想定される。この直下には、大礫および植物遺体を多く含む塊状をなす灰色（10Y5/1）シルト混じり中粒砂の②層が存在している。②層内には、緑灰色を呈すシルト質の偽礫が含まれている。②層上面は、西側に向かって緩やかに傾斜している。②層上面において、長軸10～20cm程度の垂角～重円礫が散布している状況が確認された（第297図）。特に西側の傾斜部分、①層の分布範囲の直下で、礫の密集度が高くなっていた。礫にはインプリケーションなどは認められず、人為的に設置されたものと推定される。②層内では、14世紀前半の瓦質土器や陶器片と共に多量の獣骨が検出された（第298～300・304図）。検出された獣骨は、散在した出土状況を示しており、解剖学的な位置を保持している個体は観察されなかった。獣骨の下部にも中礫サイズの礫が検出されており、礫間に挟まれるようにして骨が存在している箇所も多い。これらの獣骨間を充填するマトリックスは、



第297図 護岸状遺構（北西から）



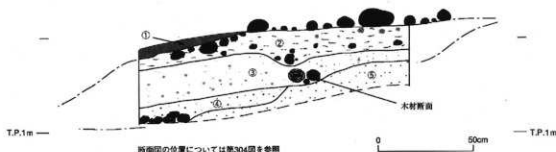
第298図 護岸状遺構獣骨出土状況全景（北から）



第299図 護岸状遺構獣骨出土状況北東区（西から）



第300図 護岸状遺構獣骨出土状況南東区（西から）

A
T.P.2mB
T.P.2m

断面図の位置については第304図を参照

第301図 護岸伏違構南壁断面図（土色・粒径については本文参照） 1/20

層相から盛土と判断される②層によって構成されている。今回の調査では、獣骨とこれを充填する②層との時間的關係について示唆するような証拠を認識できなかった。そのため、護岸伏違構上に獣骨が存在するようになった後、②層に覆われるまでの過程には不明な点を多く残している。なお、検出された獣骨については、付論2で詳しく考察が行われている。

獣骨検出面の基盤層となる③層は、微細な偽稜を含み塊状をなすオリブ灰色（2.5GY5/1）シルト混じり中粒砂で構成される。層相から、人為的に形成された盛土であることがわかる。盛土である③層内では、補強材として埋設されたと推定される木材が検出された（第303・305図）。遺構構築土の基盤となる④層は、大礫を多量に含む暗オリブ灰色（2.5GY5/1）シルト混じり中粒砂で構成される。この直下には、灰白色（10Y7/1）中粒砂～極粗粒砂からなる河川堆積物の⑤層が存在している。

以上のような遺構の特徴から、本遺構は河岸斜面に形成された小規模な護岸であったことが想定される。

③第34地点の遺跡形成過程

遺跡堆積層最下部に位置する第9層には、上方に向かって流路充填堆積物から流路縁堆積物への層相変化が観察される。東西、南北トレンチの層序対比から、第9層上面は、東西トレンチ西端部付近から西側に向かって傾斜していることが明らかとなった（第292図）。これらの結果から、東西トレンチは河岸頂部、南北トレンチは河岸斜面に位置していることが推定される。この時期、流路はさらに西側の低い位置を流下していたことが想定される。

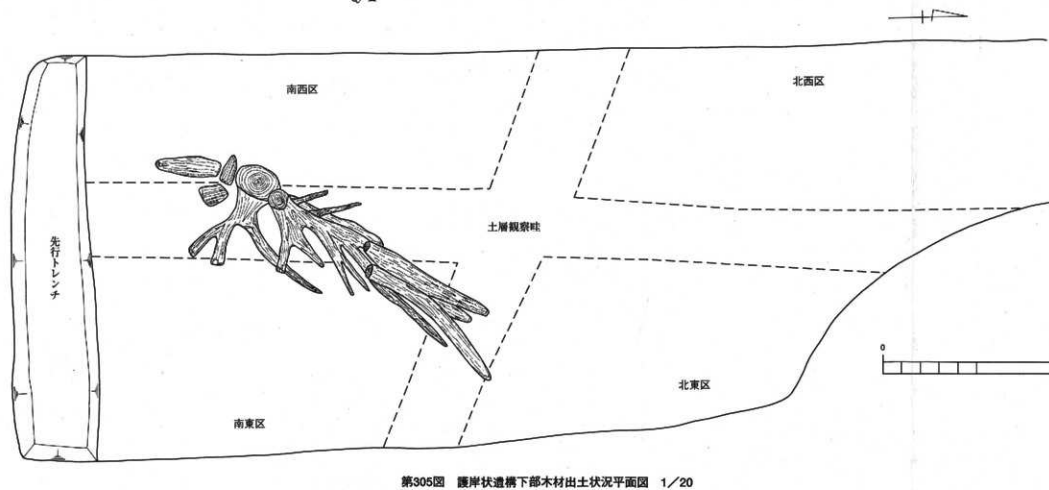
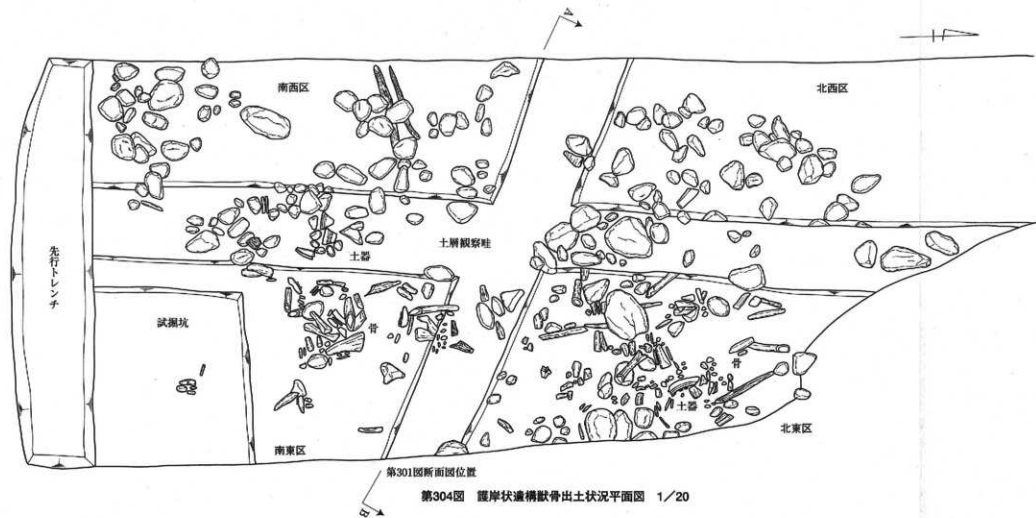
14世紀前半には、これら河岸頂部～斜面にかけての人間活動の痕跡が認められ、東西トレンチでは溝2が、南北トレンチでは護岸と推定される遺構が形成される（第306図）。南側に隣接する第25地点

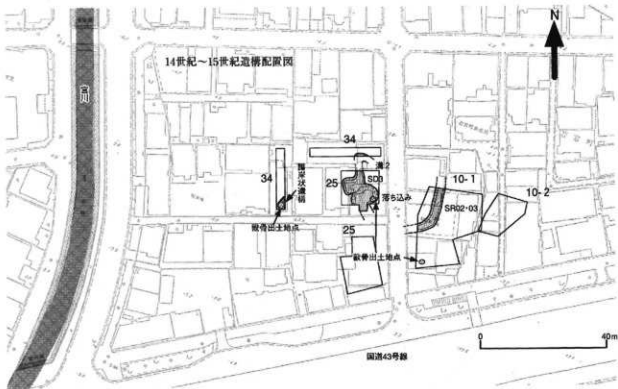


第302図 護岸伏違構断面（南から）



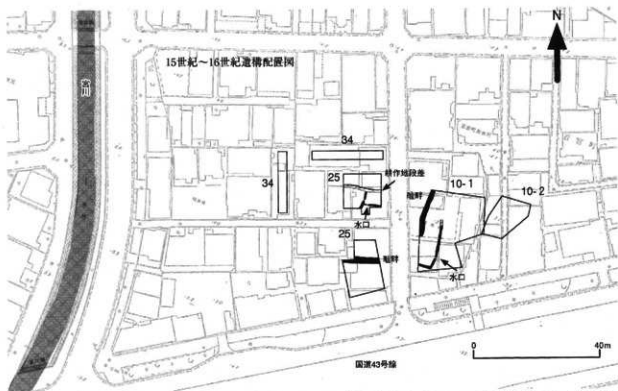
第303図 護岸伏違構木材出土状況（南から）





本時期には、第34地点の南北トレンチ付近が河岸斜面となっている。第25地点より東部では、河岸斜面頂部に相当しており、比較的平坦な地形面によって構成されている。

第306図 若宮遺跡南半部調査状況平面図(1) 1/1200



本時期に形成される水田は、洪水堆積物によって埋積される。この洪水堆積物の上面では、16世紀代と推定される耕作地跡が検出され、畑地の畝および畝間の溝と推定される遺構が検出されている。

第307図 若宮遺跡南半部調査状況平面図(2) 1/1200

では、本調査地点で整地層と推定した第8層に対比される層準において、柱穴や井戸などの遺構が検出されている。本調査地点で認められる整地層の第8層は、第25地点で検出された柱穴や井戸などの遺構形成に伴う可能性も考えられる。第8層は、出土遺物から15世紀末～16世紀前半に形成されたことが推定される。

この時期、南北トレンチでは、護岸状遺構上部に流路充填堆積物の第7層が累重していくような堆積環境が形成される。南北トレンチの埋積に伴って、東西トレンチでは、第8層が第7層からの氾濫堆積物によって覆われるようになる。その後、第7層の上部には、中世後半の耕作土層である第6層が形成される。この第6層に対比される耕作土層は、南側に隣接する第25地点でも検出されている。第25地点では、調査トレンチ中央部で東西方向に走行する比高差60cm程度の耕作地段差が検出されている。耕作地段差下位面では、畦畔や水口を伴う水田跡が検出されている（第307図）。この水田跡に対比される遺構は、第25地点の東側に位置する第10地点でも検出されている。これらの水田は、出土遺物から15～16世紀にかけて形成されたことが推定される。

本調査地点で検出された第6層は、第25地点で検出された耕作地段差の上位面に連続する耕作土層と考えられる。段差上位面では削平を激しく受けており、肉眼観察で作土層の地目を推定することが不可能であった。但し、上位面では畑地が、下位面では水田が形成されていたことも想定される。これについては、今後周辺で行われる調査において微化石や土壌微細形態などの分析を併用して検討を行っていきたいと考えている。第10・25地点で検出された水田面は、中世後半の氾濫堆積物によって埋積される。この上部には、層相および遺構・遺物から、16世紀代と想定される畑地耕作土層が形成されている。本調査地点で検出された溝1は、層序および出土遺物から、第10・25地点で検出された畑地耕作土層が機能していた時期に形成されたことが推測される。

東西トレンチの第6層より上位の層準では、耕作土層が連続して形成されていくようになる。中世末期と推定される耕作土層の第4層は、南北、東西の両トレンチにおいて認められている。南北トレンチでは、この直下に流路縁～河岸堆積物と推定される第5層が堆積している。第5層より上部では、両トレンチ共に流路充填堆積物が認められなくなる。このことから、本地点で検出された流路は、中世末期の耕作土層である第4層が形成される頃には埋没していたことが判明する。本調査地点の北側70mに位置する第16地点で検出された流路では、発掘調査により15世紀代に埋没していたことが明らかとなっている。その後、本調査地点では、西側を流下する宮川の氾濫堆積物を母材として耕作土が形成されていくような人間活動が近世以降周辺の住宅開発が進む大正～昭和前半頃まで継続して行われてきた。

以上、本節では、層相および遺構形成過程の検討から、14世紀～16世紀にかけての流路の埋積に伴う堆積環境変化にตอบสนองする人間活動についての検討を行ってきた。中世後半期における耕作地形成過程や集落立地については、六甲山地南麓において芦屋川・宮川流域以外の沖積扇状地上に立地する考古遺跡との比較をふまえ、さらに検討を行っていきたいと考えている。また、今回、護岸状遺構上で検出された獣骨については、具体的な人間活動を踏まえた遺構形成過程の復元を行うことができなかった。これについても今後、類例を踏まえて検討を行っていくことが必要である。（注）

4) 出土遺物

調査区内から出土した遺物は、土器・陶器・磁器・埴輪・銅製品・石製品・獣骨・自然木・木製品などである。その数は28㍻コンテナバットにして21箱程度である。ただし、ここでは獣骨・木片類を除いて報告する。これらの記載に際しては、遺構・調査区・土層別に、若干、土器類などの時期についてふれるが、相互の年代的関係については小結において再度まとめることにしたい（第308～

328図)。

①護岸状遺構②層最上部(第308図1)

護岸状遺構の主成土である②層の最上部において出土した陶器製の須臾部片である。胴径24cm前後に復元され、内面には粘土帯接合痕跡並びに指圧痕、爪圧痕をみる。外面には回転仕上げ痕跡がみられ、とくにくびれ部はていねいである。外面には自然釉が認められ、焼成は堅緻。

②護岸状遺構②層上部(第308図2～4・6～9・13～16・18・19・22)

2は円筒埴輪片で、外面には縦方向のハケメがみられる。淡褐色を呈し、胎土には少量の砂粒がみられる。3も円筒埴輪の断片で、浅い断面形「M」字状の突帯を付けている。外面はタテハケ調整を施したのち、突帯の上下を含めヨコナデ調整を加えている。内面は斜め方向のエビナデで仕上げる。淡灰黄色を呈し、焼成は半須恵質。基部に近い円筒埴輪片4は、やはり半須恵質の焼成で堅緻。タテハケと内面には粘土帯接合痕跡を残す。6はタテハケ痕跡と突帯貼り付け前のヨコナデ面取り調整を残す円筒埴輪の残欠。半須恵質の焼成を示す。

7・8は京都型の土釜片、9・13～15は河内・和泉型の土釜の破片である。7は復元口径25.6cmを測る半瓦質品で、短い銚以下の胴部外面は黒く煤化している。口縁部はヨコナデによる調整で、端面も平滑な仕上げである。8は丸味をもつ口縁部を外反させるもので、口縁部と銚以下の外面が煤化している。焼けは硬いが、内面および器内の色調は明るい赤褐色である。口縁部が有段となる9は復元口径32.0cmを計測する大きさで、銚を欠失する。また、銚以下を横方向にヘラケズリする。口径24.4cmに復元できる13は瓦質焼成で、かつ全面的に煤化している。口縁部のヨコナデは入念で、外面には強い回転痕跡を残す。胴部外面は横方向のヘラケズリで静止単位も明瞭。やや上向きの形の良い銚を付けている。瓦質焼成の14は銚部分の断片で、下面のみ煤化する。15は土釜の口縁部片で、小片のため復元径は定かならず。端部はこころもち肥厚する。瓦質の焼き上がりである。

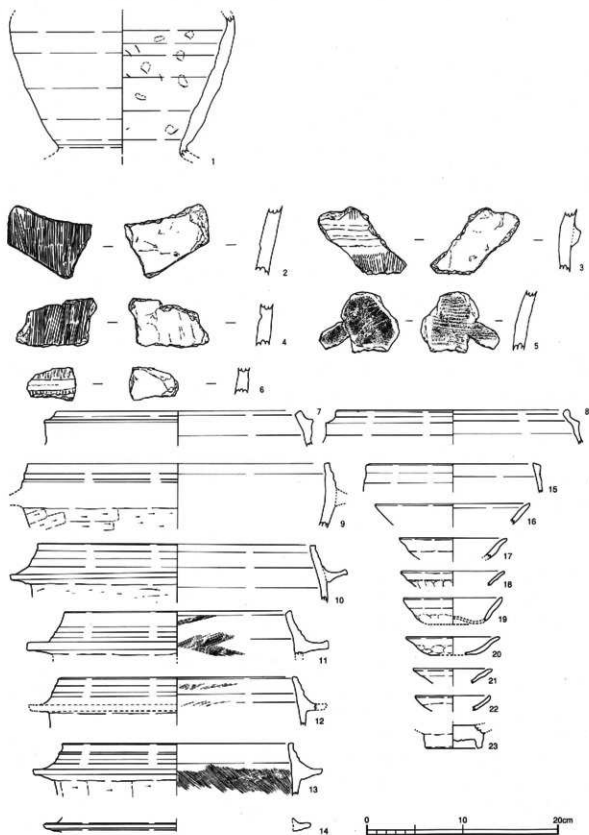
16は皿か碗か判別が付き難い資料で、色調は淡灰黄色を呈する。胎土精良で、器質は硬い。18・19・22は土師質品である。18は精良な胎土の皿で、外面下半は指圧痕をみるが、口縁部はていねいなヨコナデ調整をみる。色調はややピンクがかった淡灰白色である。19は内型つくり的な成形法を採る深身の皿で、体部内面と口縁部はヨコナデ、外面下半は指オサエによる調整である。底部が突出しない白色系の皿とみられ、口径10.2cm前後に復元できる。京都出土例Ga-2〔伊野1995〕に分類される型式で、14世紀中葉～後葉頃に比定し得る。洛西峻峻ないしは洛北幡枝で生産されたものの搬入品と考えられ、胎土も精良である。口径7.8cmに復元できる22は、胎土に砂粒を混えず、淡褐色に焼き上げられている。

③護岸状遺構②層上部北東区・北西区(第308図5・11・12・17・20・21・23)

5は内外面の判断が付きにくい埴輪片で、ハケメを内面側に想定したが、弯曲からうかがうと、朝顔形円筒埴輪片の口縁部になる可能性も強い。他の埴輪片に比べ、ハケメは粗い。淡灰黄色の色調を呈するが、器内は全体として淡褐色である。11は瓦質の土釜で、全体に煤化しているが、淡赤灰色に二次焼成を受けた箇所が認められる。口縁部外面は浅く凹線状をなし、シャープに仕上げられている。口縁端部は平滑だがきつく内傾する。復元口径23.8cm。12も瓦質焼成で、堅緻な焼き締めを受けている。銚は欠失するが、10・11や13と類似した器形の土釜である。17はやや厚みのある皿で、口縁部はヨコナデされ、外反する。20は白色系の皿で外反する口縁部をもつ。21はヘソ皿になる可能性大。

23は淡灰色の釉のかかる陶器碗の高台部で、底部外面は露胎で淡褐色を呈する。底径6.0cmの高台部は頑丈なつくりで、底部の厚さは1.6cmもある。生産地は不詳であるが、流通の年代は14世紀の中で考えてよい資料である。

④護岸状遺構②層上部南西区(第308図10, 第309図25・33・35, 第310図47・50)



第308图 出土遗物实测图(1) 1/4

10は瓦質土釜で、鐙より上はヨコナデによりていねいな調整を施す。口縁端部は平滑で、中央を僅かにくぼませる。復元口径29.3cm。25は東播系須恵器控鉢とみられるが、焼成は甘く瓦質となっている。口縁端部には若干の上下肥厚が認められる。33は口縁部を欠く瓦質焼成の土釜で、体部は横方向のハケズリ。内面は横方向のハケ調整。淡い灰白色の焼き上がりで一部二次焼成でピンクがかかる。35は灰色を呈する瓦質土釜。全体に煤化痕をみる。47は円筒埴輪片で突帯は扁平化が進んでいる。50は朝顔形円筒埴輪の口頸部残欠で、頸部は縦方向の粗いハケメが施される。色調は灰色化していないが、須恵質の堅さに焼き上げられている。

⑤腰岸状遺構②層全体（第309図26・30・37・39・40、第310図41・42・51～53）

26は須恵質土器甕の口縁部片。復元径18.0cm。口縁端に沈線状の凹みをもつ。内外面に自然釉がかかる。27は須恵器大甕の破片で頸部付け根の付近。器壁は淡紫色で、外面には自然釉を帯びる。28は軟質陶器甕の底部残欠。復元底径18.6cmを測る。胎土は若干の砂粒を混じえるも精良。30は口径33.8cmに復されるやや大振りの瓦質土釜で、灰色を呈し、部分的に煤化する。37は復元径18.0cmの瓦質土釜で、口縁部上半に3条の凹線をみる。口縁部端面には浅い凹線を施し、内面の調整には横方向の繊細なハケメを用いる。体部の煤化は著しい。39は陶器系碗とみられ、内面全体と外面の8割に灰緑色系の釉を帯びる。40は丸瓦片で唯一の出土である。有段式であるが、接縫部を欠失する。内面の布目が平安時代のものに比べ細かくなっている点から、鎌倉時代頃のものと思われる。また、斜めに垂れるような形で紐痕が認められ、丸瓦と模骨との着脱時に上から引き上げるために吊られた紐の途切れ端ではないかと想像する。13世紀以降に多く目立つ点からも中段階の丸瓦片とみて大過ない。外面は縄目を長軸方向に入念にナデ消しており、これは14世紀以降の特色と考えられる〔市本1995〕。

41・42・51～53は埴輪である。細片のため径はあまいが、41は朝顔形円筒埴輪の口縁部片。淡灰褐色の半須恵質の焼成である。42は円筒埴輪口縁部片。ヨコナデにより外面の斜めハケが消え、内面は浅く凹面をなす。胎土中に微砂とともに赤色酸化土粒を含む。51～53は円筒埴輪のタガの部分の破片である。51・52はタガの上下をよくヨコナデする。53のタガは断面M字形の上面を板目調整して平滑にする特徴的な技法が看取される。

⑥腰岸状遺構②層南北セクション内（第309図24・31・38）

24は東播系須恵質土器控鉢である。端面は上下に少し拡張し、凹面をなす。内外面に煮炊きの使用痕が認められ、日常の用途と異なった使われ方をしている点が興味深い。遺構の性格と係わるかもしれない。31は瓦質土釜片。38も同様である。

⑦腰岸状遺構②層セクション内一括（第309図32・34・36、第310図43～46・48・49、第312図61）

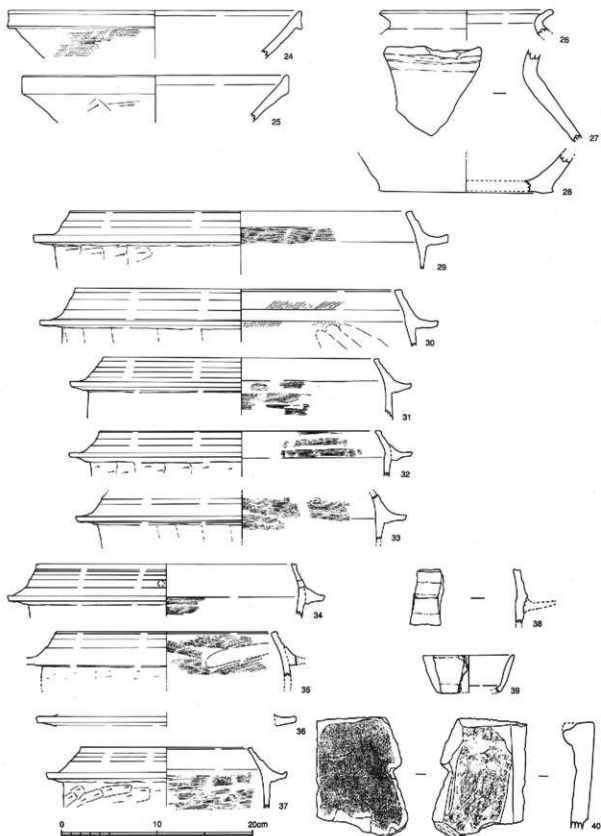
32・34・36は瓦質土釜の破片である。36は鐙の残欠。これらはこれまでに説明を加えたものと変わらない。その他は円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の類である。43は朝顔形の口縁部片で、外面タテハケ調整、内面はヨコハケ調整のち横方向のケズリを加えている。半須恵質の焼き上がりをなす。49は基底部片、他は体部片であろう。44にはいびつながら透し孔がみられる。45はタテハケ調整の手順がよくわかる。46の内面には指頭による調整痕が明瞭に残る。49は口縁部になる可能性もあるだろう。61は骨④と伴出した青銅製鎌で、身部は銹化が著しいが、基部は方形断面を呈し、保存状態は良好。全長11.4cm、最大幅1.6cmを計測する。身部は断面変形菱形となる長身の鎌である。

⑧腰岸状遺構②③層一括〔フローテーション検出遺物〕（第311図54）

東播系控鉢54がみられた。器質は須恵質ではなく、瓦質の焼き上がりとなっている。生産地は泉州か。内面灰白色、外面黒灰色を呈する。口縁部はこころもち下に肥厚させる。復元口径27.4cm。

⑨腰岸状遺構③層（第311図55）

55は瓦質の大型甕形土器の口頸部で、外面灰黒色、内面灰色～淡灰色を呈する。焼成は瓦の器質に



第309图 出土遗物实测图(2) 1/4

近似し、とくに外面側はそっくりである。口縁部は短かく外反させ、丸味をもたせて終わる。口頸部はヨコナデにより消去されているが、頸部下2.7cmあたりのところから僅かに斜め右上がりの平行タキ成形痕を残す。

⑩東西トレンチ溝1埋土1③層（第314図56・60）

56は復元口径27.4cmを測る瓦質土釜で、体部外面を横方向にヘラケズリし、内面はハケ調整。色調は淡灰白色～灰色。60は丸瓦片。凹面には細かい布目、凸面にはナデ消しの調整が加わる。中世の瓦。

⑪東西トレンチ溝1埋土1④層（第314図58）

58は復元口径20.1cmを測る小型の瓦質土釜。内面ハケメ、体部外面にはケズリ調整が加わる。全面著しく煤化する。37と並んで小振りの土釜である。

⑫東西トレンチ溝1埋土1①～④層（第314図57・59）

57は口径28.0cmに復元される瓦質の土釜。内面には一部粗い調整原体が用いられている。59は青磁碗の破片で、磁胎は淡灰色であるが、釉調は淡灰緑色である。口縁部は斜上方にまっすぐのびて尖りぎみに終わる。器面には貫入が認められる。

⑬東西トレンチ溝2埋土2①層（第313図62・63、第315図64～83・85）

62・63はかなりの破片がセット関係を保って検出されたもので、62は鉢、63は壺である。その出土状態から壺棺の身と蓋と思われ、壺棺1基分を構成する土器が中世段階に耕作などの人間活動により破砕されたものと考えられる。62は底部を欠損するが、口径34cmに復元できる。体部外面は主として下半がタテヘラミガキ、上半がヨコヘラミガキで、体部内面は縦方向のヘラミガキ、内湾する口縁部の内面は横方向のヘラミガキをそれぞれ入念に施す。色調は茶色味を帯びた黄白色で胎土は緻密である。63は口頸部を完全に欠失する大型の壺で、底部の破片も揃わなかった。体部の最大径55.0cm、残存器高51.5cmを計測する。器面調整は外面がハケのちミガキ。内面は強いユビナデによる。これらの土器は同時期のものとみられ、第Ⅴ様式最末～庄内式期に比定し得よう。

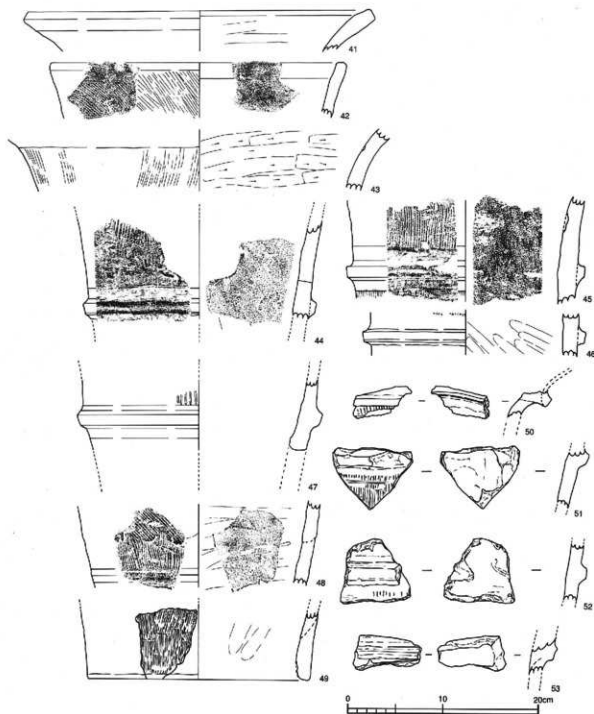
64は本地点で唯一出土した縄文晩期突帯文土器で、深鉢の口縁部とみられる。突帯は口縁端から5mm程下った位置にあり、刻みを施している。口縁端部はシャープにヨコナデが加わり、体部外面には板目風の器面調整が横方向に加わる。淡灰黄色を呈し、胎土中には花崗岩片、獣物粒をかなり含む。

65～67は弥生土器底部である。65・67は共に大型壺で色調・胎土が類似し、同一個体になる可能性もある。淡灰灰色の焼き上がりを示し、胎土中には粗い岩片・獣物粒を含み込む。その特徴からⅠ～Ⅱ様式段階の弥生土器とみてよい。66は小型の壺形土器の突出する底部で、外面はヘラミガキにより仕上げられる。68は磁器碗で、外面には簡略化した蓮弁文を刻んでいる。産地不詳。

69は結晶片岩片である。断片であるためなんとも言えないが、在地で産出しない石材であり、石棒などの破損品と考えてよいかもしれない。その場合は、縄文晩期の土器との関係が想起される。

70～74は皿類である。比較的残りの良い70は、ヘソ皿の兆候をみせる。71もヘソ皿になるであろう。73もその可能性がある。これらは白灰色系の色調と精良な胎土を示す。75は半完形の管状土罐で、径3.0cmに復元でき、かろうじて端部は残っており、全長6.3cmを測る。淡黄茶色を呈し、胎土にはかなり砂粒を含む。孔径は1.4cm程で、孔内は平滑に仕上げる。

76～79は須恵質～瓦質系の片口鉢である。76は東播系のものではなく、瓦質タイプに近く、河内・和泉型の瓦質焼成土器鉢とみられる。外面には縦方向のヘラケズリ痕跡がみられる。内面横方向のナデ調整ののち、掃目を施す。淡灰褐色を呈し、胎土は細砂を含んでざくざくとしている。14世紀前半に比定できる。77も同様で、76と同一個体になる可能性が高い。78は東播系の須恵質土器捏鉢で、口縁端部は上方へ拡張させる。森田福年〔森田1995〕による第Ⅲ期第1段階（13世紀前半～後半）の資



遺物出土層位
(掘削状況欄)

- 2層上層上部……………1
2層上層……………2・3・4・6・7・8・9・
13・14・15・16・18・19・22
2層上部北東区……………5・11・12・17・23
2層上部南西区……………10・25・33・35・47・50

- 2層上層北東区……………20・21
2層全体……………20・27・28・29・30・37・39・
40・41・42・51・52・53
2層南北セクション内……………24・31・38
2層セクション内……………32・34・36・43・44・45・46・48・49

第310図 出土遺物実測図(3) 1/4

料である。口縁部のみ黒灰の発色を示す。79も78同様、口縁部の上方拡張が認められる片口鉢で、口縁部外面のみ黒化する。片口鉢の窯業生産が確立する段階の製品と思われる。

80～83は瓦質土釜の破片である。80は数少ない京都型となろうか。81は厚みを有する在地的な土器で、著しく煤化し、よく使用の痕跡をとどめている。内面の鈔貼付け部の離面には横方向の粗いハケ調整が残っている。82は81と器質や器厚が類似し、同一個体になる可能性がある。83は鈔片とみられる。85は中世段階の丸瓦片である。内面には布目およびへう切り痕跡を残す。灰色を呈する。

⑭東西トレンチ溝2埋土2①層セクション内（第315図84）

84は、高台を付けた須恵器壺の体部下半片である。高台端は欠失し、全形を知り得ない。第Ⅳ型式段階のものであろう。

⑮第7層中（第316図86）

中世後半期の氾濫堆積物と見込まれる第7層位に限定して抽出し得た資料のうち、図化できたのは86のみである。86は時期不詳の土師器甕の口縁部片であるが、古墳時代前期以前のもと思われる。かなり上位部からの流れ込みと思われる。

⑯第8層中（第316図87～98）

中世後半期の整地層からはそれまでの時期の遺物片がかなりみられた。87は土塼の口縁部片で、外面は著しく煤化する。88～94は土師器皿類を一括した。口縁部片が多い。93はヘソ皿の底部である。89や91もヘソ皿になるだろう。14世紀～15世紀初頭頃の資料と判断される。95・96は瓦質っぽい焼成の土釜片である。97はⅣ期に編年される備前焼罎鉢の破片で、内面は淡灰紫色、外面は灰色に発色する。焼成堅緻で、胎土中には若干の砂粒・石粒を混える。口縁部の上方拡張は明確で、外面立ち上がり部分には突帯状の突出をみる。内外面はていねいにヨコナデが施され、内面に観察される横目は7条を数える。室町時代後半期に下る資料とみられ、15世紀末～16世紀前半の年代を付与しておきたい。整地の下限を示す資料となろう。98は土塼の底部か、罎鉢の口縁部とみられ、煤化が著しい。

⑰先行トレンチ7～9層および溝1・2埋土相当（第317図99）

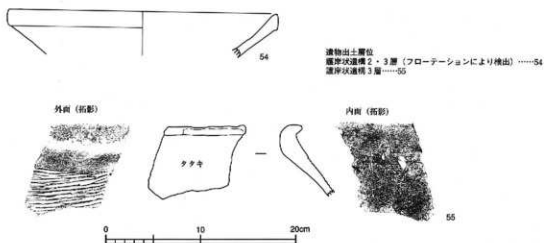
99は東播系須恵質土器の甕である。頸体部片で、内面にはナデの合い間に粘土帯の接合痕跡が看取される。外面のタタキは矢羽根状を呈する部分がある。

⑱機械掘削面精査時、7～8層および攪乱相当層上面（第318図100～102）

資料の価値は少ないが、採取し得た遺物若干を報告する。

100は弥生土器の壺底部である。復元底径10.6cm。胎土は若干の砂粒を含むが、緻密である。101は東播系須恵質土器罎鉢の口縁部である。口縁端部は上下に拡張する。陶器102については、碗形土器の高台部であるが、産地については不詳。

（森岡）



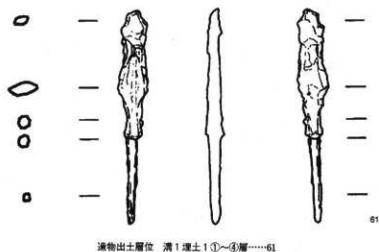
第311図 出土遺物実測図(4) 1/4

5) 小結

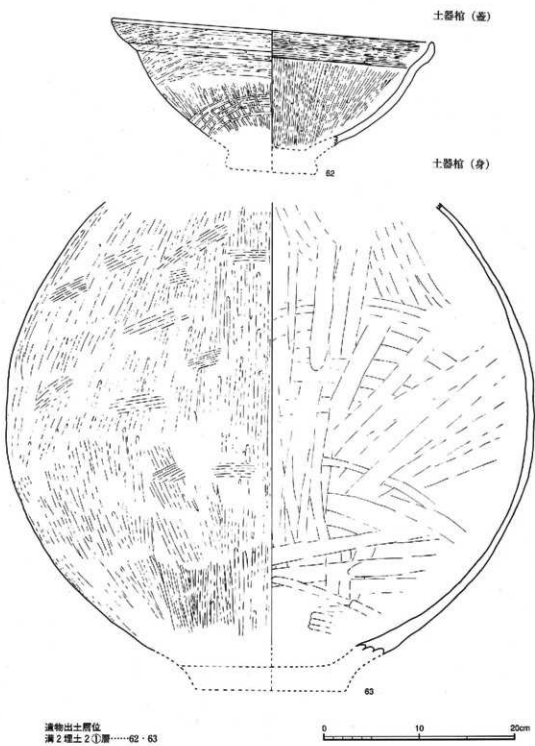
森岡秀人・辻 康男を発掘担当者として平成12年11月20日～12月11日、事前調査が実施された本地点では、予想を上回る成果がもたらされた。以下にその一端を列挙し、まとめにかえたい。

①調査動機とあらまし

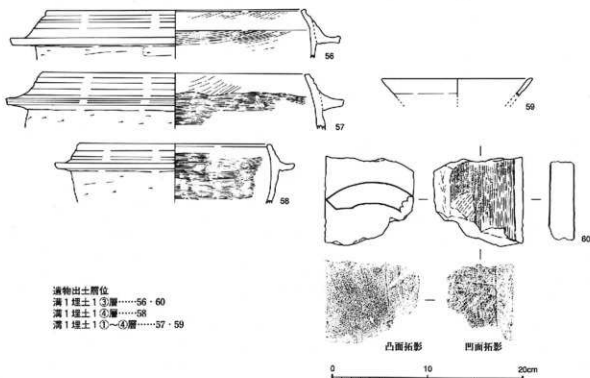
本調査は、若宮地区住環境整備事業に伴い計画された街区内道路の施工、地下埋設物設置により損壊を受ける範囲を事前に発掘調査したものである。調査は深度がかなり深くなるとともに発掘面積に制約を受け、平面的な成果には限度があったが、トレンチ壁面の崩壊防止策を施し、垂直方向には、



第312図 出土遺物実測図(5) 1/2



第313圖 出土遺物実測図(6) 1/4



第314図 出土遺物実測図(7) 1/4

若宮遺跡の中世段階の土地変遷の歴史をかなり克明に迫うことができた。

②検出遺構の特徴

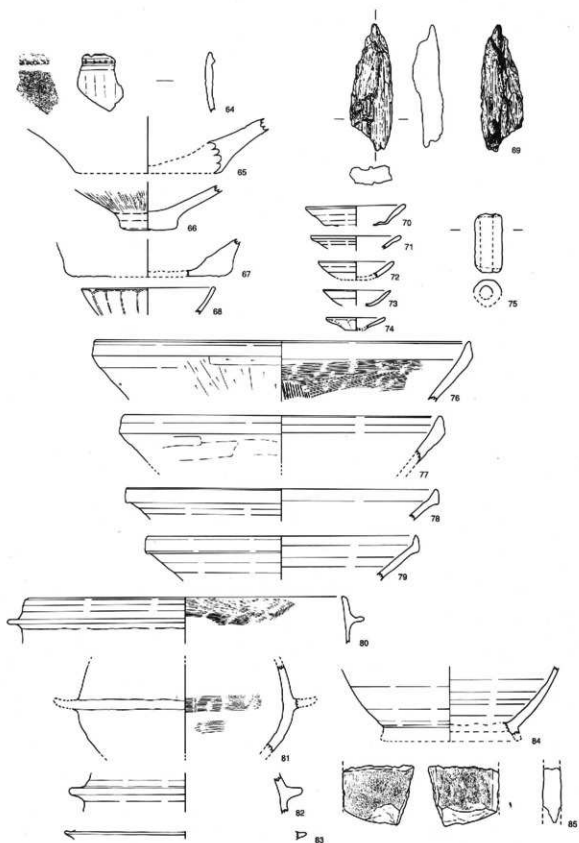
T.P.1 mの深部まで発掘することに努めたが、検出遺構のすべては中世後半以降に形成をみたものであった。東西トレンチ西端部検出の幅6 m前後、深さ1.2mを測る溝1は15世紀末までに機能していたものと思われ、埋没過程末期に人の手により埋められている。東西トレンチ東半部の溝2は幅3.8m以上、深さ0.8mで14世紀末を限界に埋没している。南北トレンチでみつかった土手状の遺構は、旧流路の岸辺に構築された土堤であろうと思われる。盛られた堤の形成土からは、人為的に遺棄、埋め込まれたと考えられる礫・獣骨・土器類が大量に検出された。

詳細は報告したとおりであるが、中世段階に限定される獣骨群については、市内で初めてまとまった形で出土したこともあり、発掘現場でその性状を記録し、観察を深化させることが第一と考え、直ちに奈良文化財研究所 松井 章氏（動物考古学）に連絡をとり、ご教示を仰ぐとともに研究員の宮路淳子さんを派遣して頂き、調査関係者によりあくまで現地での検討に重点を置いた。

③獣骨類の分析と南北トレンチ護岸状遺構の性格

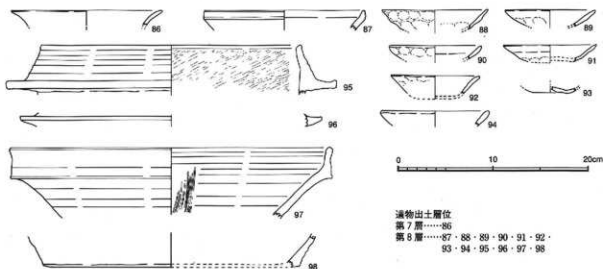
前項でふれた護岸状遺構とその築成土から大量に検出された獣骨類や中世土器は、芦屋の歴史に新視点をもたらす重要な成果であった。土器類については、森岡が中心になって整理を行い、時間的な把握を進め、およそ14世紀前半を中心とするものであることが明らかとなった。また、堤の構築過程や埋没過程、古環境・堆積環境の変化については、辻が詳しく考証しており、その基盤（③層）には、刈り取った樹木の幹や枝を粗朶として人為的に埋め込んでいる事実も判明した。

護岸状遺構で検出した獣骨は、いくつかのグループに細別して取り上げを行った。付論2の第5図



遺物出土層位
 溝2埋土2①層……64・65・66・67・68・69・70・71・72・73・74・
 75・76・77・78・79・80・81・82・83・85
 溝2埋土2①層セクション内……84

第315図 出土遺物実測図(8) 1/4



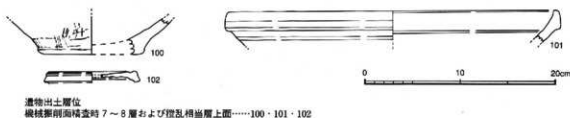
第316図 出土遺物実測図(9) 1/4

には、獣骨の取り上げグループを示している。獣骨検出時に生じた排土については、ウォータープロテクションを行い、排土内からも獣骨や遺物を検出するように努めた。現地取り上げ表の備考にフローテーションと記載されている獣骨は、ウォータープロテクションにより検出されたものである。

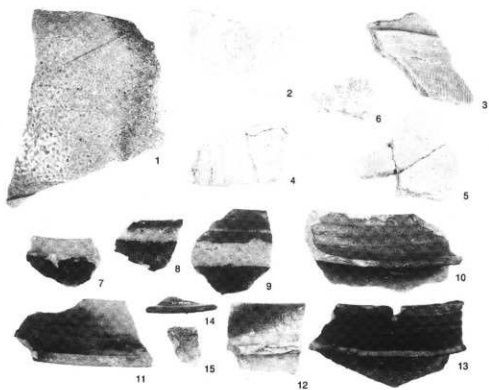
獣骨に関しては、付論として分析にあられた松井 章・宮路淳子・藤田正勝3氏による玉稿（P 230～243）に詳しいが、結果として、3日5属5種の動物が同定され、破片数312点の内訳はイヌ3点、ウマ104点、イノシシ5点、ニホンジカ83点、ウシ117点であった。また、それらが解体されたのち投棄されたとの観察結果が得られており、食用に供されたイヌの存在、骨細工素材として利用されたニホンジカ、成獣・老獣化した死にウシ、死にウマの解体など資料群から推測される人間活動の具体像も提示されている。これらの分析結果に加え、その歴史的な性格を論ずることは不可避な課題であるが、報告の小結では事実関係の交通整理を行った程度で一旦筆を置くこととする。（森岡）



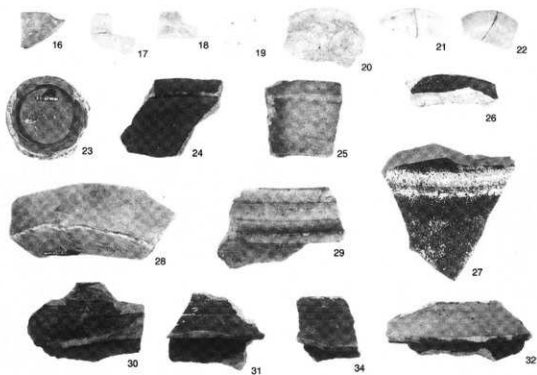
第317図 出土遺物実測図(10) 1/4



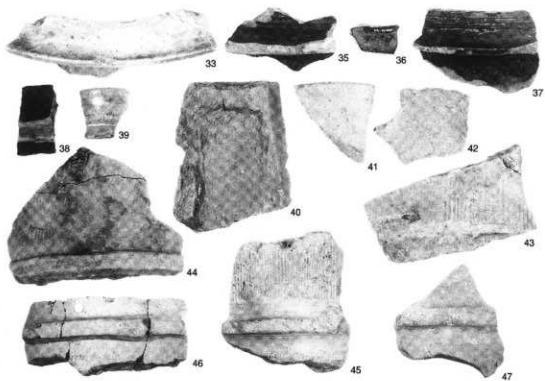
第318図 出土遺物実測図(11) 1/4



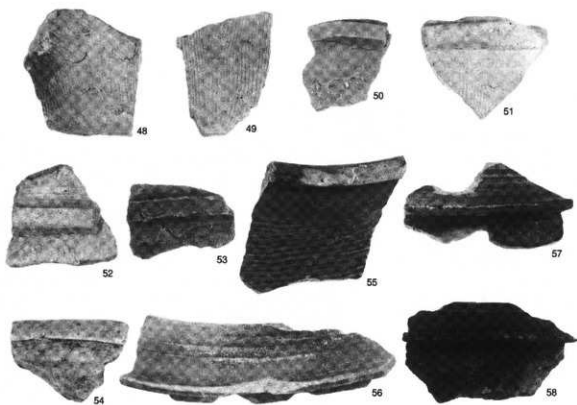
第319図 出土遺物(1)



第320図 出土遺物(2)



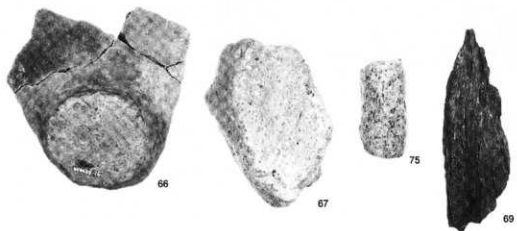
第321図 出土遺物(3)



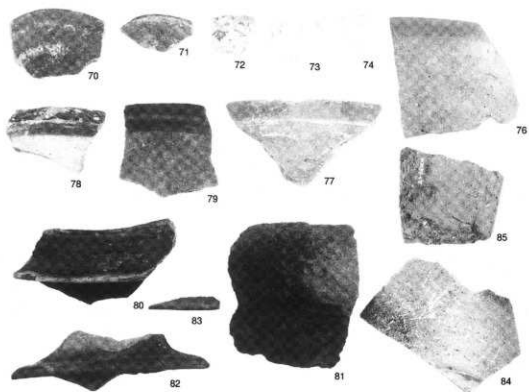
第322図 出土遺物(4)



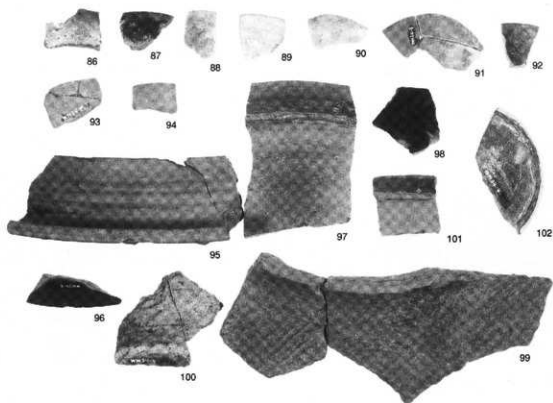
第323図 出土遺物(5)



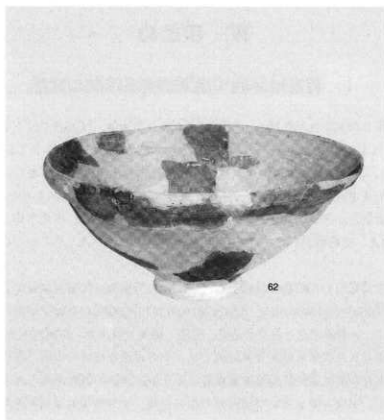
第324図 出土遺物(6)



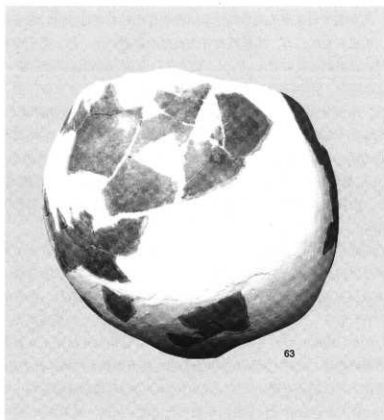
第325図 出土遺物(7)



第326図 出土遺物(8)



第327図 出土遺物(9)



第328図 出土遺物(10)

IV まとめ

1 若宮地区震災復興調査6年間の総括

芦屋市の中央東寄りの海岸部に位置し、阪神電鉄本線を北限線、国道43号線を南限線、都市計画道路宮川線を西限線とする若宮地区は、ほぼ若宮町の西半部（2.30ha）を占める区域で（若宮町1・2・6～9番街区）、震災前は一戸建て専用住宅や店舗併用住宅、老朽化の著しい文化住宅、アパートなどが密集する街並を形成していた。当地区は、敷地面積100㎡未満の小規模宅地が153筆中84筆と半数以上を占め、幅員4.0m未満の細街路が目立っていたところであり、平成7年1月の震災段階における地区人口は544人、世帯数261を数え、国道43号線沿いには、早くから自動車公害の影響も強く受けていた。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、この若宮地区に筆舌に尽くし難い甚大な被害をもたらし、全壊家屋162戸（全体の62%）、半壊家屋70戸（27%）の数字がそれを如実に物語っている。被災状況を顧みるに、小規模宅地と狭小な道路、広場・緑地の僅少さ、高齢者のウェイトの高さなど、平成7年7月に作成された芦屋市震災復興計画では、その重度な被害の実態と原因を踏まえ、選択メニューとしては市施行の震災復興住環境整備事業により地区全体の復興が図られることになった。

以上の経緯を経て、平成8年3月に事業計画の認可を得、その後用地買収が進捗し、若宮地区まちづくり協議会と基本構想などの協議が重ねられ、住民参加のまちづくり、行政との協働による新しいタイプのまちづくりが推進されていったのである。

当該事業は、芦屋市若宮町1・2・6・7・8・9番街区を対象とし、平成7年度から平成13年度までを一区切りとする住環境整備事業で、事業費102億円を投下し、一日も早い復興を目指したものであった。この間、本事業予定地が公共事業でかつ埋蔵文化財の包蔵状況に関するデータを全く欠く地域であったため、平成8年度には、兵庫県教育委員会の指導の下、第1期工事である若宮町住宅1号棟の建設事業に伴い試掘調査を実施し、打出小館遺跡の南側への連続状況を調べたが、結果として、同道跡から分離可能な縄文・弥生時代を中心とする新しい道跡が認識されるに至った。

新発見の遺跡名は、町名を採用して「若宮遺跡」と名付け、その後の事前調査の推移を勘案して、広い範囲を包括し得るような呼称とし、また、周辺住民にも親しみを覚えていただけるよう、復興の経過を見越した命名であったと思う。ただし、「若宮」という地名は大字「打出」内の「若宮神社」（打出西ノ町の町宮。仁徳帝を祀る）の存在に由来する神社関連の小字名で（細川1963）、実際には若宮地区以東に所在し、阪神電鉄本線をはさんで南北に広がり、北側の字界は旧西国街道（本街道）と合致する（魚澄編1957）。

さて、平成9年12月着手、平成11年2月竣工の第1期工事による若宮町住宅1号棟建設に伴う本遺跡第1・2地点の事前発掘調査は、平成8・9年度に実施をみ、その後、本遺跡の内容を報ずる初めての報告書として平成11年度の夏に公開されている（森岡・竹村編1999）。本書はその第2冊目に相当する発掘調査報告書であり、6年間におよんだ記録保存を目的とした事前調査の一応の完結を目指したものである。ただし、内容については既報程度のものにしかならなかった点を断っておきたい。

6年間にわたる発掘調査は、工事計画とのすり合わせ、調査事務や実務に紆余曲折があったものの、市内5地区の震災復興予定区域の事業の中で、最も早い事業の進捗の経過もあって、一番最初に終着をみるようになった。報告書が無事公開された事業としても、支援の成果が直接間接に反映しており、一つのモデルケースをなした点で特筆に値する。以下、その成果の集約と検証を試みる。（森岡）

2 時代・時期別にみた若宮遺跡の様相と性格

1) 若宮遺跡の立地要件とその範囲について

若宮遺跡は、標高3～5mの海岸に近い平野部、宮川の沖積扇状地上に位置している〔辻2000・2001a・b〕。遺物を伴う遺構面は、土中深く埋没している箇所もあり、T.P.0.3～4.7mの落差の中で検出されている〔森岡・竹村編1999、および本書〕。

若宮遺跡の立地と古環境の把握については、平野の地形分類上、自然堤防・砂州といった「低地の微高地」といった認識〔前田1971〕から出発した。宮川左岸沿いにある宮川低地帯の前方に宮川自然堤防が広がり、これと関係しながら、東半域では低位段丘上に存在するといった見方であった。〔前田1971〕の地形分類では、埋立以前の現海岸線には、近世の生成とみられる幅150～350mにおよぶ「打出浜砂州」がのびており、阪神電鉄以北には、同電鉄打出駅以東に「打出奥砂州」が海岸線に平行に想定されているため、筆者自身は遺跡形成初期においては東西方向にのびるそれらの中間付近に存在する砂堆（浜堤）を主要生活面にしたことも考えてはみた。

しかし、Loc.1・2の発掘結果からは、Loc.1北壁で現地表下0.8mの浅い位置に大阪層群（74層・10YR5/2・灰黄褐色粗砂層・粘土・礫・極細砂～中砂含）を確認しており、「西宮断層」と称される伏在の活断層〔神戸市・建設工学研究所 1999、岡田・東郷2000〕も本遺跡よりさらに南側に推定されている〔本書付論 佐藤隆春〕。したがって、本遺跡の北東域は、大阪層群の侵食面に乗っていることとなり、丘陵地形に一部かかることが明らかとなった。また、ボーリング調査データを駆使して旧地形の復元を試みた佐藤隆春は、縄文時代前期の海岸線を本遺跡から南約400m、下宮川橋と浜打出橋との中間に推定している〔佐藤、前掲〕。換言すれば、縄文海進クライマックス段階時にも遺跡域に海水が流入する地形ではなかったと解される。このことは、予想し得なかったことの一つである。

縄文時代晩期前半は、「離水と水没を繰り返すような後背湿地の堆積環境下にあり」、同後半に至ってその場に屈曲著しい蛇行河川が遺跡中央部を走り、該期中に堆積が進む（Loc.2・3・4）〔辻2000・2001a・b、辻 本書Ⅱ-1〕。

堆積流路は砂礫による充填物により、辻の用語では「凸型の横断面形」を形成しており、周囲の氾濫原面に対しては微高地化しているため〔辻 本書Ⅱ-1〕、突帯文土器期に積極的な人間活動が始まり、続く弥生時代前期～中期初頭には、この微高地上に発達する土壌形成段階において、住居・墓や土坑・ピットなどを作るような初期弥生人の営みが展開されたと考えられる。

弥生時代中期には、Loc.10において厚い砂の堆積がみられ、これについては、本書でも評価が分かれている。「ストーム時に波が到達する位置にあった」とみる佐藤隆春の見解〔六甲土流団体研究グループ2001など〕と各調査地点における遺跡堆積層の観察とその層序対比から海浜砂とみるより河道充填堆積物と想定する辻 康男の見解〔辻 本書Ⅱ-1、辻2001a・b〕であり、より南方域での発掘結果を含め、今後に課題を残している。

以上の立地条件とこれから述べる様相の変化を勘案して、複合遺跡（縄文時代晩期～中世末期）としての若宮遺跡の範囲は、現状では宮川左岸域の国道43号線と阪神電鉄本線にはさまれた東西150m、南北135m程のものになろうか。ただし、これはあくまで確認の域にとどまる最小限の数値である。

（森岡）

2) 打出小楯遺跡と複合遺跡としての若宮遺跡

若宮遺跡は、発見の当初、阪神電鉄本線の以北一帯に広がる打出小楯遺跡の南縁部の一画にとらえ

る理解で、保護の手をさしのべてきた。打出小槌遺跡は、翠ヶ丘古墳群を構成する前方後円墳の一群から成る古墳時代中期の大型古墳とほぼ全域に分布する古代末～中世の水田耕作地の2面的要素を強調できる遺跡で、古墳時代の墓域を視覚的に侵しつつ、鎌倉～室町時代の生産域が丘陵面の土地利用として飛躍的に展開をみせる点に大きな特色がある。

一方、若宮遺跡では、発見場所であるLoc.1・2から弥生時代の遺構・遺物、さらに古い縄文時代の遺物が出土し、既に性格・様相の差が明瞭であり、2つの遺跡を分離して取り扱うことが将来混乱を招かない対処であることは誰の目にも明らかであった。それだけではなく、若宮遺跡自体も打出小槌遺跡とはまた別角度からの複合化がみられ、いわゆる複合遺跡としても新たな特徴をみせることとなった。それを年代の古い方から順にたどると、縄文時代晩期（前半・後半）、弥生時代前期後半～中期前半、弥生時代後期後半～終末期、古墳時代中・後期、奈良時代、鎌倉・南北朝時代、室町時代など概ね連続した状況となり、中世以前にあってはかなり連続とした人間活動の変遷と複雑性をみせる。次に、30数次におよんだ調査の緯糸と経糸をたどり、その要点並びに総括できる点をみておこう。

(森岡)

3) 若宮遺跡にみられる先住者の定着と画期

①初期水田稲作への志向をみせる縄文時代晩期の様相

遺物よりみたる若宮遺跡の上限時期は、縄文時代晩期前半（Loc.1～4面54層）に属する滋賀里Ⅱ式期の深鉢の示す年代に遡る。ただし、この土器は4m×9mの範囲に局部的広がりをみせる包含層中での資料で、堆積年代を示す程度のもものかもしれない。しかし、この時期の資料は、市内ではきわめて乏しく（六条遺跡DブロックTr.5 黒色シルト<滋賀里Ⅲb式>、寺田遺跡139地点西区4面上土坑群<滋賀里Ⅲ式以前>）、3遺跡にとどまるのみならず、阪神間では神戸市や尼崎市、川西市に少数例を示すのみである。本書では、縄文人の近隣での活動を認める形でこの土器群をとらえている。また、やや年代の新しいLoc.4～4面S R02bの滋賀里Ⅲb～Ⅳ式期やLoc.10～1～9層中の滋賀里Ⅲb式期の土器片も晩期後半への転換点を示す時期だけに重要な資料である。

縄文晩期後半の突帯文土器期になると、旧河道との関係を示す地点で土器出土地点は増加し、若宮遺跡地内では、Loc.3～4面で河道に伴う土器群が、Loc.4～3面S R01ベース・被覆層で土器片、土器溜まりで土器群が確認されているほか、Loc.11～8層、Loc.16～1流路ベース6層、Loc.16～2(1)、Loc.17～2流路内9層、Loc.32 Tr.3～5a層、Loc.34溝2埋土2などで散発的に突帯文土器片や石製品が出土しており、東西120m、南北110mとその分布範囲は拡大している。堅穴住居跡など遺構の可能性が報じられたLoc.11～8層中の石組・炭塊の徴証を除いて、いずれも明確な遺構を伴うものではないが、前者は有機的に土器群を形成しており、すべてが流出してきた二次的資料とみることはできない。至近地に滋賀里Ⅳ式～Ⅰ酒井式期の縄文集落が存在したことを考えるべきであろう。

重要なことは、大阪湾岸地域で顕著な長原式期に下降する突帯文土器ではない点で、この点は近傍の海浜部に所在する北青木遺跡などと比較してもかなり異質である。また、同一地点で弥生土器（前期）が出土しているものの（Loc.3～4）、いずれも検出層位を異にするものであり、弥生土器と縄文土器の明確な伴伴関係はないと言ってよい。したがって、弥生前期集落に誘発されたタイプの縄文晩期集落ではなく、海岸沖積地近くに先行して定着していた突帯文単純期の集団を想定することが可能であり、自らその生活様式・生業体系の変革をおし進め、既に山麓部や更新統系扇状地面から離れて、標高1～2mの低位置に移動してきた点が評価できよう。

②若宮遺跡出土突帯文土器群の変化過程と土器編年上に占める位置

若宮遺跡から抽出し得た大きな収穫の一つは、芦屋市内において初めて縄文晩期突帯文土器の存在

形態を遺跡の堆積構造と照らして明らかにし得た点であろう。

①においてその様相を簡単にふれたが、事実関係から抽出できる3つの特徴を先ず列挙しておきたい。その(1)は、これらの資料が突帯文土器前半期に比重をおくことであり、前述したように二条突帯が確立する船橋式・長原式と認定できる資料はなく、弥生土器との明確な伴出関係もない。その(2)は、該期にあって、これらの資料群が層位的にも弁別し得た点がきわめて重要で、今後にさらなる検討の余地を残している。その(3)は、搬入土器がきわめて限定的なあり方を示した点で、突帯文土器期における芦屋の、ことに宮川左岸域の打出丘陵周辺の在土土器の胎土の特性(黄灰色～淡黄褐色、花崗岩造岩鉱物組成)を典型的に表現していることが把握された。

(1)(2)に関しては、Loc.1-4面54層<滋賀里Ⅱ式>→Loc.4-4面SR02b<滋賀里Ⅲb-Ⅳ式(古相)>→Loc.4-12・13層界面<滋賀里Ⅳ式(新相)>→Loc.4-12層最上部～直上<滋賀里Ⅳ式(新相)・Loc.4-3面上器溜まり<滋賀里Ⅳ式(新相)>の層位的変遷を追うことができ、その後半部分については、Loc.3-9層土器群(2E区西端・1D区南西端)→Loc.3-8層1E区流路肩土器群の層位的推移と対応する可能性もあり、両地点の層序の比較作業と共に、滋賀里Ⅳ式→口酒井式併行段階における変化過程の型式学的検討が不可欠の課題である。

現状では、Loc.4-4面SR02b中の土器の中に中河内生駒西麓産胎土の資料を含有することや古い調整手法がみられることから、Loc.4がLoc.3に先行して存在する突帯文期集団の時間帯を考えてよいかもしれないが、これも実のところ大きな課題であり、いずれにせよ、当地域固有の縄文晩期突帯文土器編年に貴重な資料と事実関係を報告し得たと考えている。

③海浜部に立地した弥生時代前期集落とその性格

Loc.2の4面(4棟)、5面(1棟)では弥生前・中期初頭の堅穴住居が検出されており、その異色な立地がひとまず注目された[森岡・竹村1999]。両遺構面は共にⅠ・Ⅱ様式の土器を伴出しており、明確に時期を弁別できるものではなかった。4・5面間には洪水流出層をかむことより、該期の集落は土器の示す年代的範囲で短期間のうちに復旧されたものと理解されている[福島・上垣・藤井1999]。遺跡の性格は磨製石包丁を伴っており(SBⅣ-03, SKⅣ-01)、また、土坑墓や土器棺墓を伴う関係から、水田耕作を生活様式の基底にすえた定着性の強い農耕集落であったと推察される。

本書で報告したLoc.4では、該期の居住区の連続部分のみごとに検出しており、2面においてⅠ～Ⅱ様式段階の堅穴住居5棟、土坑9基など、遺構の重複関係からおよそ3期に細別可能な遺構群が把握されている。Loc.2とLoc.4のかような調査結果から、少なくとも南北45m以上の居住域を復元することがひとまず可能であり、Loc.5の遺物内容を勘案すれば、6号街路付近まで集落域の西限線がのびていた公算が高い。それより以西は、弥生時代前半期において急激な地形変換の認められる場所でもある(Loc.16-2(2))。Loc.1・3の調査では、Ⅰ～Ⅱ様式期の土器片を少量認めるものの遺構は東へ広がらないことが容易に知られ、現状では東西方向に30～40mを超える居住域を想定することは難しい。Loc.1でみられた大阪群を解析した古代以前の谷状地勢は、当集落域の東限ラインを考える上に考慮すべき旧地形と思われる。ゆえに、縄文晩期後半に埋積の完了した旧河道の蛇行に則した微高地とも関連した限定場所に居を構えた初期農耕集団であったとみておきたい。

あくまで推定ながら把握できるこの規模は、近畿地方の弥生前期集落の通有の大きさに比し、けっして大きくはないけれども、両地点の建物跡検出数(10棟以上)は、今後時期ごとの細分が進んだ段階においても、県内の玉津田中遺跡(神戸市西区)、新方遺跡(神戸市西区)、大開遺跡(神戸市兵庫区)、木山遺跡(神戸市東灘区)、越水山遺跡(西宮市)、上ノ島遺跡(尼崎市)や大阪府下の若江北遺跡(東大阪市)、田井中遺跡(八尾市)などと比肩し得るものであり、環濠の存否を含め、今後の集落構造の比較検討が課題として残される。

土器については、最も古い要素をもつもので様式編年〔寺沢・森岡編1990〕の摂津Ⅰ-3止まりで〔森田1990〕、突帯文土器との共存関係は、型式学的にみてもないと判断され、これは①②で述べたこととも矛盾はしない。また、Ⅰ・Ⅱ様式土器にみられる時間的間欠性〔藤井1999〕についても、Loc.2の断続的なあり方やLoc.4における遺構の重複関係から再考すべき問題であろう。なお、Ⅰ・Ⅱ様式土器の出土は、原位置を保ってはいないが、Loc.10-1・2やLoc.11・16-1・16-2(1)・(2)などでも微量ながら認められ、集落範囲や活動領域、その中心部と周辺を特定する上で微証となる。

④弥生時代中・後期の生活空間の状況変化

弥生時代の中での若宮遺跡の変遷については、Loc.1～4のような面的調査を加えつつも後世の土地利用による削平や改変が著しい地域では、層位的な手懸りを得ることがかえって難しい。その点、Loc.16-2(2)などでは、こうした微高地の縁辺に位置した関係から、土器組成の推移、漸移の変化が層位的に把握されており、弥生土器包含の比重が高まる第10層の細分の中にその動きがとらえられる。10層上部では、古墳時代の須恵器片、土師器片が含まれており、まだノイズがみられるものの、10層中部では古墳時代以降の遺物は消去され、Ⅱ・Ⅴ様式の土器片のみによって構成される。その動向は10層下部に遡り、とくに中期前半段階の資料はⅡ-3様式を下限とすることが判明した。

弥生時代包含層として純層である10層中・下部のありようからみて、Ⅲ-1様式以降、Ⅲ・Ⅳ様式並びにⅤ様式前半に比定し得る土器片は1点も確認できないことが注意をひくが、この傾向は他の調査地点の土器様相から推しても追認できる調査結果であり、現状では、若宮遺跡は弥生時代中期中頃から後期前半にかけて大きく断絶することが指摘できよう。

この空白期は、北方の打出小槌遺跡Loc.22(Ⅳ-2・3様式)や小松原遺跡Loc.8(Ⅲ-2,Ⅳ-1様式)、堂ノ上遺跡Loc.4(Ⅳ-3様式)で埋め得る遺構ないしは遺物が出土しており、大版層群を基盤とする丘陵地形やその開析谷付近で、弥生中期後半の往時の人々が集落域を構えた可能性が高い。従来、芦屋市城東部の翠ヶ丘丘陵上では、芦屋川流域に比べ調査不足の点もあって、弥生遺跡の時間的変遷が非常に不分明であったが、今日、若宮遺跡とその周辺の遺跡調査が進んだ結果、生活空間の変動などその実情が窺いながら判明してきた点は貴重である。

⑤弥生時代終末期における集落の回帰

若宮遺跡では、弥生時代後期末～終末期の土器が広い範囲で出土している(Loc.1・2・3・11・16・25・34など)。ただし、該期が弥生時代の中でピークとして存立し得るのは、Loc.1・11など遺跡東辺部に限られ、Loc.11では方形周溝墓の一部と推測される溝1条と供献土器とも考えられるⅤ-5様式～Ⅵ-1様式を主体とする変形土器などが検出されている。この時期の遺物は、すべての地点で前小槌様式をひき継がず新たに出現しており、集落の成立を想定した場合は、阪神沿線以北のより北側の土地へ転出した集団が若宮地区に回帰してきたようにも受けとれる。真相は明らかでないが、以前考察したように〔森岡・竹村1999〕、旧海岸線に接近する沖積低地での新たな可耕地の拡大と照応する終末期弥生人の再定着、生活領域の再編ととらえておきたい。

⑥翠ヶ丘古墳群との関連を示す埴輪・須恵器類の出土分布

市城東部において海に向かって張り出す翠ヶ丘丘陵上には、かつて有数の古墳群が存在していたと思われる〔村川1971、藤岡・勇1976、森岡1988a・b・d・1995a、森岡・辻2000a・c〕。その片鱗は金津山古墳(5世紀後半)や打出小槌古墳(5世紀後半～末)などの前方後円墳が分布することで明確であるが、阪神電鉄を南に超えた若宮遺跡においても5世紀代の埴輪片(円筒埴輪・形象埴輪)や須恵器が多くて散見され(Loc.1・3・4・10-1・10-2・16-1・16-2(2)・17-1・17-2・25・34など)、年代的には5世紀後半を上限とし、6世紀第1四半期に下るまでの時間幅が

看取される。沖積地における古墳群の存在は西方、住吉川下流域に展開する住吉宮町古墳群（神戸市東灘区）が著名であり、最近これまでの成果の総括も試みられているが〔安田2001〕、この翠ヶ丘丘陵にも丘陵上から丘陵裾部、宮川氾濫原にかけての地域で厚い砂礫層に覆われた埋没墳がかなりの数見込まれ、近い将来、若宮地区においても中期古墳の存在を立証することができる日が訪れるだろう。

とくにLoc.34における埴輪の量や出土状態はまとまった存在であり、他所より大きく移動してきたものとは考えにくく、近在の地に遺存した有力な古墳が中世段階に破壊された可能性が著しく高いし、伴出した石材の中には葺石とみなせるものもかなりの数認められた。南北朝時代頃まで、古墳が墳丘・外部施設と共に視認し得る状態にあったことは十分想像されてよく〔芦屋市教委・金津山古墳周濠発掘調査会1989、森岡1995a〕、意識的な古墳盛土・濠内埋積土の移動や葺石の選択・運搬があったことも考えておきたい。

以上を踏まえるならば、若宮遺跡は古墳時代にあっては有数の墓域（翠ヶ丘古墳群）の一角を担う公算が強く、現状では芦屋川右岸域で発達するような同時代の集落を想定することはできない。

⑦ふるわぬ古代の若宮遺跡

古代に関しては、出土資料自体が乏しく、その様相は明らかでない。Loc.11（確認調査）やLoc.19の調査で8～9世紀のまとまった土器が確認されているものの、遺跡全体に占める割合は著しく低く、律令的土器様式を構成する気配もみせず、その他Loc.10・1などで該期の土器をごく少量認めるにすぎない。翠ヶ丘丘陵全体では、久保遺跡Loc.16や堂ノ上遺跡Loc.4などにおいて出土する古代の資料が注意されるが、市内の芦屋川右岸扇状地上の古代集落・官衙・寺院跡のありようと比すれば、僅かな手懸りが得られているにすぎない。より東方の丘陵地で該期の集落の存在を想像するにとどめたい。

⑧旧宮川の河川制御と耕地開発の進捗した中世後半期の若宮遺跡

若宮遺跡では、古代に続いて中世前半期の活動痕跡が著しく貧困である。それは10～13世紀段階の出土資料が乏しいことから裏づけられる。この時期、市域東部では打出・翠ヶ丘丘陵上で水田開発が進んでおり、打出小槌遺跡の南半部で11世紀代から、同北半部で12世紀前半には耕作地が広がりをみせる。また、J R東海道本線以北に中心域が存在する久保遺跡では、12～14世紀の耕地開発が水田跡・用水路など遺構として確認でき〔芦屋市教委1987〕、若宮遺跡の開発状況とはかなり様相を異にしていることが知られる。この点、阪神電鉄本線を挟んで南北において耕地開発の実状は確かに弁別できるのであり、古代・中世においても、若宮・打出小槌両遺跡を分離する妥当性が理解されよう。

若宮遺跡の範囲内においても、中世耕作地の開発状況には相違がみられる。最も大きな特徴は、遺跡の南半部では、15～16世紀代の中世後半期の耕作面が比較的厚い洪水堆積物を介在させて連続的に検出され（Loc.10・1・10・2・25など）、一方、北半部では堆積物も少ない関係から耕作面が互いに接近するとともに検証面数も減ずる傾向にある。また、中世末期には旧宮川の流路固定が進み、氾濫による耕地の荒廃も一定程度止まり、近世以降には比較的安定した生産面を提供することとなる。

⑨南北朝期における牛骨出土遺構の分布とその意味

Loc.10・1・2面SR01埋土資料を嚆矢として、若宮遺跡の各調査地点からは牛骨片や馬骨片、鹿骨片がまとまって出土するようになった。この流路は16世紀のものであり、獣骨類の所属時期を特定することはできなかったが、4面SR02においても埋土中から15世紀の埋没を示す牛の臼歯が顎頭・腭尻など金属製刀装具を伴って検出されている。また、同地点では調査区南東部の8層上面でもシカの焼骨片や炭化物が確認されている（SX01）。SX02も底に礫を伴う土坑状遺構で、焼骨片微量と炭化物がみつまっている。

以後の調査例では、Loc.25の3面落ち込み上層（暗灰色シルト混じり粗砂）で多数の獣骨（牛、馬

も含むか)が出土しており、「落ち込みの埋没の最終段階に、解体した牛の骨を投棄したような状況が想定」されている。時期は14世紀前半に比定されている。さらに最も顕著な出土状態を示したものにLoc.34南北Tr.護岸状遺構②層をあけることができる。同層中からは14世紀前半を中心とする南北朝時代の土器・陶器類や多量の獣骨・櫛が出土しており、奈良文化財研究所 松井 章・宮路淳子・藤田正勝の諸氏に骨片の動物種・部位同定や専門的な分析をご依頼したが(付論 松井・宮路・藤田 論考)、「イヌ3点、ウマ104点、イノシシ5点、ニホンジカ83点、ウシ117点の計312点の3目5属5種が同定され」、最小個体数で多いものをみると、ウシ11個体、ニホンジカ6個体、ウマ4個体を数え、ウシが最も多い結果を得ている(本書、P232)。

このように、遺跡内合計3地点5ヶ所において、獣骨を伴うやや特異な遺構がみつかり、現状では東西60～65m、南北35～40mの広がり有して、若宮遺跡の中心部やや南寄りにおいて共通する集団の一定の活動領域をとらえることが可能である。

いまその遺構・遺物の属性を大雑把にみるならば、(1)時期は14世紀前半の南北朝期を上限とし、比較的短期間にとどまってみられること。(2)落ち込みや溝・土坑状の遺構、また堤状の遺構に伴い、石塊や炭化物を伴出するケースが多いこと。(3)青灰褐色系の泥質砂～砂を充填材とし、獣骨の種類はウシ・ウマの骨が主体をなし、次いでニホンジカが加わり、若干量のイヌ・イノシシの骨が混ざっていること。(4)羽釜などの煮炊容器と土師器小皿などの飲酒・飲料容器が出土土器の多くを占めること。などがあげられよう。

遺構の種類は、堤・落ち込み・土坑など多様であるが、時間的共時性を宿して若宮遺跡の南半部に集中して遺存することから、これらはきわめて有機的な関係をもつ人々の活動の形跡と考えることができる。獣骨には一部焼痕を有するもの、切断痕跡、解体痕跡のみられることや(4)としてあげたように、日常雑器の中でも羽釜や土師器小皿など特定の器種が顕著に伴出することなどもその緊密な関係を想定せしめるに十分であり、総じて投棄、遺棄されたような特異な出土状態を示す点、武器・刀装具などが散見される点も重要な手懸かりを明示しているものとみてよい。

14世紀前半といえ、建武3年(1336)の足利尊氏・楠木正成の打出合戦(「梅松論」[「太平記」]や観応2年(1351)の足利尊氏・直義兄弟の打出浜合戦(「太平記」)など、芦屋市東部打出の海岸付近で起った南北朝時代の大きな合戦記録・史料が想起される。この若宮地区がこうした合戦場に近いか、まさしく該当する場であることを思うと、当遺構・遺物群の時代背景を考える上に看過できぬ歴史的事件といえるだろう。また、食用や骨細工・皮革業に供された獣骨の存在は、当地における中世住民の生業を理解していく上に欠くことのできない基礎資料を提供したと言ってもよい。旧宮川に沿った川べりといった立地上の特性を踏まえ、今後、多角的な性格の究明が待ち望まれよう。(森岡)

3 若宮遺跡をめぐる今後の課題

この報告をもって、若宮遺跡の概略はご理解いただけたものと確信するが、未解決の問題も数多く残っているのが偽らぬ現状である。その点を思い着くまま、以下に列挙する。

第一点は、遺跡の範囲についてであるが、国道43号線を越えてさらに南へ広がる可能性や調査の及ばなかった東方、打出商店街の周辺にも拡大する蓋然性は多分に残されている。船橋式や長原式などより新しい突帯文土器集団がよりもっと南方の浜堤上や堤間湿地に面して生息していたことも考えられてよく、周辺地域の調査の今後に期待したい。

第二点は、大阪府群を基盤とする翠ヶ丘丘陵が大阪湾北岸地域において最も海岸部近くにのびるといった特異な地形と若宮遺跡との関係であり、初期農耕集団の定着過程を縄文・弥生両時代の変換期

を見越した上で考究する必要がある。現状では突帯土器群と遠賀川式土器群の間には時間的空隙が比較的あり、単なる集団の移行とはみれない点に留意したい。土器論と遺跡立地論の本格的検討を課題とし、狩猟・採集民の農耕化のミクロなようすを芦屋という地域で再考すべきであろう。

第三点は、組成の分析が試みられた獣骨の廃棄遺構の共通性と異質性であり、全国的に中・近世の実例が増えつつある点を踏まえて、史料の検討も果たし、中世史や近世史に正しく位置づけることが今後の課題となろう。(森岡)

4 おわりに

以上、論点に精粗はあるものの、6年間にわたる若宮地区の発掘調査事業を総括する一文を草してきた。この事業は、2年間の全国支援(平成8・9年度)、1年間の兵庫県支援(平成11年度)を受けつつ、最後の2年間は市単独事業として実施したが(平成12・13年度)、発掘担当者が内外13名の顔ぶれという専従者が誰一人としていない中で遂行され、平成13年度に報告書作成作業という終盤を迎えた。思えば、平成8年10月23日の試掘で、周知外開発区域の1本の確認トレンチから得られた微証からこの遺跡はその姿をわれわれの目の前に現わし始めたのであり、発見の因縁を強く感じざるを得ない。遺跡の存否を経験則的な先入観のみで判断してはならぬことを痛感したといえる。

平成8・9年度に行われた1・2号館建設に伴う第1・2地点の埋蔵文化財事前調査は、兵庫県教育委員会を通して全国支援を受け、平成11年8月31日に正報告書を刊行した〔森岡・竹村編1999〕。平成9年の末期に行われた第3地点の事前調査も全国からの支援専門職員に発掘を担当してもらい、年内に発掘調査は完了した。しかし、以降調査次数を重ねるにつれ、すべての地点の事前調査の成果を正規の報告書という形でまとめることは困難と判断され、とりあえず、事業完了と同時に少なくとも全調査の概要だけでも編む必要性が生じ、概報に近い本書の拙速なる刊行に至ったわけである。

全面調査・確認調査・工事立会・慎重工事など、都合34地点分を行ったが、34地点分の事業別内訳は住宅本体工事6件、事業地内道路地下埋設工事7件、集会所建設工事1件、付帯駐車場2件、広場敷設工事2件である。また、調査種別による内訳は、工事損壊部分の全面調査14件、確認調査8件、工事立会5件、慎重工事10件となる(全面調査の件数は、調査地点の枝番分を含む)。調査主体はすべて芦屋市教育委員会であるが、発掘担当者の内訳は、市の専門職員が行ったもの8地点、県の専門職員が行ったもの3地点、全国の支援職員が行ったもの3地点を数え、3ヶ年の全国支援が切れて以降は、平成10・11年度の2ヶ年にわたって県から直接の支援を受けて調査を実施した。

末筆となったが、本書は阪神・淡路大震災の苦難を乗り越えて成し遂げられた「若宮地区震災復興住環境整備事業」の一環として、埋蔵文化財保護事業内容の記録保存を目的に作成、刊行されるものである。事業推進の中で発見された新遺跡は、その後数年を経る過程で、周知の複合遺跡としていち早く定着し、町名・地区名と同じ名称で市民からも親しまれる存在となり、「広報あしや」にもたびたび登場した。遺跡は地域の中で生きていくものであり、かつその発掘成果は地域住民の中に浸透・還元されてこそ町づくりの真の原動力となる。本書が若宮地区の先人達の足跡の、ひいては芦屋の歴史の根幹資料として末永く活用されることを念願する次第である。

なお、出土品の一部については、若宮地区の新しい集会所の一室のコーナーにささやかながら展示・公開している。開発事業課との調整と協力によりセッティングされたものであるが、地域の人々の集会の憩いのひとときに、文化財の啓発普及・教育資料として日常的に利用されることを望むものである。加えて、発掘調査過程の要所をビデオ撮影している。編集作業が進めば、これも震災復興と遺跡保存のよすがとなるものであり、向後の活用を考えている。(森岡)

引用・参考文献目録

- 浅岡俊夫 1988 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』真陽社
- 浅岡俊夫・姫路真保・古川久雄 1993 「芦屋市月若遺跡-第10・13地点-」六甲山麓遺跡調査会
- 浅岡俊夫・古川久雄・姫路真保 1992 「芦屋市大原遺跡-第3地点-」六甲山麓遺跡調査会
- 芦屋市 1997 「阪神・淡路大震災 芦屋市の記録Ⅰ '95~'96」
- 芦屋市 1999a 「平成11年度主要施策の成果等説明書」
- 芦屋市 1999b 「若宮地区震災復興住環境整備事業 若宮-安全・快適でコミュニティのあるまちづくり」
- 芦屋市 2001a 「復興への歩み 阪神・淡路大震災 芦屋市の記録Ⅱ 1996.4-2000.3」
- 芦屋市 2001b 「若宮地区震災復興住環境整備事業 若宮-安全・快適でコミュニティのあるまちづくり」
- 芦屋市教育委員会 1986a 「打出小槌古墳現地説明会資料」
- 芦屋市教育委員会 1986b 「打出小槌古墳を発掘調査-5世紀後半人物埴輪など出土」『広報あしや』No.493 芦屋市役所
- 芦屋市教育委員会 1987 「久保遺跡発掘調査現地説明会ノート」芦屋市教育委員会
- 芦屋市教育委員会 1997a 「観覧のてびき 最新発掘! 考古学からみた芦屋展-'95~'97震災復興調査の成果」
- 芦屋市教育委員会 1997b 「平成8年度国庫補助事業 打出小槌遺跡(第22地点)発掘調査実績報告書」
- 芦屋市教育委員会 2001 「公開展示説明会資料 「寺」字刻印土器と芦屋慶寺跡-第75地点発掘調査の成果から-」
- 芦屋市建設部開発事業課 2001 「若宮(安全・快適でコミュニティのあるまちづくり)」
- 芦屋市教育委員会・金津山古墳周縁発掘調査会 1989 「<現地説明会ノート>金津山古墳周縁の発掘調査-第2地点における前方部の存在確認成果-」
- 綱干善教・米田文孝・山口卓也 1985 「山芦屋遺跡(S4地点)」兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度 兵庫県教育委員会
- 池田 碩 1998 「花崗岩地形の世界」古今書院
- 市本芳三 1995 「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 伊野近富 1987 「“かわらけ”考」『京都府埋蔵文化財論集 第1集 -創立五周年記念誌-』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 1995 「土師器Ⅲ」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の幅年」『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科
- 泉 拓良 1994 「口酒井遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県
- 魚澄惣五郎編 1957 「芦屋市史」本編 兵庫県芦屋市教育委員会
- 大川勝宏・半澤幹雄 1997 「打出小槌遺跡(第22地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 大手前女子大学史学研究部文化財調査室 1990a 「現地説明会資料 打出小槌遺跡-打出小槌古墳周辺地区第4次調査-」
- 大手前女子大学史学研究部文化財調査室 1990b 「打出小槌遺跡の発掘調査」『いのち(文化財調査室だより)』No.5
- 岡田篤正・東郷正美編 2000 「近畿の活断層」東京大学出版会
- 岡本敏行・家塚英詞 1998 「栗平遺跡(第34地点)」『平成9年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 片岡 肇編 1985 「神戸市東灘区本庄町遺跡発掘調査報告書」(財)古代学協会
- 金津山古墳周縁発掘調査会・芦屋市教育委員会 1989 「<現地説明会ノート>金津山古墳周縁の発掘調査-第2地点における前方部の存在確認成果-」
- 鎌田 勉・藤井 整 1997 「堂ノ上遺跡(第1地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 鎌田 勉・弘田和司 1997 「栗平遺跡(第27地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

- 神野 信・吉田東明 1997 「寺田遺跡(第55地点)」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64巻2号 日本考古学会
- 金田章裕 1992 『微地形と中世村落』 吉川弘文館
- 神戸市・建設工学研究所 1999 『阪神・淡路大震災と神戸の活断層』 (財)建設工学研究所・神戸市
- 後藤博弥 1988 「六甲山地の地質と岩石」『六甲山地の地理-その自然と暮らし-』 神戸新聞出版センター
- 小松 謙・東 和幸 1997 「栗平遺跡(第26地点)」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 佐藤隆春 1999 「調査地点の地層の運動・堆積機構と堆積環境」『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書-震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果-』<芦屋市文化財調査報告 第30集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 佐藤公保・丸杉俊一郎 1998 「栗平遺跡(第41地点)」『平成9年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 寒川 旭 1997 『揺れる大地』 同朋舎
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋庵寺跡建物基壇と関わる地震痕跡」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 重藤輝行・竹村忠洋編 1999 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書-阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果-』<芦屋市文化財調査報告 第32集> 芦屋市教育委員会
- 鳥 之夫 1929 『芦屋の里』 宝成館
- 下条信行・南 博史 1984 『神戸市東灘区 本山遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会
- 下条信行・南 博史・定義秀夫・浅岡俊夫・上田建夫・緒方 泉ほか 1988 『伊丹市 口西井遺跡-第11次発掘調査報告書-』 伊丹市教育委員会・(財)古代学協会
- 大日本帝国市町村地図刊行会 1937 『兵庫県武庫郡糟田村土地宝典(地帯地籍地目賃貸価格等級図ハ)』
- 高瀬一彦編 1997 『芦屋市所在 三条九ノ坪遺跡-被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』<兵庫県文化財調査報告第168冊> 兵庫県教育委員会
- 高橋竹彦 1988 「六甲山地の植生と土壌」『六甲山地の地理-その自然と暮らし-』 神戸新聞出版センター
- 高橋 学 1986 「(付論)芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」『北青木遺跡』<兵庫県文化財調査報告第36冊> 兵庫県教育委員会
- 竹村忠洋 1988 「突帯文土器の小地域色-近畿地方を中心として-」『網干善教先生古稀記念考古学論集』 網干善教先生古稀記念会
- 竹村忠洋・森岡秀人 1999 「古墳時代の堅穴住居について」『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書-阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果-』<芦屋市文化財調査報告 第32集> 芦屋市教育委員会
- 多田敏樹 1987 「山芦屋遺跡(S2地点)の発掘調査の概要(現地説明会資料)」山芦屋遺跡調査団
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 辻林 浩・渡部 紀 1997a 「芦屋庵寺遺跡(第45地点)」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 辻林 浩・渡部 紀 1997b 「栗平遺跡(第25地点)」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 辻 康男 2000 「六甲南麓地域における縄文遺跡の立地と堆積環境」(第54回京都縄文文化研究会発表要旨・資料)
- 辻 康男 2001a 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について-芦屋川・宮川の事例-」『討論と学習会 地学団体研究会 六甲土石流団体研究グループ 堆積学ゼミ主催 扇状地はいつ、どのようにしてつくられたか-六甲山地南麓扇状地の地形・地層と形成過程 発表要旨・資料』
- 辻 康男 2001b 「芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期以降の地形発達史と遺跡形成過程-縄文

- 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001a 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について―芦屋川・宮川の事例―」〔第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料〕
- 横 伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁器」〔概説 中世の土器・陶磁器〕 真陽社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989 「弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ」 木耳社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 「弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ」 木耳社
- 中川 渉・深江英恵・小川良太 1999 「六条遺跡」〔平成10年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 永光 寛・三輪見三 1998 「打出小槌遺跡（第25地点）」〔平成9年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 中村啓太郎・三輪見三 1997 「業平遺跡（第29地点）」〔平成8年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 中村 浩 1990 「研究入門 須恵器」 柏書房
- 中村 浩 1993 「古墳時代須恵器の編年の研究」 柏書房
- 中村 浩 2001 「和泉陶器窯出須恵器の型式編年」 芙蓉書房出版
- 永光 寛・三輪見三 1998 「打出小槌遺跡（第25地点）」〔平成9年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 長屋幸二・佐藤康二 1996 「芦屋庵寺跡（W地点）」〔平成7年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 日本中世土器研究会編 1985 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 福宜田佳男・重藤輝行・森岡秀人・竹村忠洋 1998 「寺田遺跡（第95地点）」〔平成9年度 年報〕 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 福島孝行・上垣幸徳・藤井 整 1999 「若宮遺跡第2地点（打出小槌遺跡第24地点）の発掘調査」〔若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書―震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果―〕〈芦屋市文化財調査報告 第30集〉 芦屋市教育委員会
- 藤井 整 1999 「若宮遺跡第2地点出土の弥生前期末～中期初頭の土器について」〔若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書―震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果―〕〈芦屋市文化財調査報告 第30集〉 芦屋市教育委員会
- 鹿岡 弘・勇 正広 1976 「古墳時代」〔新修 芦屋市史 資料編Ⅰ〕 芦屋市役所
- 藤田和夫 1966 「尼崎平野の形成」〔尼崎市史〕第1巻 尼崎市役所
- 藤田和夫・笠間太郎 1982 「大阪西北部地域の地質」（地域地質研究報告 5万分の1図幅）通商産業省工業技術院地質調査所
- 瀬川道草 1963 「芦屋郷土誌」 芦屋史談会
- 前田 昇 1971 「芦屋の自然環境」〔新修 芦屋市史 本篇〕 芦屋市
- 岡壁忠彦・岡壁俊子 1966 「備前焼研究ノート（1）―備前焼の成立」〔倉敷考古館研究集報〕第1号（財）倉敷考古館
- 岡壁忠彦・岡壁俊子 1966 「備前焼研究ノート（2）―中世備前焼の推移」〔倉敷考古館研究集報〕第2号（財）倉敷考古館
- 岡壁忠彦・岡壁俊子 1968 「備前焼研究ノート（3）―備前焼窯址の分布とその性格」〔倉敷考古館研究集報〕第5号（財）倉敷考古館
- 岡壁忠彦・岡壁俊子 1984 「備前焼研究ノート（4）―その後の新資料」〔倉敷考古館研究集報〕第18号（財）倉敷考古館
- 増田富士雄・伊勢屋ふじ子 1985 「“逆グラディング構造”：自然堤防帯における氾濫原堆積物の示相堆積構造」〔堆積学研究会報〕22・23 堆積学研究会
- 松田順一郎 1996 「3.1.1 岩質層序」〔北島遺跡の耕作地後と古環境―淀川南部流域植附ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書〕（財）東大阪市文化財協会
- 松田順一郎 1999 「第7章 瓜生堂40次調査における河川堆積作用の変化」〔瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書―電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告―〕（財）東大阪市文

化財協会

- 南 博史 1989 「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯土器の変遷—口酒井遺跡第11次発掘調査を中心として」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第二集 京都府京都市文化博物館
- 南 博史ほか編 1985 『寺田遺跡発掘調査報告』財団法人古代学協会
- 武蔵 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘ほか 1971 『新修 芦屋市史 本編』芦屋市
- 村川行弘 1970 『芦屋庵寺址』＜芦屋市文化財調査報告 第7集＞芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1971 『考古学上からみた芦屋』『新修 芦屋市史 本編』芦屋市役所
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 『増補 会下山遺跡』奈良明新社
- 村川行弘・森岡秀人 1976 『弥生時代』『新修 芦屋市史 資料編1』芦屋市役所
- 村川義典・森岡秀人 1996 『第6章 摂津国』村川行弘編『兵庫県の考古学』吉川弘文館
- 森岡秀人 1980 『土器からみた高地性集落会下山遺跡の生活様式』『藤井祐介追悼記念考古学論叢』刊行会
- 森岡秀人 1982 『阪神地方 その通称時代—“西摂の縄文文化”展に寄せて—』『地域史研究 芦の芽』35号 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1984 『縄文ムラと弥生ムラの出会—近畿北部を中心として—』『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
- 森岡秀人 1986 『摂津・打出小樋古墳周壕の発掘調査』『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター
- 森岡秀人 1987 『古墳時代の芦屋地方(上)—近年の遺跡調査をふりかえって—』『兵庫県の歴史』23 兵庫県史編集専門委員会編 兵庫県史編さん室
- 森岡秀人 1988a 『古墳時代の芦屋地方(下)—近年の遺跡調査をふりかえって—』『兵庫県の歴史』24 兵庫県史編集専門委員会編 兵庫県史編さん室
- 森岡秀人 1988b 『打出小樋古墳(確認)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988c 『芦屋庵寺B地点』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988d 『金津山古墳(周壕)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988e 『近畿地方における稲作農耕の開始と展開』『日本考古学協会設立四十周年記念シンポジウム 資料集 日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会
- 森岡秀人 1992a 『打出小樋古墳』『兵庫県史』考古資料編(兵庫県史編集専門委員会編) 兵庫県
- 森岡秀人 1992b 『阿保親王塚古墳』『兵庫県史』考古資料編(兵庫県史編集専門委員会編) 兵庫県
- 森岡秀人 1993 『初期稲作志向モデル論序説—縄文晩期人の近畿的対応—』『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1995a 『海辺の古墳—摂津・金津山古墳と打出小樋古墳について—』『古墳文化とその伝統—西谷真治先生古希記念論文集—』勉誠社
- 森岡秀人 1995b 『Ⅲ. 総括—月若遺跡をめぐる諸問題—』『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告 第26集＞芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1995c 『埋蔵文化財の保護意識と阪神大震災—被災地芦屋の現状と展望—』『月刊文化財発掘出土情報』(緊急特集 阪神大震災と文化財)4月号(通巻149号) ジャパン通信社
- 森岡秀人 1996a 『兵庫県南部地震と六甲の土石流』(高浜信行らと共筆)『大震災—そのとき地質家は何をしたか』東海大学出版会
- 森岡秀人 1996b 『Ⅲ. 総括』『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財

- 緊急確認(試掘)調査-」<芦屋市文化財調査報告 第27集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 1988 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告 第16集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 1995 『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡(第19地点)』<芦屋市文化財調査報告 第26集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人ほか 1988 『金津山古墳第2次試掘調査記録』<昭和63年度埋蔵文化財調査概要(14)>芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 1997 『打出小樋遺跡(第24地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子編 1996 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査-震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査-概要報告書』<芦屋市文化財調査報告 第27集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木許 守 1986 『打出小樋古墳試掘調査概要報告』<芦屋市埋蔵文化財調査 昭和61年度概要1> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1997a 『平成9年度 小松原遺跡(第5地点)発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1997b 『打出小樋遺跡(第23地点)確認調査概要報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1997c 『都市計画道路山手幹線・川西線整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査実績報告書(寺田遺跡第103地点, 月若遺跡第49地点, 栗平遺跡第43地点, 大原遺跡第32地点, 打出岸造り遺跡第24地点)』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1999 『Ⅵ 若宮遺跡をめぐる二、三の考証』『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書-震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果-』<芦屋市文化財調査報告 第30集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000a 『平成11年度 国庫補助事業 芦屋施寺遺跡(第62地点)発掘調査実績報告書-震災復興調査-』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000b 『阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題-芦屋市における5年間をふり返って-』『地震災害と考古学』Ⅰ 日本考古学協会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000c 『芦屋施寺中核部の発掘調査(第62地点)』『兵庫県埋蔵文化財担当者研修会資料』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000d 『芦屋の縄文遺跡-震災復興調査の成果から-』(第54回京都縄文文化研究会発表要旨・資料)
- 森岡秀人・竹村忠洋編 1999 『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書-震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果-』<芦屋市文化財調査報告 第30集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告 第40集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・種定淳介 1996 『兵庫県』『農耕開始期の石器組成 Ⅰ 近畿(大阪・兵庫)・中国・四国』<国立歴史民俗博物館資料調査報告7> 国立歴史民俗博物館
- 森岡秀人・辻 康男 2000a 『平成11年度国庫補助事業 打出小樋古墳西部(打出小樋遺跡(第31地点))埋蔵文化財発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2000b 『平成11年度国庫補助事業 小松原遺跡(第8地点)第2次確認調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2000c 『平成11年度国庫補助事業 金津山古墳(第11地点)(厩塚)の前方部西部埋蔵文化財発掘調査実績報告書-震災復興調査-』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2001 『平成12年度国庫補助事業 打出岸造り遺跡(第32地点)発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会

- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996 「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」『庄内式土器研究』XII 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・白谷朋世編 1992 「平成3年度国庫補助事業 芦屋庵寺遺跡ほか発掘調査概要報告書」＜芦屋市文化財調査報告第22集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世編 1993a 「平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小樋遺跡第7地点 打出小樋遺跡第2地点 打出小樋遺跡第3地点」＜芦屋市文化財調査報告 第23集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世編 1993b 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き」＜芦屋市文化財調査報告 第24集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・吉村 健 1992 「摂津」『前方後円墳集成』第3巻 近畿 山川出版社
- 森岡秀人・渡辺 昇 1999 「庄内式土器の土器交流拠点（摂津・播磨）」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉編 1990a 「三条九ノ坪遺跡－第2地点発掘調査簡報－」＜芦屋市文化財調査報告第18集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉編 1990b 「平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点概要報告書」＜芦屋市文化財調査報告 第19集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世編 1993 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布図および利用の手引き」＜芦屋市文化財調査報告第24集＞ 芦屋市教育委員会
- 森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
- 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 矢口裕之・北原 治 1996 「打出岸造り遺跡（第9地点）」『平成7年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務局
- 安田 滋 2001 「第5章 まとめ」『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書－阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 神戸市教育委員会
- 安平勝利編 1997 「市原・寺ノ下遺跡」＜加美町文化財報告1＞ 兵庫県加美町教育委員会
- 家根祥多 1982 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 家根祥多 1996 「滋賀里式土器」『日本土器事典』 雄山閣
- 山下史郎編 1986 「北青木遺跡」＜兵庫県文化財調査報告第36冊＞ 兵庫県教育委員会
- 吉田宜夫・金森安孝 1997 「栗平遺跡（第31地点）」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務局
- 六甲上石流団体研究グループ 2001 「六甲山山麓扇状地での土石流・洪水堆積物の堆積時期・堆積場の変遷」『地球科学』55号
- 若宮町まちづくり協議会 2001 「広報わかみやー若宮地区震災復興まちづくりニュース」
- 和田秀寿 1990a 「打出小樋遺跡第5地点」〔確認調査概要報告〕 芦屋市教育委員会
- 和田秀寿 1990b 「小松原遺跡（金津山古墳周辺第3地点）発掘調査略報」 芦屋市教育委員会
- 渡辺 昇 1999 「大原遺跡（第35地点）」『平成10年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務局

付 論

1 若宮遺跡の地質

佐藤隆春(六甲土石流団体研究グループ)

1) 若宮遺跡の地質学的位置

本遺跡は大阪府群からなる丘陵と宮川左岸の自然堤防との間にある。本書第8図に最新の地形区分がまとめられている。これは地形を構成する表層地質を埋蔵文化財調査で確認して区分したものであり、おもに地形図と航空写真による従来の区分図より精度の高いものとなっている。これまで扇状地、沖積層に一括されていた宮川下流域が中部扇状地面と上部扇状地面に区分され、古代以降の堆積域が宮川にそう狭い範囲に限られてきたことが明らかになった。なお、佐藤〔1999〕は微地形図をもとに本遺跡南部付近に砂堆の存在を推定したが、その後の調査で確認されなかった。

①活断層の位置

六甲山地と山麓にいくつかの活断層があり、このうちの甲陽断層が西宮市仁川から南西にのび、阪急神戸線付近と宮川の交差点の南に達する〔藤田・笠間1980〕。また伏在活断層として西宮断層〔神戸市・建設工学研究所1999、岡田・東郷編2000〕が阪神本線打出駅付近から南に約300m幅で存在するとされている。中田ほか〔1996〕は西宮断層の北縁付近で活断層(活拗曲)を夙川とJR神戸線の交差点から金津山古墳の南部に示している。しかし、金津山古墳の発掘調査で大阪府群に拗曲・断層は確認されていない〔森岡・辻2000〕。さらに南の若宮遺跡第1地点、第74層〔森岡・竹村編1999〕は大阪府群の可能性が高く、断層は本遺跡より南に推定される。

本遺跡に隣接する大阪府群は阪神間ではもっとも南に露出する。藤田・笠間〔1980〕は六甲山地がいくつかの活断層で階段状に隆起し、さらに東から西に傾動していることを示している。この意味で本遺跡は六甲山地の隆起運動の最南端に位置し、丘陵から扇状地・平野に移行する地点に立地している。

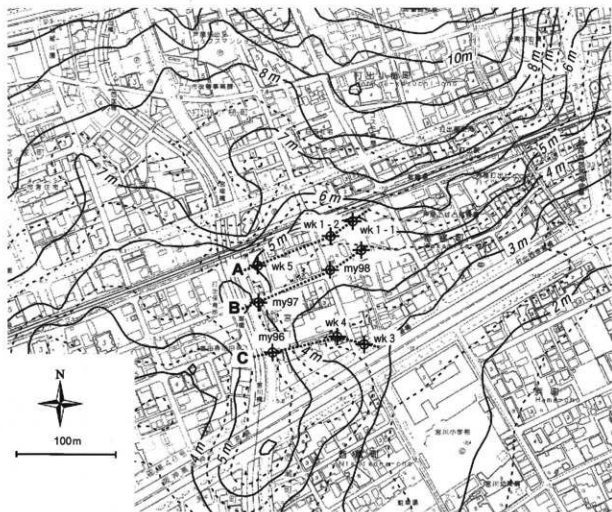
②ボーリング調査資料から判読する表層地質

本遺跡内で行われたボーリング調査の位置を第1図、柱状図を第2図に示す。柱状図のうちwkは本市開発事業課、myは本市下水道課から提供されたものである。宮川に直交するほぼ東西方向の断面で柱状図を並べてある。柱状図の記事、相対密度、N値などをもとに沖積層と洪積層の境界を推定し、破線で結んで示した。断面図ごとに沖積層の特徴をまとめた。

断面A：沖積層基底の標高は東から宮川に近づくにつれ、2.23、-2.09、-4.7mと急激に低くなる。第1地点の第74層に相当すると思われる砂礫はwk1-2で標高-2.09mにみられるが、wk5では欠如する。wk1-2、wk5の沖積層は礫またはシルト混じりの細～粗砂で構成されており、おもに河道充填堆積物であると思われる。沖積層基底の傾斜は河道による侵食面であろう。

なお、wk1-1の標高3.28m～2.23mのシルト、シルト質砂は若宮遺跡第1地点での第24層～第54層に、標高2.23mより下位の砂礫は同第74層に対応する。報告書〔森岡・竹村編1999〕では第74層を洪積層としているが、ボーリング調査の報告書は洪積層の上面を標高-3.92mの砂礫の基底に設定し、本層を沖積層と判定している。しかし、第74層上面は大きく侵食を受け、東から西に急傾斜で落ち込んでいる。本地点は丘陵末端に隣接しており丘陵斜面の延長が第74層上面に連続すると推定される。

断面B：沖積層基底の標高は-2.38～-3.73mで、平坦である。沖積層はおもに砂、砂礫で構成さ



第1図 若宮遺跡付近の微地形図とボーリング調査地点

等高線は戸田市下水道台帳図（汚水）の地盤高（cm単位）をもとに作成した。ボーリング地点のうちwkは本市開発事業課、myは本市下水道課による。

れるが、my98はシルト、粘土が3枚挟まれ、いずれも腐植物を混入する。河道の軸から外れた後背湿地環境下にあったものと思われる。

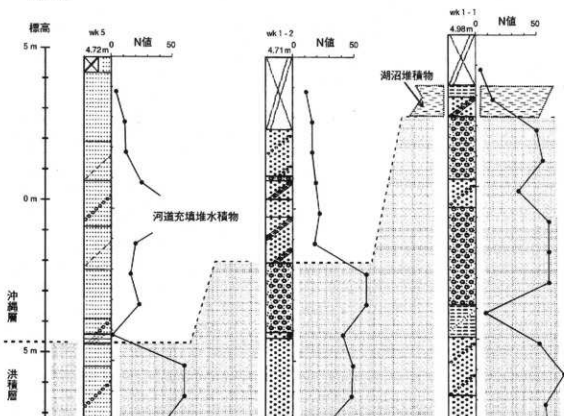
断面C：沖積層基底は宮川河道のmy96で標高-0.6mと高く、東に急傾斜し、wk4、wk3で標高-8.6mとなる。my96では良く締まった層厚4mの砂礫を粘土化した腐植土がおおう。この腐植土は侵食をまぬがれた埋没段丘の古土壌の可能性がある。wk4の沖積層は最上部の砂（標高2.48～0.68m）は第34地点の第5・7・9層に対応する河道充填堆積物である。下位の砂礫もラミナをもつ河道充填堆積物と推定される。標高-4.32～-8.57mは有機物を含む粘土と粘土質細粒砂であり、後背湿地堆積物であろう。wk3の沖積層は砂礫を挟む中～粗粒砂で構成され、河道充填堆積物から構成される。

③旧宮川河道と旧海岸線

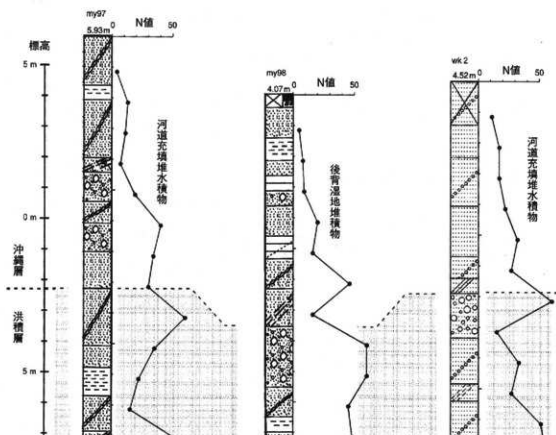
沖積層基底面の標高を第3図に示し、その推定等高線を描いた。本遺跡周囲の宮川幼稚園、打出保育所および宮川沿いの下水道敷設にともなうボーリング資料も参考にした。古土壌はmy96のほかに確認できず、その広がり是不明であるが、現在の宮川河道付近に残存する可能性がある。wk4、wk3からwk5へ入る谷は旧宮川河道と推定できる。

本遺跡は19世紀末の海岸から約800m、標高約3～5mの地点にある。約6000年前の縄文海進当時、大阪湾の海水準は現在より3m高かったと推定されている〔前田1980〕。当時の地形は現在よりやや

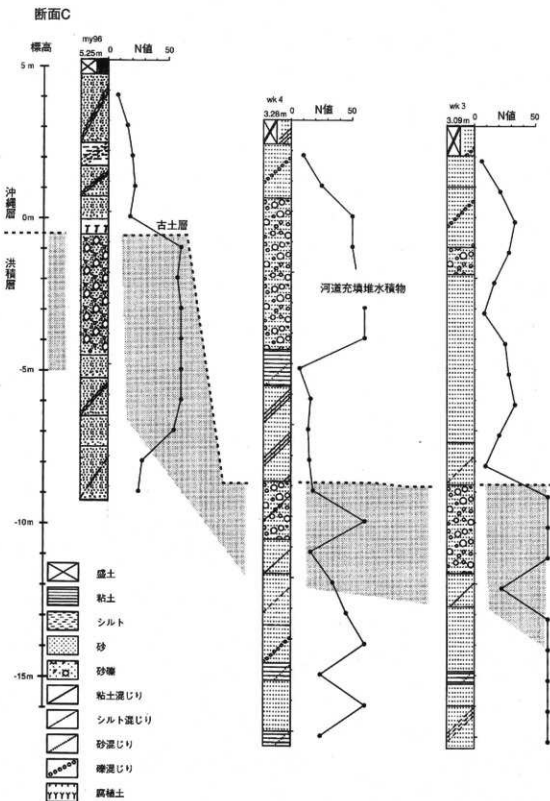
断面A



断面B



第2-1図 若宮遺跡のボーリング調査による柱状図(1)



第2-2図 若宮遺跡のボーリング調査による柱状図(2)
ボーリング調査地点と断面線は第1図に示す。



第3図 沖積層基底面等高線図
ボーリング調査による沖積層基底の標高を各調査地点に示す。

の堆積年代は明らかでないが、縄文海進の最高頂期またはその直前とするのが妥当であろう。

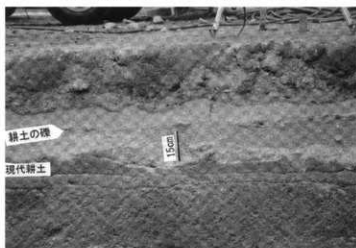
若宮地区の沖積層に海成層が確認できないのは6000年前、すでに宮川が供給した堆積物で標高1m以上まで埋積されていたものと推定される。宮川の下宮川橋の北、約100mにある浜打出橋のボーリング調査資料（沖積層基底標高-6.85m）は沖積層が腐植物を多量に含む粘土を挟む砂、砂礫などで構成されており、海成層は確認できない。堆積物でみる限り当時の海岸線の位置は下宮川橋と浜打出橋の間、若宮遺跡から約400m南に推定される。ただし、海成層の判定を貝殻片の有無だけでおこなうのは困難であり、今後の調査で検討する必要がある。

2) 若宮遺跡にみる堆積層の特徴

堆積相の記載と地層の対比は本報告書にまとめられている。ここではいくつかの堆積物について、その運搬・堆積のしくみを検討する。

①第1b層 (第4図)

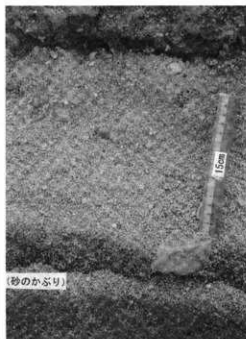
礫混じり粗粒砂である。層厚は第16-2地点で5cm、第10-1地点で10~40cmである。堆積面は攪乱を受けているものの、東に層厚を増している。細粒砂を含まない、逆



第4図 第1b層

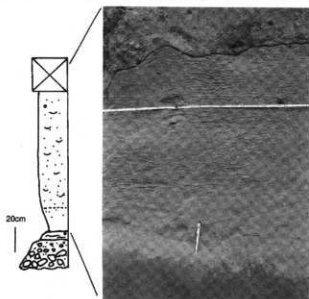
(左) 基底は耕土を削削し、中部に耕土の礫を混じる。第10-1地点西壁。
(右) 基底部5 cmに耕土を混入する。逆級化構造を示す。第10-1地点南壁。

(右) 基底部5 cmに黄土を混入する。逆転化構造を示す。第10-1地点南壁。



級化構造を示す、基底部に耕土の混入が見られる、耕土礫などが平板型クロスラミナにそって配列するなどの特徴を示す。下位層を侵食し、低角のラミナをもつことから、流速の大きい洪水砂であると推定される。

堆積年代：この洪水砂は淡桃色の粗粒砂である点で1938年の阪神大水害による洪水砂に類似する。しかし、芦屋川下流域でみられる1938年の洪水砂は塊状で、下位層を侵食していない例が多く本層と異なる。また、保々〔1938〕、芦屋市〔1971〕によれば、1938年の洪水砂は宮川右岸まで堆積したが、



第5図 第17-1地点 流路を埋積した塊状粗粒砂

左岸に到達していない。また、1938年以降、本地域に粗粒砂を供給する洪水の記録は確認できず、第1b層は1938年以前に堆積したものと推定できる。

②第17-1地点Ⅲ区砂層(第5図)

流路を充填する塊状砂である。第17-1地点で幅3m、深さ2mの南北方向の流路を埋積する。巨礫混じりの砂礫層からなるラグ堆積物をおおう。層厚1.2mのうち下部30cmは細礫混じりの中粒砂で逆級化構造を示して塊状の粗粒砂へ漸移する。粗粒砂も弱い逆級化構造をもち、上部に少量のチャートの中礫を混じる。粗粒砂に長さ10~40cm、幅1cm未満のチリメン状の模様が見られる。急速な堆積や地震動によって未固結の堆積物から間隙水が脱水する過程でつくられる一般的な皿状構造(dish structure)と異なり、皿の両端の立ち上がりが見られない。類例の報告例は知られていないが、初生的な堆積構造とは考えにくく、脱水の過程で形成された二次構造の可能性が高い。“皿”の全面から脱水し、チリメン構造がつけられたものと考えられる。



第6図 第10-1地点第7層

- (上) 第7層下部はリップルラミナ、上部は平板型クロスラミナが見られる。
(下) 第7層下部のクラミングリップル(矢印)。

堆積年代：ラグ堆積物にレンガなどを混入していたので、近代以降の流路を充填したものである。本層を掘り込んで石組みの用水路が右岸層に構築されているが、その形成年代は確認できなかった。第1b層との直接の関係は確認できなかったが、第1b層がこの流路方向に層厚を増しており、類似した粗粒砂で構成されていることなどから、本層が第1b層を供給した流路充填堆積物の可能性がある。打出町在住の大本定男氏は1930年代にこの流路はなかったと証言している。大本氏によると幅1m未満の用水路は当時、南北方向の現

在の道に沿うものに限られていたとのことである。とすると、洪水によって流路が充填し、その際の溢流によって第1b層が堆積した時期は19世紀末～20世紀初頭と思われる。

③第10-1地点第7層

下部はシルト～細粒砂の逆級化構造部を約8cm、上部は平板型斜クロスラミナをもつ層厚20～30cmの粗粒砂である。第7層を含む地層全体の柱状図は本書第12図のLoc.8に示されている。逆級化構造を示す堆積物は氾濫原での洪水堆積物である〔伊勢屋1982, 増田・伊勢屋1985〕。第7層は基底から上位に次のような特徴を示す。(a) 基底の1～2cmは塊状のシルト、(b) 3～5cmシルトと細粒砂のカレントリップラミナ、(c) とときにクライミングリップラミナがみられる、(d) その上位に平板型クロスラミナを示す細礫混じりの粗粒砂が重なる。(e) ラミナ面は南東に約40°傾斜する。(f) 粗粒砂の間に細粒砂を挟むこともある。これらの構造から洪水の様子は次のように推定できる。(a) シルトの懸濁水が流入する。(b) 細粒砂を含む流れが生じ、(c) 砕屑物の供給量が増加してくる。(d) 粗粒砂が運搬され、(e) 底面近くでやや低角となるクロスラミナ (tangential contact) であるので水深は浅い、または流速がやや速い条件であった。(f) 粗粒砂の供給に間欠があり、細粒砂を挟むときもあった。

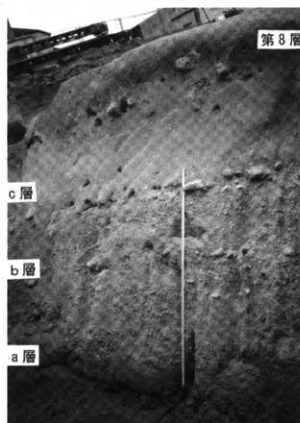
④第10-1地点第9層

第9層は礫混じり中粒砂～粗粒砂でトラフ型クロスラミナを示す河道充填堆積物である。第10・17地点に見られ、河道の肩は検出されていない。第9層を含む地層全体の柱状図は本書第12図のLoc.8に、また本論第2図wk3の標高1.04～0.92mの礫混じり砂に対応する。下限不明であるが、層厚は1.2m以上である。礫種は花こう岩、チャート、石英斑岩、ホルンフェルスで、円礫～亜円礫である。掘削した範囲で、下部(a層)、中部(b層)、上部(c層)に区分される。

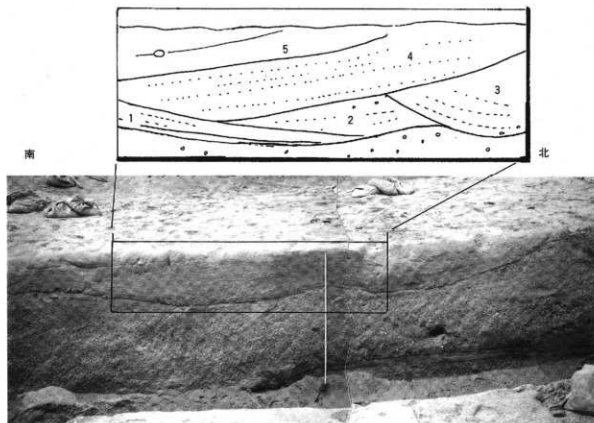
第9a層：層厚30cm+。下部に礫径20cmに達する大礫を含み、級化構造を示す。基質も粗粒砂からなる。掘りぬいていないので詳細は不明であるが、チャネルラグ堆積物の可能性がある。

第9b層：層厚約80cm。中礫まじりの中粒・粗粒砂でトラフ型ラミナが発達する。細粒砂をレンズ状に挟む。南側では頂部に大礫が含まれる。平板形の礫は南に傾斜するインプリケーションを示す。

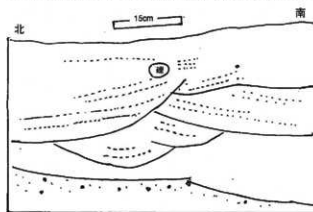
第9c層：層厚30～50cm。礫をまばらに含むやや淘汰のよい中粒砂～細礫混じり粗粒砂である。c層は第10-1地点北側で薄くなり、堆積していない。また、東隣の第10-2地点でも堆積していない。波長約100cm、波高約30cmに達する3Dデューン構造がみられる。ラミナ面の傾斜は4°～10°と低角である。ラミナは侵食面をもついくつかのセットにまとめられる。第8図にそのスケッチとラミナセットの形成順を番号で示す。第9c層全体は南に層厚を増し、ラミナセット2・4・5も南に傾斜するが、ラミナセット1・3は北に傾斜する。南傾斜と北傾斜のラミナは互いに切りあっており、ラミナ形成時の流れの向きが異なっ



第7図 第10-1地点第9層
スケールは1m



第8図 第10-1地点第9c層のクロスラミナ



第9図 第9c層に含まれる礫とラミナ

ていたことが推定される。また、礫の周りのラミナは南から北への流れが推定できる（第9図）。第9c層上部はラミナが不鮮明になる。

南からの流れを示すラミナは海からの風または波による管力でつくられたことが想定される。第9c層上面の標高は約1.9m、弥生時代中期以前の海岸線は本地点の南、数100m未満にあったので第10-1地点が前浜～後浜に位置していた可能性がある。第9b層頂部に南からの流れを示す礫のインプリケーションが見られる。第9c層上面は淘汰のよい白色中粒砂で海浜砂を連想させるものであったことも、この可能性を支持するものである。

増田〔1999〕は北青木遺跡で縄文時代後期の前浜堆積物を報告している。本遺跡の第9c層は北青木遺跡のものに比べ、平行ラミナはみられず、低角のクロスラミナが発達する、南（海）側に傾斜するラミナのほかに北（陸）側に傾斜するラミナのセットがみられる、ラミナを構成する砂層に明瞭な逆歳化構造はみ

られないなどの点で異なる。

東に隣接する第10-2地点で第11層に植物遺体、昆虫化石が含まれる。塚越実氏の鑑定によると植物遺体は*Scirpus* sp. (果実)、*Ampelopsis brevipedunculata* (種子)、*Oxalis* sp. (種子)のほか菌核などで、湿地～沼地の環境を示す〔六甲土石流団体研究グループ2001〕。第9層はこの第11層の上位に堆積する。

これらのことから第9層の形成過程は次のように要約される。縄文時代早期以降、後背湿地～沼地であった本地点に弥生時代中期に河道が入り、砂礫を堆積する。海岸近く、砂礫層の表面はストーム時の波で洗われて再配列し、礫のインプリケーションがつけられる。同時、またはその後のストームで第9c層のデユーンが形成される。海側に砂の堆積が前進し、おもに風で淘汰のよい砂が表面をおおう。したがって、第10地点はストーム時に波が到達する後浜の位置にあったと思われる。なお、辻康男氏は第9c層の粒度分析結果は海浜砂の特徴を示さず、第9層全体は河道充填堆積物と考えられている(私伝)。東西に流れる河道や河口の幅の広い河道あれば、南からの流れも想定できる。今後の検討課題としたい。

3) まとめ—若宮地域の変遷—

大阪層群からなる丘陵のすそ、標高約1mになだらかな段丘面が形成されていた。現宮川の東に段丘面を侵食して谷が入り、谷底は標高-9mに達した。谷はその後砂や砂礫での埋積が進み、縄文海進最高頂期の約6000年前、海面が現在より1~2m上昇していたとしても海面より高く、海水が流入することはなかった。縄文時代晩期以前に屈曲する河道と後背湿地・湖沼が形成された。弥生時代中期に若宮遺跡南部は網状の河道域となり、おもに砂礫を堆積する。南西部(第10地点)の一部はストーム時に波をかぶる前浜にあった。中世に耕作地が展開されるようになるが、ときに宮川の溢流による洪水堆積物がおおむ。近代初期の洪水で若宮遺跡第17-1地点にあった南北の流路が粗粒砂で一気に埋まり、溢流した砂は遺跡南部を覆う。縄文時代晩期以降は第16図と本文に詳しいので参照されたい。

この地に生活の場を求めた先人達は自然環境をたくみに利用してきた。先人の残した足跡を明らかにし、理解するために自然環境の変遷も含めた総合的な検討が必要である。付論は断片的な記載に限られたが、環境復元の一助となれば幸いである。

【引用・参考文献】

- | | |
|-------------------------------|--|
| 芦屋市 1971 | 『新修 芦屋市史』 芦屋市 |
| 伊勢屋ふじこ 1982 | 「茨城県、桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因」『地理学評論』55号 |
| 岡田篤正・東郷正美編 2000 | 『近畿の活断層』 東京大学出版会 |
| 神戸市・建設工学研究所 1999 | 「阪神・淡路大震災と神戸の活断層」 (財)建設工学研究所・神戸市 |
| 国土地理院 1983 | 「1:25000 土地条件図 大阪西北部」 国土地理院 |
| 佐藤隆春 1999 | 「調査地点の地層の選定・堆積機構と堆積環境」『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の結果—』<芦屋市文化財調査報告 第30集> 芦屋市・芦屋市教育委員会 |
| 中田 高・岡田篤正・鈴木康弘・渡辺満久・池田安隆 1996 | 「1:25,000都市圏活断層図 大阪西北部」 国土地理院 |
| 藤田和夫・笠間太郎 1980 | 「大阪西北部地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』 地質調査所 |
| 保々隆典 1938 | 「阪神地方水害記念帳」 甲南高等学校・神戸市 |

- 前田保夫 1980 『縄文の海と森』 蒼樹書房
- 増田富士雄 1999 「北青木遺跡の海浜堆積物」『北青木遺跡発掘調査報告書-第3次調査-』 神戸市教育委員会
- 増田富士夫・伊勢屋ふじこ 1985 「“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」
『堆積学研究会誌』22・23
- 森岡秀人・竹村忠洋編 1999 『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書 - 震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅
1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果-』＜芦屋市文化財調査報告 第30集＞ 芦
屋市・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻康男 2000 『平成11年度国庫補助事業 金津山古墳（第11地点）（の周濠）前方部西半部埋蔵文化財発
掘調査実績報告』
- 六甲上石流団体研究グループ 2001 「六甲山地南麓扇状地での上石流・洪水堆積物の堆積時期・堆積場の変遷」『地球科
学』55号

なお、堆積物の見かたについて最近、わかりやすいテキストが出版されたので紹介する。

- 原田憲一訳・ウィリアム J. フリッツ・ジョニー N. ムーア著 1999 『層序学と堆積学の基礎』 愛智出版
- 八木下晃司 2001 『岩相解析および堆積構造』 古今書院

2 若宮遺跡第34地点出土の動物遺存体

藤田正勝・宮路淳子・松井 幸

1) 出土した動物遺存体の概要

今回の調査で出土した動物遺存体の大部分は、14世紀後半の遺物を上限とする溝2にともなう護岸状遺構とその覆土から出土した。大部分の動物遺存体は、14世紀の溝の肩の護岸と思われる大小の礫を配した面、およびその直上層から出土した。動物遺存体を包含する層は、下層で植物遺体を含むシルト混じり砂層で、低湿地的な環境下で堆積したものと思われる。また、溝2が人為的に一気に埋められたため、投棄されて散乱した動物遺存体が、地表上で風化し、腐朽することなしに埋没し、土中に保存されたのであろう。出土した大部分の動物遺存体は、埋土中で水漬けの状態であったため、保存はされたものの腐食が進み、一部の骨には、骨のリン分と地下水の鉄イオンが化合した藍鉄鉱(ピビアナイト)が析出し脆くなっており、全般的にも保存状態には恵まれない。また表面があれていいため、細かな解体痕が観察できたのは一部にとどまる。

同定できた試料はすべて哺乳類のもので、破片数をもとにするといヌ3点、ウマ104点、イノシシ5点、ニホンジカ83点、ウシ117点の計312点の3目5属5種が同定された(第1表)。これらは全て散乱状態で出土したもので、埋葬されたものは見られなかった。また、部位別に見ても完形のものは見られず、埋没後に土圧で割れた場合に見られるような接合できる例もないことから、付近で人為的に解体され、割られた後、投棄されたことが明らかであった。同定不能であった細片も骨の表面の特徴、元来の推定できる大きさや形状などから、上記のいずれかの種に含まれる可能性が高く、そうした細片の総重量は、同定できた破片の総重量が約5.6キログラムであったのに対して、全体の約40パーセントにあたる約4キログラムであった。

2) 種類ごとの検討

①イヌ

上腕骨および橈骨の骨幹部から遠位端と第三中足骨の3点が出土している。橈骨を例にとると、全長は不明であるが、骨幹部を比較すると縄文犬よりはるかに大きく、長谷部言人の分類による中級に属するだろう〔長谷部1952〕。弥生犬のなかでも亀井遺跡で出土した大型の個体が、さらに大きい個体である。同じ中世の広島県福山市の草戸千軒町遺跡でも、縄文犬以来、弥生犬を通じて徐々に大型化して現代日本犬につながる系譜をひく大型化したイヌが出土しているが〔茂原・松井1995a, 茂原・松井1995b〕、同じ瀬戸内でもあるが、縄文犬に比べてこのように大型化したイヌが中世では一般的だったのであろう。

橈骨には長軸にそって鋭利な刃物を近位部から遠位部に向かって振り下ろし、肉を削いだ時に骨にまではつた刃物傷が内側に残る。このような骨に残された傷の存在から、このイヌも食用のため解体された可能性が高い(第1図)。中世人がイヌを食用にした痕跡は、これまで草戸千軒町をはじめ多くの中世城郭、都市から明らかになっているが、本遺跡でもわずかな出土点数ながら、人為的な解体痕のあるイヌの例を加えることができた。

②イノシシ

遊離歯が2点、肩甲骨遠位部が2点、寛骨、中手骨または中足骨が各1点ずつ、計6点が出土している。

③ニホンジカ

破片数で83点と、ウシ、ウマに次いで多い。下顎骨右側が6点と最も多く、最小個体数6と算定できる。骨細工の材料に使われることの多い鹿角、中手骨、中足骨の出土数が少ないことから、ニホンジカはこの地の人々によって狩猟、解体され、角や中手骨、中足骨は売りに出されたと考えることができるだろう。草戸千軒町では、北部地域城南半部における土坑や溝から、鹿角細工、骨細工の廃材が多数発掘されており〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1994〕、付近に工房があったことがわかるが、若宮遺跡から出土したニホンジカのさまざまな部位の中でも、骨角器の材料となる鹿角、中手骨、中足骨の出土量の少なさは、そうした都市の骨細工職人へと搬出された可能性が高いだろう。

④ウシ

今回出土した動物遺存体の中でも最も多い出土量を示す。破片数117点のうち、遊離歯が84点と最多を占め、次いで上腕骨右側が11点、左側が9点、下顎骨右側が9点、距骨左側が9点、脛骨左側が8点と続く。したがって最小個体数は11個体を数える。

上腕骨遠位端には、解体時についたと見られる鉋状の鈍器で骨にまで達する傷が見られ、このウシが人為的に解体されたことを示す（第2図）。遊離した歯を元に死亡年齢を推定すると、第一前臼歯を元にとすると、7歳×1（個体、以下同じ）、8-9歳×2、9歳以下×1、9歳×2、13-14歳×1、16-17歳×1、20歳以上×1となる。特定の年齢層に集中することはない、やはり10歳前後から上の老齢に近い年齢層が多いことがわかる。

⑤ウマ

ウマは破片数全体で、104点出土し、そのうち65点が遊離した歯のエナメル質部分である。歯の他で部位別で最も多い部位は、脛骨の右側で4点を数え、最小個体数は4個体となる。遊離した臼歯の計測値から死亡年齢を推定すると、第三後臼歯を例にとると、推定5歳が1個体、9-10歳、11歳、12-13歳、14-15歳、15歳が各1個体と、特定の年齢層に集中することはないが、全体として10歳を越えた壮齢、老齢のウマが多かったと言える。また四肢骨に関しても、すでに骨端部での骨の成長の終了し、骨幹部と骨化化した例がほとんどで、幼、若馬は含まれていなかったと考えて良いだろう。

3) 考察

大阪湾北岸、特に六甲山系を背後に控えた阪神間に連なる扇状地および沖積地は、急な傾斜のため、多くの埋没河川が刻まれ、海浜部では流入する土砂のため浜堤、砂堆の形成が著しい。古代、中世ではそうした海岸線に沿って形成された浜堤の背後には、後背湿地がとれない、そのような環境は居住、耕作には適さず、遺跡の分布も少ない。それでも、その後背湿地に面した比較的高度の高い微高地には、古代・中世以来、漁村が営まれていたことが尼崎市金楽寺貝塚をはじめ、旧海岸線に沿って残る遺跡分布からわかる。若宮遺跡はそうした海浜部の遺跡の一つではあるが、海棲動物が出土しないことから、漁労が行われていた証拠はない。しかし、漁労が行われていたにもかかわらず、遺跡の保存状況により大型哺乳類の骨しか残り得ず、脆弱な魚骨は保存されなかったということも考えられる。遺物の出土状況から、この遺跡の付近が饅牛馬処理の際に生じる骨などの廃棄場として機能し、当時でも人気のない場所であったとも考えられる。少なくとも若宮遺跡を残した人々は、浜に近いこの付近で死んだウシやウマの解体に従事し、さらにニホンジカも処理し、時にイノシシも入手する生活を送っていたと考えられる。おそらく、処理場、およびそこから生じる多くの廃棄物は、まずイヌにより清掃され、その残滓が溝2に投入されたのであろう。中世において、都市をはじめとして、人の世の様々な穢れを浄めたイヌはまた、時として人々の食欲を満たすために殺されたことが、わずかに出土したイヌの腕骨からうかがえる。

こうした人々が、この遺跡の周辺で農業に従事していたのかどうかは、今回出土した他の生業関連遺物の検討や、遺跡内での今後の発掘調査が進むのを待たねばならない。しかし、居住や農業に適さず、遺跡の分布も疎らな浜地へ、中世になって人々が移り住んできたのは、人口増や開田によってだけでなく、浜地の背後の湿地に面した地が斃牛馬処理に従事する人々の居住、操業の場として選ばれた可能性が高いと思われる。頭蓋骨、歯、椎骨、四肢骨などの全身骨が、点在する大きな護岸用の礫の間から散乱状態で出土することから、解体された後、この場所に投棄され、さらに上から人為的に埋め立てられたと考えられる。

江戸時代には、「大抵、関東には馬多く牛少なし」（和漢三才図説）と言われ、西日本では牛が多いと言われてきた。しかし、古代以来の都城、都市遺跡や、溝、河川跡などの遺構から出土する大型動物は、一般にウマが多いことが今までの報告例からも言える。ところが本遺跡では、ウシが154点出土し、その最小個体数は11個体を数え、それに対してウマは104点が出土し、最小個体数では4個体にとどまる。このような散乱した出土状態では、実際にはその数倍から十数倍の個体数が埋没していたと考えられるが、少ない方が過大評価されるという最小個体数法の欠点を加味しても、実際にこの遺構に投棄されたウシ、ウマの比率は、ウシが多数を占める傾向に間違いのないと思われる。近年、報告されることが多くなりつつある、近畿地方を中心とする中世の「牛馬廃棄土坑」から出土した例では、ウマよりウシの方が多くことが明らかになりつつある。「牛馬廃棄土坑」とは、集落内で解体処理した牛馬の骨を他の廃棄物と共に一括して土坑に投棄し埋め戻した遺構で、特に近畿地方の中世の集落で多く見られる。たとえば大阪府貝塚市東遺跡では、15世紀の3基の土坑を中心に獣骨を埋納した遺構が検出されたが、いずれもウシがウマに対して卓越する〔前川2001〕。滋賀県守山市伊勢遺跡では、中世の溝に解体されたウシの骨が大量に出土した（松井実見、未報告）。また、滋賀県野洲町小篠原遺跡では、中世から近世を含む溝から1000点を超える大量の牛馬骨が出土しているが、この場合も、ウシ154点、ウマ128点、イヌ8点と、本遺跡と共通する特徴を持つ（野洲町教育委員会編 印刷中）。さらに、神戸市西区神出古窯跡群の中の土坑（8608T）でも鎌倉時代から室町時代にかけての、直径4メートルのすり鉢状の土坑から出土した動物遺存体は、やはり最小個体数でウシ7個体、ウマ3個体、ニホンジカ2個体、イノシシ2個体が出土する〔松井1989〕。ここではほとんどが焼けた骨であることから、陶器片などとともに出土する動物遺存体は、死体がそのまま投棄されたのではないことを示している。このようなことから、付近に廃棄物を投入できる河川が無い場合は、こうして土坑や溝を掘って処理したことが、上記の貝塚市東遺跡、滋賀県伊勢遺跡、小篠原遺跡などからも明らかであろう。

今回報告した若宮遺跡第34地点の発掘では、特に南北トレンチの護岸状遺構から大量の動物遺存体が出土したが、発掘区はそのごく一部にとどまるので、この護岸状遺構全体とその周辺にはどれほど多くのウシ、ウマの骨が埋没しているか想像も付かない。さらにこの遺跡が機能していた中世に、この護岸状遺構から川の流れに投入された骨などの廃棄物は、大部分は下流へと流され、そして海へと消えていったものと考えられる。このようなことから、今回の資料は保存状態があまり良くないものの、更なる発掘調査で斃牛馬処理などの社会的環境が順次明らかになっていく上で重要なものとなるであろう。

〔引用・参考文献〕

芦屋市 1971

『新修 芦屋市史 本巻』 芦屋市

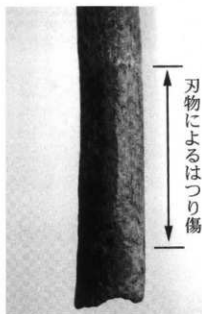
A. von den Driesch 1976

A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites *Peabody Museum Bulletin* Harvard University. 136pp.

- 前川浩一 2001 「東道跡の中世集落」『大阪の部族史通信』25号pp.2-6 (ただし, <http://blhrrr.org/hbhrri/BURAKUSI/25.htm>による)
- 松井 章 1989 「神出古窯跡群 土坑8008T2出土の動物遺存体」『神出1986』妙見山麓道跡調査会pp.86-92
- 茂原信生・松井 章 1995a 「原の辻道跡出土の動物遺存体」『原の辻道跡-轡鋒川流域総合整備計画に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書1』長崎県教育委員会pp.189-207.
- 茂原信生・松井 章 1995b 「草戸千軒町道跡出土の中世犬骨」『広島県草戸千軒町道跡発掘調査報告3-南部地北半部の調査』広島県草戸千軒町道跡調査研究所pp.289-312.
- 長谷部晋人 1952 「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁pp.145-150.
- 広島県草戸千軒町道跡調査研究所編 1994 「草戸千軒町道跡発掘調査報告書Ⅱ」438pp.18+115pls.



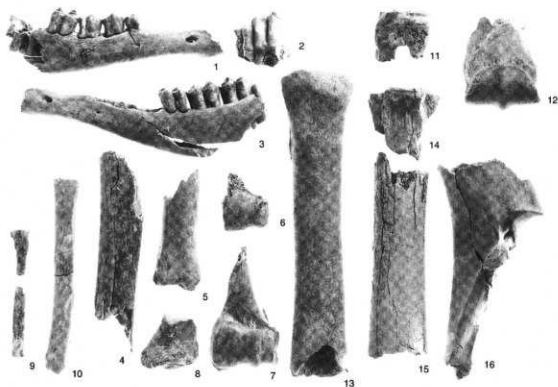
第1図 ウシ上腕骨への切痕



第2図 イヌ橈骨への切痕

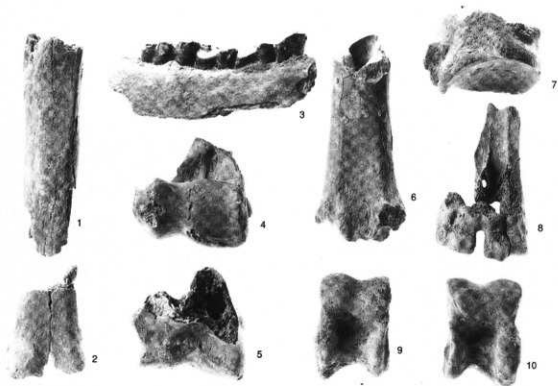
第1表 出土動物遺存体種名一覧

食肉目	Carnivora
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
奇蹄目	Perissodactyla
ウマ	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Artiodactyla
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>



第3図 出土動物遺存体 (1)

1: ニホンジカ・下顎骨 (右: $P_2 \sim M_2$), 2: ニホンジカ・ M_2 (右), 3: ニホンジカ・下顎骨 (左: $M_1 \sim M_2$), 4: ニホンジカ・中足骨 (右), 5: ニホンジカ・脛骨 (右), 6~7: ニホンジカ・上腕骨 (左), 8: イノシシ・肩甲骨 (左), 9: イヌ・第3中足骨 (左), 10: イヌ・腕骨 (右), 11: ウマ・ M_2 (右), 12: ウマ・中手骨 (左), 13~15: ウマ・中手骨 (右), 16: ウマ・尺骨 (右).



第4図 出土動物遺存体 (2)

1~2: ウシ・脛骨 (左), 3: ウシ・下顎骨 (右: $P_1 \sim M_2$), 4~5: ウシ・上腕骨 (右), 6: ウシ・脛骨 (左), 7: ウシ・肩甲骨 (左), 8: ウシ・中手骨 (左), 9: ウシ・距骨 (左), 10: ウシ・距骨 (右).

第2表 第34地点 出土獣骨種・部位別集計表

種	部位	左	右	計	種	部位	左	右	計
イヌ	上腕骨		1	1	ニホンジカ	肩甲骨	1	2	3
イヌ	腕骨		1	1	ニホンジカ	上腕骨	5	3	8
イヌ	中足骨(Ⅲ)	1		1	ニホンジカ	橈骨	3		3
ウマ	P ¹	2	1	3	ニホンジカ	尺骨	1		1
ウマ	P ²	1		1	ニホンジカ	中手骨		1	1
ウマ	P ³	1	1	2	ニホンジカ	寛骨		3	3
ウマ	P ⁴	1		1	ニホンジカ	大腿骨	4	2	6
ウマ	P ⁵ ・M ¹ のいずれか	8	10	18	ニホンジカ	跗骨	1	1	2
ウマ	M ¹	1	1	2	ニホンジカ	足根骨(果骨)		1	1
ウマ	L ₁	1		1	ニホンジカ	跖骨	2	3	5
ウマ	L ₂	1		1	ニホンジカ	中足骨	1	1	2
ウマ	L ₃		1	1	ニホンジカ	中趾骨			1
ウマ	P ₁		5	5	ウシ	側頭骨	3	1	4
ウマ	P ₂ ・M ₂ のいずれか	4	8	12	ウシ	後頭骨			1
ウマ	M ₂	4	5	9	ウシ	P ¹	1	1	2
ウマ	下顎骨	1		1	ウシ	P ²	1		1
ウマ	第1頸椎骨			2	ウシ	M ¹	7	4	11
ウマ	第2頸椎骨			1	ウシ	M ²	3	2	5
ウマ	椎骨			1	ウシ	M ³ またはM ⁴	2		2
ウマ	寛骨	1		1	ウシ	M ⁵	1	2	3
ウマ	肩甲骨	1		1	ウシ	dP ¹	1		1
ウマ	上腕骨	2	4	6	ウシ	L ₁	1	1	2
ウマ	橈尺骨	1		1	ウシ	L ₂	1		1
ウマ	尺骨		1	1	ウシ	P ₁		1	1
ウマ	中間手根骨	1		1	ウシ	P ₂	1	1	2
ウマ	中手骨	1	3	4	ウシ	M ₁	2	4	6
ウマ	大腿骨	2	1	3	ウシ	M ₂ またはM ₃		2	2
ウマ	跖骨	1	4	5	ウシ	下顎M ₂	1	7	8
ウマ	跗骨	3		3	ウシ	M ₃	3	4	7
ウマ	中足骨		3	3	ウシ	dP ₁	1		1
イノシシ	M ¹	1		1	ウシ	dP ₂		2	2
イノシシ	L ₁	1		1	ウシ	下顎骨	4	9	13
イノシシ	肩甲骨	2		2	ウシ	第二頸椎骨			1
イノシシ	中手・足骨			1	ウシ	腰椎			1
イノシシ	寛骨		1	1	ウシ	仙椎			1
ニホンジカ	側頭骨	1	1	2	ウシ	肩甲骨	2	1	3
ニホンジカ	側頭骨		2	2	ウシ	上腕骨	9	11	20
ニホンジカ	後頭骨			1	ウシ	橈骨	2	2	4
ニホンジカ	P ¹	1	2	3	ウシ	尺骨	1	1	2
ニホンジカ	P ²	1		1	ウシ	第2・3手根骨	1	1	2
ニホンジカ	M ¹ ?	1		1	ウシ	第4手根骨	2		2
ニホンジカ	M ¹ またはM ²		1	1	ウシ	中手骨	4	3	7
ニホンジカ	M ²	1		1	ウシ	寛骨	3	7	10
ニホンジカ	M ³	1		1	ウシ	大腿骨	6	3	9
ニホンジカ	dP ¹	1		1	ウシ	跖骨	8	5	13
ニホンジカ	L ₁	1		1	ウシ	跗骨	8	5	13
ニホンジカ	P ₁	2	1	3	ウシ	第2・3足根骨	1		1
ニホンジカ	P ₂	2	3	5	ウシ	第4・中心足根骨		1	1
ニホンジカ	P ₃		2	2	ウシ	中足骨(Ⅲ)	1	1	2
ニホンジカ	M ₁		1	1	ウシ	中足骨(Ⅳ)	2		2
ニホンジカ	M ₂	3		3	ウシ	中足骨	4	1	5
ニホンジカ	M ₃		2	2	ウシ	基節骨			4
ニホンジカ	下顎骨	3	7	10					

第3表 第34地点 出土獸骨一覽表(1)

トレンチ	酒類・土産	種	部位	部分	L	備考	主要計量値				
							L	B	H	Bd	
東西	8層	イヌ	上腕骨	遠位端	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	イヌ	鎖骨	骨幹?遠位	R	切痕	-	-	-	-	
東西	8層	イヌ	中足骨	趾、近節	L		70.0	-	-	9.1 8.7	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛11	L		13.9	12.0	-	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛11	L		15.5	10.0	-	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛11	R		12.3	9.9	-	-	
南北	陥没状遺構之層上部(南東区)	ウマ	遠端部	上脛12	L		-	-	-	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛13	L		12.6	11.1	-	-	
南北	陥没状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛12	R		9.6	14.7	-	-	
東西	8層	ウマ	遠端部	上脛P2	L		26.7	21.3	43	-	
東西(中央部)	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		26.7	26.6	46	-	
南北(南端部)	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		25.5	27.6	31	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		26.3	23.2	60+	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		23.0	21.1	37	-	
東西	8層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		24.6	24.8	36	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		23.3	24.8	32	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		23.2	24.8	35	-	
東西(中央部)	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		26.3	27.6	47	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		26.9	25.5	70+	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		24.8	23.7	77	-	
南北(南端部)	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		26.5	26.0	33	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		24.4	22.0	65	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		25.1	24.3	68	-	
南北	遠岸状遺構①、③層南西北ケル内	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		24.3	22.9	43	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		22.0	23.6	33	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	R		26.6	26.8	36	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛P3-M2のいずれか	L		25.7	24.5	41	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛M3	L		26.9	22.6	42	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛M3	L		22.4	18.3	56	-	
南北	陥没状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛後臼歯	L		21.9	23.1	25	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛後臼歯	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	遠端部	上脛臼歯	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	上脛臼歯	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層南西北ケル内	ウマ	遠端部	上脛臼歯	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛11	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛12	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛13	R		10.1	13.8	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層(南東区)	ウマ	遠端部	下脛P2	R		33.6	16.8	33	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	遠端部	下脛P2	R		29.6	16.0	18	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	遠端部	下脛P2	R		29.5	16.7	24	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛P2	R		32.2	13.4	28	-	
南北	遠岸状遺構①、③層(南東区)	ウマ	遠端部	下脛P2	R		27.9	14.6	64+	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	L		26.6	13.3	33	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	L		27.0	15.5	58+	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	L		24.0	15.2	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	L		24.1	14.0	52	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		23.0	17.8	41	-	
東西	8層	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R	切痕	25.6	14.5	46+	-	
南北(南端部)	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		23.9	16.6	40+	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		26.5	14.7	50	-	
南北	遠岸状遺構①、③層(南東区)	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		27.5	18.9	54	-	
南北	遠岸状遺構之層上部ケル内	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		25.3	14.7+	45+	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		26.7	17.3	33	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛P3-M2のいずれか	R		27.3	14.5	37+	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	下脛M3	L		26.8	11.8	64	-	
東西	遠岸状遺構之層上部	ウマ	遠端部	下脛M3	L		26.8	13.8	-	-	
東西	8層	ウマ	遠端部	下脛M3	L		26.2	15.3	43	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		26.4	12.8	35	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		26.4	14.7	16	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		29.5	13.2	27	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		30.4	13.3	14	-	
東西(西端部)	8層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	下脛M3	R		-	-	-	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウマ	遠端部	下脛臼歯	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	遠端部	臼歯	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	遠端部	臼歯	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	下顎骨	下顎角	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	下顎骨	下顎角	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層ケル内	ウマ	下顎骨	内髌(M2-M3)	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	下顎骨	内髌	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	下顎骨	遠位	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	頸椎	第1	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	頸椎	第1、前関節部左	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	頸椎	第2	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	椎骨・椎弓	椎骨・椎弓	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(南東区)	ウマ	寛骨	腰骨(近位)	L	切痕	-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	肩甲骨	遠位?遠位端	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	上腕骨	遠位	-		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	上腕骨	遠位	L		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部	ウマ	上腕骨	遠位?遠位	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構之層上部(北東区)	ウマ	上腕骨	遠位	R		-	-	-	-	
南北	遠岸状遺構①、③層	ウマ	上腕骨	遠位端	R		-	-	-	-	

第4表 第34地点 出土獣骨一覧表 (2)

トレンチ	遺構・土層	種	部位	部分	L R	備考	主要計測値					
							L	B	H	Bp	Bd	
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	肋骨	遠位?遠位端	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(北西区)	ウマ	椎尺骨	骨幹	R	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ウマ	尺骨	近位?骨幹	R	DPA(54.26)	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ウマ	中腕手関節骨	-	L	-	-	-	-	-	-	-
東西	8層	ウマ	中手骨	遠位?遠位端	R	-	-	-	-	-	-	-43.4
南北	建岸状遺構之壁面上部	ウマ	中手骨	遠位?遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	-45.1
東西(西端部)	溝2土2-①層	ウマ	中手骨	近位端?遠位	R	穿孔	-	-	-	-	-	-44.3
東西	溝1土1-①?④層	ウマ	中手骨	近位端?遠位	R	突痕	-	-	-	-	-	-40.8
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ウマ	大腸骨	骨頭	R	突痕?	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ウマ	大腸骨	骨頭	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	大腸骨	近位?骨幹	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	肩胛骨	骨幹	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	肩胛骨	骨幹	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	腰骨	骨幹?遠位	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面内	ウマ	腰骨	遠位端	R	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ウマ	腰骨	遠位?遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(南東区)	ウマ	肋骨	近位端	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面(南西区)	ウマ	肋骨	近位端	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面(南西区)	ウマ	肋骨	近位端	L	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ウマ	中足骨	遠位?遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	-39.6
南北	建岸状遺構之壁面上部	ウマ	中足骨	近位端?遠位	R	突痕	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面北側内	ウマ	中足骨	近位端・近位	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ウマ	中足骨	骨幹	-	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ウマ?	中足骨?	骨幹	L	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ウマ?	腿骨近位	腿骨近位	L	被擦痕	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ウマ?	後肢骨(尺)	骨幹	R	被擦痕(P)	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ウマ?	肋骨	骨幹	L	翼骨被擦痕	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	イノシシ	遊離歯	上顎M2	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	イノシシ	遊離歯	下顎I1	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	イノシシ	磨牙骨	遠位端	L	LQ(34+), 切痕	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	イノシシ	磨牙骨	遠位端	R	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	イノシシ	中手・足骨	遠位?遠位端	L	-	-	-	-	-	-	9.0
南北	建岸状遺構之壁面	イノシシ	趾骨	趾骨, 骨幹	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	イノシシ	趾骨	趾骨	-	切痕	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	前肢骨	L 切痕	-	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	前肢骨	+角突起	R	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	後肢骨	骨幹突起	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	後肢骨	骨幹突起	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	後肢骨	骨幹突起後肢骨近位	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	上顎P3	R	11.6 16.2	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	近位端	上顎P3	R	11.4 16.3	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面南側北側内	ニホンジカ	近位端	上顎P3	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	上顎M1	L	11.0 15.3	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(北西区)	ニホンジカ	近位端	上顎M1?	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	上顎M1/2	R	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ニホンジカ	近位端	上顎M2	L	19.4 18.6	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	上顎M2	R	18.2 19.0	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	上顎P4	-	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝2土2-①層	ニホンジカ	近位端	上顎P4	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(北東区)	ニホンジカ	近位端	下顎I2	L	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P2	L	8.9 6.2	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	下顎P2	L	9.1 6.2	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P2	R	9.7 6.8	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P3	L	13.4 7.7	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P3	L	13.7 6.7	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	下顎P3	R	12.3 7.4	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P3	R	14.0 7.8	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ニホンジカ	近位端	下顎P3	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ニホンジカ	近位端	下顎P4	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P4	R	13.6 9.4	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎P4	R	14.7 9.2	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	近位端	下顎M1	R	17.2 10.4	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	下顎M2	L	16.5 9.8	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	下顎M3	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	下顎M3	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	下顎M3	L	23.8 10.6	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	下顎M3	R	24.8 11.7	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	後臼歯	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	近位端	臼歯	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部	ニホンジカ	近位端	臼歯	-	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(北西区)	ニホンジカ	下顎骨	M2-3	L	M2-3(44.31), 切痕	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面上部(北東区)	ニホンジカ	下顎骨	P2-P4	R	P2-4(35.89)	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	下顎骨	P3-P4	R	P3(12.8)X7.7/P4(5.1)X13.1	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	下顎骨	P4-M3	R	M1-3(53.73)	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	下顎骨	下顎体, M1-3	L	M1-3(60.51), 切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	下顎骨	下顎体, P2-M3	R	P2-M3(36.32), M1-3(56.51)	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	下顎骨	頰部突起	-	-	-	-	-	-	-	-
東西	溝1土1-①層	ニホンジカ	下顎骨	頰部突起, 近位端, 近位	R	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ニホンジカ	下顎骨	頰部突起	R	-	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	下顎骨	頰部 P2 付近	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	磨牙骨	磨牙近	L	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面	ニホンジカ	磨牙骨	遠位?遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8層	ニホンジカ	磨牙骨	遠位?遠位端	R	-	-	-	-	-	-	-
南北	建岸状遺構之壁面(南東区)	ニホンジカ	上肢骨	近位	R	切痕	-	-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝1土1-①?④層	ニホンジカ	上肢骨	近位	L	-	-	-	-	-	-	-

第5表 第34地点 出土獣骨一覧表(3)

トレンチ	遺構・土層	種	部位	部分	L R	備考	主要計測値					
							L	B	H	Bp	Bd	
東西(西端部)	溝1 埋土1-①?④層	ニホンジカ	上肢骨	骨幹?遠位端	L		-	-	-	-	-	
南北(南端部)	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	上肢骨	遠位?遠位端	L	切痕	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	南東区、北東区yafan上	ニホンジカ	上肢骨	清寒部分	L	BT(35.66)、切痕	-	-	-	-	-	40.5
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	上肢骨	遠位?遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	上肢骨	遠位端	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	上肢骨	遠位端	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	肋骨	近位端・近位	L		-	-	-	-	-	33.2
東西	溝2 埋土2-①層	ニホンジカ	肋骨	近位端?骨幹	L		-	-	-	-	-	39.0
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	肋骨	遠位?遠位端	L		-	-	-	-	-	33.2
南北	竪岸状遺構之層上部(南東区)	ニホンジカ	尺骨	近位?骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	中手骨	近位端	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	中手骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	中手骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	寛骨	腰骨	R	切痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	寛骨	腰骨	R		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ	寛骨	腰骨	R		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ	大腸骨	清寒部分	L		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ	大腸骨	内側部	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	南東区、北東区yafan上	ニホンジカ	大腸骨	遠位	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	南東区、北東区yafan上	ニホンジカ	大腸骨	骨幹P2	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ニホンジカ	大腸骨	近位	R		-	-	-	-	-	
東西	溝2 埋土2-①層	ニホンジカ	大腸骨	近位	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	脛骨	骨幹?遠位	L		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ	脛骨	近位・前脛付近	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層(南東区)	ニホンジカ	脛骨	近位?骨幹	R	切痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	脛骨	骨幹?遠位	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	脛骨	遠位端	R	印き痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ニホンジカ	踵骨	踵骨	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ニホンジカ	踵骨	近位端・近位	R	切痕	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1 埋土1-①?④層	ニホンジカ	足趾骨	足趾骨	R	切痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層yafan内	ニホンジカ	中足骨	近位端・近位	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1 埋土1-①?④層	ニホンジカ	中足骨	近位?骨幹	L		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ	中足骨	近位端	-		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ニホンジカ?	中足骨	骨幹?遠位端	-		-	-	-	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ウシ	側頭骨	角突起	R	切痕、咬痕	-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層南東yafan内	ウシ	側頭骨	角突起	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	側頭骨	側頭突起	L	切痕	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1 埋土1-①?④層	ウシ	側頭骨	側頭付近	R		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1 埋土1-①?④層	ウシ	側頭骨	側頭付近	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	遊離歯(L)	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎P2	L		16.0	16.0	18	-	-	
南北	竪岸状遺構之層南東yafan内	ウシ	遊離歯	上顎P2	L		17.2	17.7	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ウシ	遊離歯	上顎P3	L		17.5	-	-	-	-	
南北(南端部)	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1	L		30.0	19.3	41	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1	L		27.4	20.2	24	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ウシ	遊離歯	上顎M1	L		30.3	21.4	40	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ウシ	遊離歯	上顎M1	L		27.8	18.9	38+	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(南東区)	ウシ	遊離歯	上顎M1	L		27.3	21.8	10	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M2	L		29.9	24.1	18	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1	R		27.5	20.6	39	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1	R		29.0	21.0+	36+	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1	R		27.5	21.4	38	-	-	
東西(中央部)	溝2 埋土2-①層	ウシ	遊離歯	上顎M1	R		30.1	21.9	46	-	-	
南北(南端部)	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M2	L		-	-	52	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M2	L		-	-	52	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M2	L		30.4	21.1	41	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M2	R		28.2	22.5	40	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ウシ	遊離歯	上顎M2 または2	R		30.0	21.7	41+	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎M1 または2	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(北東区)	ウシ	遊離歯	上顎M1 または2	L		-	-	-	-	-	
東西	8層	ウシ	遊離歯	上顎M3	L		26.6	21.5	39	-	-	
南北	竪岸状遺構之層	ウシ	遊離歯	上顎M3	R		26.3	20.8	38	-	-	
南北	竪岸状遺構之層南東yafan内	ウシ	遊離歯	上顎M3	R		28.6	23.2	44+	-	-	
東西	溝1 埋土1-④層	ウシ	遊離歯	上顎P4	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層南東yafan内	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層南東yafan内	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部(南東区)	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層(南東区)	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎T1	L		11.9	7.8	15	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎T1	R		11.8	7.7	15	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎T2	L		8.8	8.2	12	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎P2	L		13.1	8.1	15	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	遊離歯	下顎P3	L		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎P3	R		21.5	11.7	13	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎M1	R		27.3	15.2	40	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎M1	L		31.1	15.4	56	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎M1	R		-	-	-	-	-	
南北	竪岸状遺構之層上部	ウシ	遊離歯	下顎M1	R		-	-	-	-	-	

第6表 第34地点 出土獣骨一覧表(4)

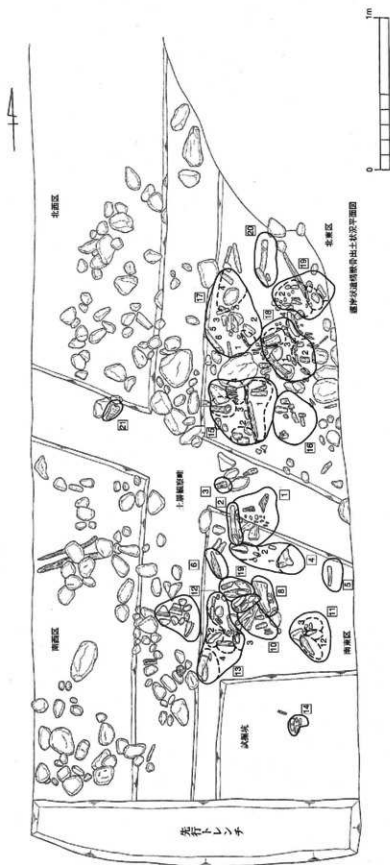
トレンチ	遺構・土層	種	部位	部分	L R	備考	主要計測値				
							L	B	H	Bp	Bd
南北	崖岸状遺構②之南(南西区)	ウシ	遊離歯	下顎 M1	R		28.4	16.0	32	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 M1	R		23.4	13.8	22	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南西区)	ウシ	遊離歯	下顎 M1 または 2	R		31.5	13.4	46	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北西区)	ウシ	遊離歯	下顎 M1 または 2	R		30.9	12.9	44	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		31.6	16.7	51	-	-
東西	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		30.8	13.5	48	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		31.6	14.9	46	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南西区)	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		32.7	15.3	56	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		32.5	15.4	53	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 M2	R		28.6	15.5	42	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北東区)	ウシ	遊離歯	下顎 M3	L		34.2	12.4	40	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 M3	L		34.3	13.9	26	-	-
南北(南東部)	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎 M3	R		38.8	15.5	27	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎 M3	R		37.0	15.9	15	-	-
東西	8 層	ウシ	遊離歯	下顎 M3	R		37.4	14.0	43	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 M3	R		41.3	16.2	31	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 dP2	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎 dP4	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎 dP4	R		35.5	14.1	21	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎臼歯	R		-	-	-	-	-
東西(中央部)	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	遊離歯	下顎臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	下顎臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	下顎臼歯	-		-	-	-	-	-
東西	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	遊離歯	下顎臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	後臼歯	-		-	-	-	-	-
南北(南東部)	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	臼歯	-	3個	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北東区)	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北西区)	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南南北ケル内	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南(南東区)	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南ケル内	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	遊離歯	臼歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	下顎骨	P4-M3	R	M1-3(76.44)	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	下顎骨	(M1?)	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	下顎骨	オトガイ孔付近	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	下顎骨	オトガイ孔付近	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	下顎骨	下顎角・下顎枝	L	切痕	-	-	-	-	-
東西(西端部)	8 層	ウシ	下顎骨	顎関節部	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南西区)	ウシ	下顎骨	顎関節部	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	下顎骨	顎関節部周辺	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	下顎骨	顎関節部周辺	R		-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝 1 埋土 1-①?④層	ウシ	下顎骨	顎関節付近(近位離臼歯)	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	下顎骨	結合付近	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	下顎骨	結合付近	L	切痕	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	下顎骨	歯根	R		-	-	-	-	-
南北(西端部)	溝 1 埋土 1-①?④層	ウシ	頰骨	第二、左歯	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	頰骨	歯根	-		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	頰骨	歯根	-		-	-	-	-	-
東西(西端部)	8 層	ウシ	肩甲骨	遠位?遠位端	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	肩甲骨	遠位端?骨付	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	肩甲骨	遠位?遠位端	L		-	-	-	-	-
東西(西端部)	溝 1 埋土 1-①?④層	ウシ	上肢骨	遠位	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	上肢骨	遠位	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	上肢骨	骨幹?遠位	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北西区)	ウシ	上肢骨	骨幹	L		-	-	-	-	-
東西	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	上肢骨	骨幹	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南ケル内	ウシ	上肢骨	骨幹?遠位	L	切痕	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	上肢骨	骨幹	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	上肢骨	骨幹	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	上肢骨	骨幹	L		-	-	-	-	-
東西	8 層	ウシ	上肢骨	遠位	R	切痕	-	-	-	-	-
東西	8 層	ウシ	上肢骨	遠位	R		-	-	-	-	-
東西	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	上肢骨	遠位	R		-	-	-	-	-
東西	溝 1 埋土 1-④層	ウシ	上肢骨	遠位部分	R	BT(66.534)	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(北東区)	ウシ	上肢骨	骨幹	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部	ウシ	上肢骨	遠位?遠位端	R	BT(62.15) 切痕	-	-	-	-	66.7
南北	崖岸状遺構②之南上部(北西区)	ウシ	上肢骨	遠位	R	切痕	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南ケル内	ウシ	上肢骨	遠位?骨幹	R		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	上肢骨	遠位	R	切痕	-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②、③層	ウシ	上肢骨	遠位	R		-	-	-	-	-
東西	溝 2 埋土 2-①層	ウシ	上肢骨	大行筋粗面付近	-		-	-	-	-	-
東西(西端部)	8 層	ウシ	脛骨	外側(骨幹?遠位)	L		-	-	-	-	-
東西(西端部)	8 層	ウシ	脛骨	内側(骨幹?遠位)	L		-	-	-	-	-
南北	崖岸状遺構②之南上部(南東区)	ウシ	脛骨	骨幹	R		-	-	-	-	-

第7表 第34地点 出土獣骨一覧表(5)

トレンチ	通称・土層	種	部位	部分	L R	備考	主要計測値					
							L	B	H	Bp	Bd	
東西	8層	ウシ	肋骨	骨幹	R?		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	肋骨	遠位端	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	尺骨	近位端・近位	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	尺骨	近位	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	手根骨	第2-3	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	手根骨	第2-3	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	手根骨	第4	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	手根骨	第4	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	中手骨	近位端?骨幹	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	中手骨	遠位?遠位端	L		-	-	-	-	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウシ	中手骨	近位端?骨幹	L	切痕	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中手骨	近位端	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中手骨	近位端	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中手骨	近位端	R		-	-	-	-	-	
東西	溝2埋土2-①層	ウシ	中手骨	近位端	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中手骨	近位?骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(北東区)	ウシ	中手骨	骨幹	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中手骨	遠位端	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	寛骨	肩胛(骨幹)、寛骨臼	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	寛骨	肩胛、寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	寛骨	肩胛、寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
東西	溝1埋土1-①層	ウシ	寛骨	肩胛	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	寛骨	恥骨(骨幹)、寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	寛骨	肩胛、寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	寛骨	肩胛(骨幹)	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	寛骨	寛骨臼	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	寛骨	寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	寛骨	寛骨臼	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	大腿骨	骨頭	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(北東区)	ウシ	大腿骨	骨頭	L		-	-	-	-	-	
東西	溝1埋土1-①層	ウシ	大腿骨	骨頭	R	切痕、被熱痕	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	大腿骨	骨頭	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	大腿骨	骨頭	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	大腿骨	骨頭	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	大腿骨	骨頭	-		-	-	-	-	-	
東西	8層	ウシ	大腿骨	小転子付近	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	大腿骨	骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	大腿骨	遠位部分	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	大腿骨	遠位端	R	切痕	-	-	-	-	-	52.6
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	大腿骨	遠位端	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1埋土1-①②層	ウシ	肋骨	骨幹?遠位端	L	切痕	-	-	-	-	-	42.5
東西	8層	ウシ	肋骨	骨幹?遠位	R	切痕	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	肋骨	近位端	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	肋骨	腋窩部付近	L	切痕	-	-	-	-	-	
東西	溝2埋土2-①層ヤル内	ウシ	脛骨	骨幹	L		-	-	-	-	-	
東西	溝2埋土2-②層	ウシ	脛骨	骨幹	L	切痕	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	脛骨	骨幹	L	切痕	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	脛骨	骨幹	L	GLm(66.94)	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	脛骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	脛骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(北東区)	ウシ	脛骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(北東区)	ウシ	脛骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	距骨	内翼、近位端?骨幹	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	ウシ	距骨		R	GLl(65.33), GLm(60.04), Dc(35.62), Dm(35.72)	-	-	-	-	-	41.1
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	距骨		L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	距骨		L	切痕	-	-	-	-	-	42.7
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	距骨		L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	距骨	完形	L	切痕, GLl(63.18), GLm(59.02)	-	-	-	-	-	43.5 40.4
東西	溝1埋土1-①層	ウシ	距骨	骨幹?遠位	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	距骨		L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	距骨		R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	距骨		R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	踵骨	近位?骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	踵骨	近位?骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	踵骨	近位?骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	踵骨	骨幹	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	足根骨	第2-3	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	足根骨	第4・中心足根骨	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	Ⅲ(近位?骨幹)	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	Ⅲ(骨幹)	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	Ⅳ、近位端?骨幹	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	Ⅳ	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	中足骨	骨幹?遠位	L		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	遠位	L		-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1埋土1-①②層	ウシ	中足骨	遠位?遠位端	L	突痕?	-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層ヤル内	ウシ	中足骨	遠位端	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	中足骨	近位端	R		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層	ウシ	中足骨	骨幹	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部	ウシ	中手・足骨	遠位端	-		-	-	-	-	-	
南北	遺葬状遺構之層上部(南東区)	ウシ	基節骨	完形	-		-	-	-	-	-	
東西	溝1埋土1-①層	ウシ	基節骨	近位端	-		-	-	-	-	-	
東西	溝1埋土1-②層	ウシ	基節骨	近位端	-		-	-	-	-	-	

第8表 第34地点 出土獸骨一覽表(6)

トレンチ	遺構・土層	種	部位	部分	L R	備考	主要計測値				
							L	B	H	Bp	Bd
東端	溝2様式2-①層	ウシ	基軸骨	近位頭、近位	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	ウシ?	下咽骨	基椎	-	-	-	-	-	24.7	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウシ?	距骨	遠位端	R	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	ウシ?	末節骨?	-	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウシニキングス	跗骨	臼歯	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウシニキングス	跗骨	肋骨、近位頸、近位	-	-	-	-	-	切痕	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	中手、足骨	湯炊造	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	蹄端骨	臼歯	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘ケル内	ウマノクシ	椎骨	横突	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘(南東区)	ウマノクシ	椎体	椎体	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	肩甲骨	翼前縁	-	-	-	-	-	-	
東西	8層	ウマノクシ	上腕骨	遠位部	L	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	上腕骨	遠位部	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	上腕骨	遠位部	L	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	ウマノクシ	大腿骨?	髌骨	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	跗骨	-	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	椎体	切痕	-	-	-	-	-	-	
東西	8層	不明	椎骨	椎体、椎窩	-	-	-	-	-	-	
東西	8層	不明	椎骨	椎體	-	-	-	-	-	-	
東西	8層	不明	椎骨	椎體	-	-	-	-	-	-	
東西	溝1様式1-④層	不明	椎骨	椎體	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	不明	椎骨	-	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	不明	椎骨	-	-	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	溝1様式1-①④層	不明	趾骨	骨刺	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	趾骨	骨刺	-	-	-	-	-	-	
東西	溝1様式1-④層	不明	上肢骨	湯釜部分	-	-	-	-	-	-	
東西	8層	不明	腕骨?	-	-	-	-	-	-	-	
東西	溝1様式1-④層	不明	大腿骨	骨頭	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	大腿骨	大腿骨頭	-	-	-	-	-	-	
南北	溝岸状遺構芝罘(南東区)	不明	趾骨?	骨刺	-	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	不明	骨片	湯釜蓋	-	-	-	-	-	-	
東西(中央部)	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	-	
東西(西端部)	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	62.6g	
東西(西端部)	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	87.0g	
東西(西端部)	溝1様式1-①⑦④層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	144.8g	
東西	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	25.0g	
東西	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	52.6g	
東西	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	19.9g	
東西	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	32.0g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	20.0g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	36.0g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	10.0g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	38.7g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	31.7g	
東西(南端部)	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	21.0g	
東西(南端部)	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	40.7g	
南北(南端部)	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	29.2g	
南北(南端部)	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	3.6g	
東西	溝1様式1-④層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	89.6g	
東西	溝1様式1-④層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	64.0g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	2.4g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	38.9g	
東西	溝2様式2-①層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	10.7g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	22.4g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	11.5g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	8.1g	
東西	溝1様式1-④層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	27.7g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	5.6g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	29.8g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	29.8g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	8.6g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	81.0g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	61.4g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	28.2g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	32.7g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	18.7g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	6.3g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	18.0g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	41.8g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	38.1g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	80.2g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(南東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	19.0g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	31.4g	
南北	溝岸状遺構芝罘上部(北東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	37.0g	
東西	8層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	4.5g	
東西	溝2様式2-①層ケル内	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	10.1g	
東西	溝2様式2-②層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	2.9g	
東西	溝2様式2-②層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	31.9g	
南北	溝岸状遺構芝罘	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	4.3g	
南北	溝岸状遺構芝罘(南東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	46.2g	
南北	溝岸状遺構芝罘南北ケル内	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	11.1g	
南北	溝岸状遺構芝罘(南東区)	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	20.2g	
南北	溝岸状遺構芝罘ケル内	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	236.8g	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	1527.3g	
南北	溝岸状遺構②、③層	不明	骨片	-	-	-	-	-	-	628g	



第5図 出土獣骨位置圖 (数字は取り上げ番号)



第6図 動物遺存体の同定作業風景 (1)
(奈良文化財研究所 古環境研究室)



第7図 動物遺存体の同定作業風景 (2)
(奈良文化財研究所 古環境研究室)



第8図 動物遺存体の同定作業風景 (3)
(奈良文化財研究所 古環境研究室)

報告書抄録

ふりがな	わかみやいせき (だい3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34ちてん) はつく つちょうさがいようほうこくしよ
書 名	若宮遺跡 (第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点) 発掘調査概要報告書
副 書 名	若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果
巻 次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第38集
編 著 者 名	竹村忠洋(編) 森岡秀人・三輪晃三・永光 寛・山田清朝・服部 寛・若林純也・辻 康男・ 坂田典彦・佐藤隆春・松井 章・宮路淳子・藤田正勝
編 集 機 関	芦屋市教育委員会
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL.0797-31-9066 FAX.0797-38-2089
発行年月日	2002年(平成14年)3月31日

よりがな 所収遺跡名		わかみやいせき 若宮遺跡（第3地点）		確認調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
				発掘調査担当者 三輪晃三・永光 寛			
よりがな 所 在 地		ひょうごけんあしやしわかみやちよう 兵庫県芦屋市若宮町61・61-1・62-10・62-11・62-15・62-16・62-17番地					
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 43' 39.1"	135° 19' 1.5"	(確認) 19970724	(確認) 28.75㎡	共同住宅建設	
28206	WM 3			(発掘) 19971013～19971205	(発掘) 235.0㎡		
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
若宮遺跡	集落跡 耕作地跡	縄文・中世	土器群・流路・ピット・竪穴	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器・瓦・土鍾・石器・石製品	・縄文時代晩期後半の土器群を検出。 ・中世の耕作面を検出。		

所収遺跡名 若宮遺跡 (第4地点)		発掘調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町61・61-1・62-10・62-11・62-15・62-16・62-17番地					
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号				
28206	WM4	34° 43' 39.0"	135° 19' 1.0"	19981019～19981112	140.0㎡
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮遺跡	集落跡 耕作地跡	縄文・弥生・中世	土器溜まり・流 路・竪穴住居跡・ 土坑・ピット・ 溝・塋痕	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・瓦 器・陶器・磁器・製塩 土器・埴輪・瓦・石 器・石製品	・縄文時代晩期後半の土器群 を検出。 ・弥生時代中期初頭の竪穴住 居跡を5棟検出。

所収遺跡名 若宮遺跡 (第10-1地点)		確認調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町33-1番地他22筆		発掘調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号				
28206	WM10-1	34° 43' 36.4"	135° 19' 1.1"	(確認) 19980818-19-24 (発掘) 19990209～19990312	(確認) 13.1㎡ (発掘) 415.0㎡
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮遺跡	耕作地跡	中世	耕作溝・畦畔・土 坑・流路・塋痕	刀装具・縄文土器・弥 生土器・土師器・須恵 器・瓦器・陶器・磁 器・埴輪・瓦・土師・ 石製品・獣骨	・中世の耕作溝や畦畔などを 検出。 ・中世の刀装具(柄頭・鞘尻) が出土。 ・中世の獣骨が出土。

所収遺跡名 若宮遺跡 (第10-2地点)		確認調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町33-1番地他22筆		発掘調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号				
28206	WM10-2	34° 43' 36.8"	135° 19' 1.8"	(確認) 19980818-19-24 (発掘) 19990426～19990531	(確認) 13.1㎡ (発掘) 147.2㎡
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮遺跡	耕作地跡	中世	溝・塋痕	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・瓦 器・陶器・磁器・埴輪	中世の耕作面を検出。

所収遺跡名		若宮遺跡（第11地点）		確認調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
所在地		兵庫県芦屋市若宮町47-1番地の一部、47-3番地の一部、48-1番地の一部、48-2番地の一部		発掘調査担当者 山田清朝・服部 寛			
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 43' 37.9"	135° 19' 1.5"	(確認) 19980817・18	(確認) 12.0㎡	街区内道路整備	
28206	WM11			(発掘) 19990524～19990610	(発掘) 43.0㎡		
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
若宮遺跡	墓 跡 耕作地跡	縄文・弥生・古代・ 中世	溝	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・瓦器	・縄文時代晩期後半の包含層 を検出。 ・弥生時代後期の溝は方形周 溝墓の可能性がある。		

所収遺跡名 しゅくしゅういせき		わかみやいせき 若宮遺跡（第16－1地点）		確認調査担当者 森岡秀人・若林純也			
所在地 しゅくしゅういせき		ひょうごけんあしやしわがみやちやう 兵庫県芦屋市若宮町63-28番地他		発掘調査担当者 森岡秀人・若林純也			
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 43' 38.8"	135° 18' 58.6"	(確認) 19990128	(確認) 3.9㎡	換地用地における個人住宅建設	
28206	WM16－1			(発掘) 19990201～19990208	(発掘) 43.88㎡		
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
若宮遺跡	集落跡 耕作地跡	縄文・中世	ピット群・竪痕	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・瓦 器・陶器・磁器	・縄文時代晩期後半の包含層 を検出。 ・中世のピット群・竪痕を検 出。		

所収遺跡名 しうしゆいせき		若宮遺跡 (第16-2 (1)地点) わかみやいせき		確認調査担当者 森岡秀人・若林純也			
所在地 しうじがち		兵庫県芦屋市若宮町63-2番地他 ひょうごけんあしやしわかみやちやうばんちほか		発掘調査担当者 山田清朝・服部 寛			
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 43' 38.3"	135° 18' 57.9"	(確認) 19990309～19990311	(確認) 9.9㎡	街区内道路整備	
28206	WM16-2(1)			(発掘) 19990524～19990610	(発掘) 36.0㎡		
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項		
若宮遺跡	集落跡 耕作地跡	中世	畦畔・溝・河道	縄文土器・土師器・須 恵器・瓦器・陶器・磁 器	・中世の水田跡を検出。 ・中世に埋没した河道を検 出。		

所収遺跡名 若宮遺跡 (第16-2(2)地点)		確認調査担当者 森岡秀人・若林純也 発掘調査担当者 森岡秀人・辻 康男			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町63-2番地他					
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号	34° 43' 38.8"	135° 18' 58.1"	(確認) 19990309~19990311	(確認) 9.9㎡
28206	WM16-2(2)			(発掘) 19991001~19991015	(発掘) 78.0㎡
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
若宮遺跡	耕作地跡	弥生・中世	土坑・ピット・溝・集石遺構・耕作地段差	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器	・弥生時代～古代の後背湿地を検出。 ・中世の水田跡を検出。

所収遺跡名 若宮遺跡 (第16-3地点)		確認調査担当者 森岡秀人・若林純也 発掘調査担当者 森岡秀人・辻 康男			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町63-5番地他					
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号	34° 43' 38.6"	135° 18' 57.4"	(確認) 19990309~19990311	(確認) 9.9㎡
28206	WM16-3			(発掘) 19990817~19990829	(発掘) 22.8㎡
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
若宮遺跡	耕作地跡	弥生・古墳・古代・中世	畦畔・溝	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器	中世の水田跡を検出。

所収遺跡名 若宮遺跡 (第17地点)		確認調査担当者 森岡秀人・若林純也 発掘調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋			
所在地 兵庫県芦屋市若宮町32番地他1筆					
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積
市町村	道路番号	34° 43' 36.9"	135° 19' 23"	(確認) 1990216・17	(確認) 22.35㎡
28206	WM17			(発掘) 1990426~1990531	(発掘) 100.1㎡
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
若宮遺跡	耕作地跡	中世	溝	銅銭(寛永通宝)・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・石製品	中世の耕作面を検出。

所収遺跡名		若宮遺跡 (第25地点)		確認調査担当者 森岡秀人・竹村忠洋	
				発掘調査担当者 山田清朝・服部 寛	
所在地		兵庫県芦屋市若宮町72番地他8筆			
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
山町村	遺跡番号	34° 43' 36.3"	135° 18' 59.6"	(確認) 19990427 (第18地点)	(確認) 6.3㎡
28206	WM25			(発掘) 20000221~20000331	(発掘) 351.0㎡
所収遺跡名		種別	時代	主な遺構	主な遺物
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮遺跡	集落跡 耕作地跡	中世	ピット・井戸・落ち込み・溝・畦畔・塹壕	銅銭（永楽通宝など）・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・獣骨	・中世のピット・井戸を検出。 ・中世の水田跡を検出。 ・永楽通宝などの銅銭が5枚出土。

所収遺跡名		若宮遺跡 (第31地点)		確認調査担当者 森岡秀人・辻 康男	
所在地		兵庫県芦屋市若宮町68-6番地他		発掘調査担当者 森岡秀人・坂田典彦	
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積
市町村	遺跡番号	34° 43' 36.8"	135° 18' 58.4"	(確認) 20001023～20001030	(確認) 5.13㎡
28206	WM31			(発掘) 20010409～20010423	(発掘) 63.0㎡
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
若宮遺跡	耕作地跡	中世	自然流路・足跡痕	土師器・須恵器・瓦器・磁器	中世の耕作面を検出。

ふりがな 所収遺跡名		わかみやいでき 若宮遺跡（第34地点）		発掘調査担当者 森岡秀人・辻 康男	
ふりがな 所在地		ひょうごけんあしやしわかみやちようばんち 兵庫県芦屋市若宮町71-6番地他			
コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積
市 町 村	遺跡番号	34° 43' 36.1"	135° 18' 58.6"	20001120～20001211	1120㎡
28206	WM34				
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
若宮遺跡	墓 跡 耕作地跡	弥生・中世	土器棺・護岸状遺構・溝	銅鐙・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・埴輪・土鍾・瓦・獣骨	・中世の護岸状遺構を検出。 ・中世の銅鐙が出土。 ・中世の獣骨が出土。

表紙写真 ▶ 若宮遺跡第4地点 第2遺構面（北から、竹村忠洋撮影）

若宮遺跡第25地点 SE1断面（南から、服部 寛撮影）

裏表紙写真 ▶ 若宮遺跡第10-1地点出土 柄頭・鞘尻（竹村忠洋撮影）

若宮遺跡第34地点出土 銅鍔（竹村忠洋撮影）

芦屋市文化財調査報告 第38集

若 宮 遺 跡

（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）

発掘調査概要報告書

－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－

平成14年3月31日印刷発行

発行者 芦屋市・芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL.0797-31-9066

FAX.0797-38-2089

編集者 芦屋市教育委員会社会教育部文化財課

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL.0797-31-9066

FAX.0797-38-2089

印刷所 株式会社旭成社

〒651-0093 兵庫県神戸市中央区二宮町1-2-7

TEL.078-222-5800（代）

Ashiya Archaeological Record 38



2 0 0 2 . 3

Ashiya City Board of Education, Japan